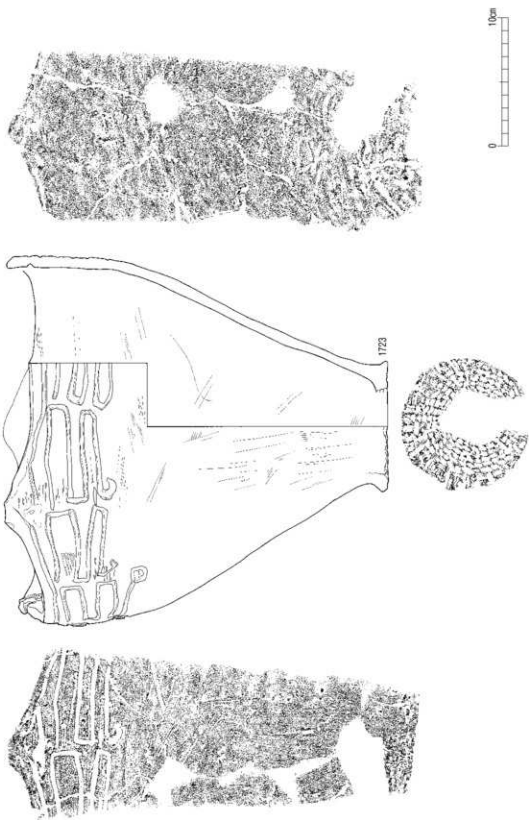
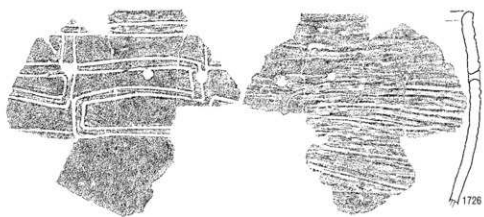
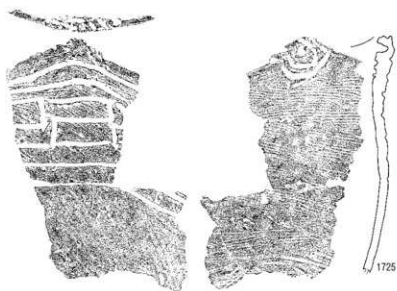
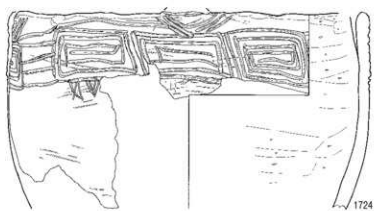


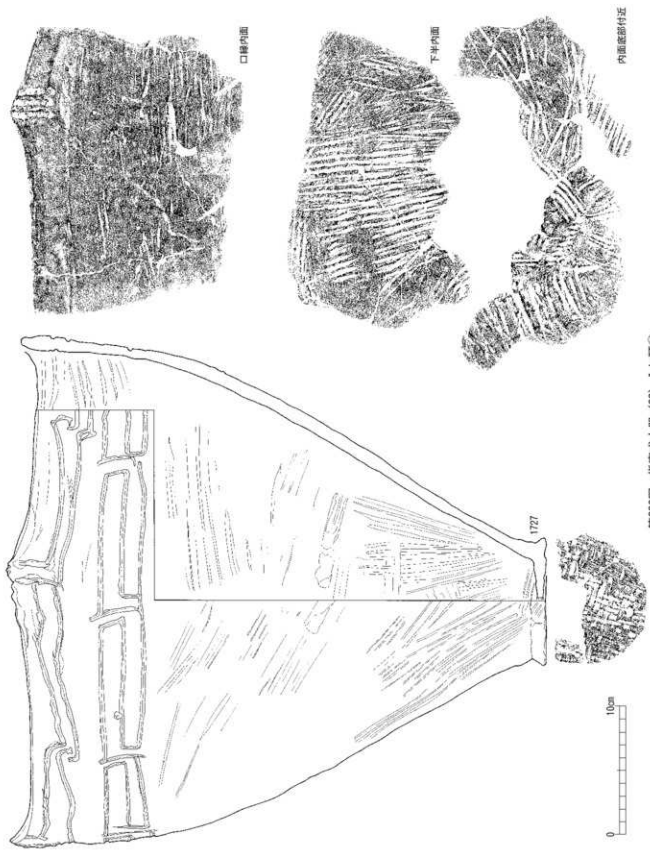
第236图 指宿式土器(80) I b類②



第237圖 指環式土器 (81) I b類23



第238图 指宿式土器 (82) I b類④



第239図 指宿式土器 (83) I b類 2b

形沈線が上に突出している。

1729は口径が34cmで、4か所に低いゆるやかな突起がある。突起内面には2つの横向きW字沈線が向かいあっている。外面は上に鉤状沈線があり、その下に矩形が描かれる。矩形の下や中にはW字文やコの字形文、つづら折り状文・渦巻文などが見られる。

1730も三角状に尖る突起部で、突起頂部から内面にかけて左右2本の沈線があり、逆三角形を描く。外面は上に2本沈線があり、そこから下にコの字形沈線などで矩形を描いており、上の2本沈線間にも突起下に縦線があって、矩形を呈す。

1731は口径が28.8cmのまっすぐ伸びる器形で、外面には縦・横・斜め・弧状などの浅い沈線で、コの字形・矩形・ブーメラン形・渦巻文などの文様が描かれている。

1732は細沈線で、上に横線が引かれ、その下に独立したものや一筆描きで3段の矩形が描かれている。

1733~1744は口縁端が外反する器形で、矩形を意識し

た文様が描かれたものである。

1733は口径が31cmで、内外に貝殻条痕を残している。上に横線があり、その下に縦・横・斜めなどの直線で矩形・三角形などが描かれている。

1734は突起部付近の破片で、ゆるやかに斜方向の矩形・下向きのコの字文・V字文などが描かれている。

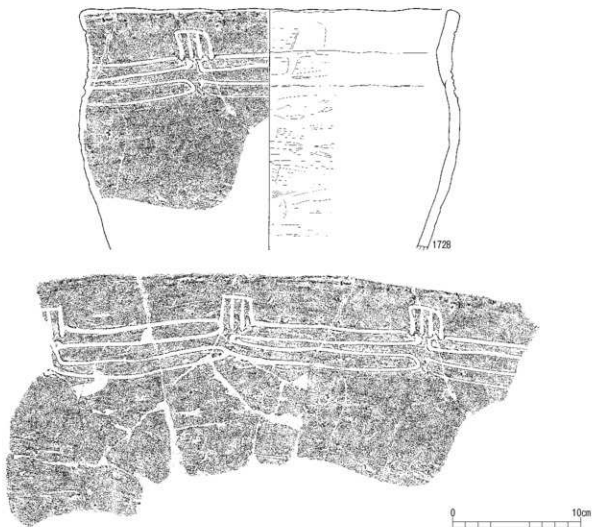
1735はやや斜方向となるが、2・3段の矩形がある。

1736は2本の入組文を交えた渦巻文風沈線と、2本の横線、三角形風になる矩形などがある。

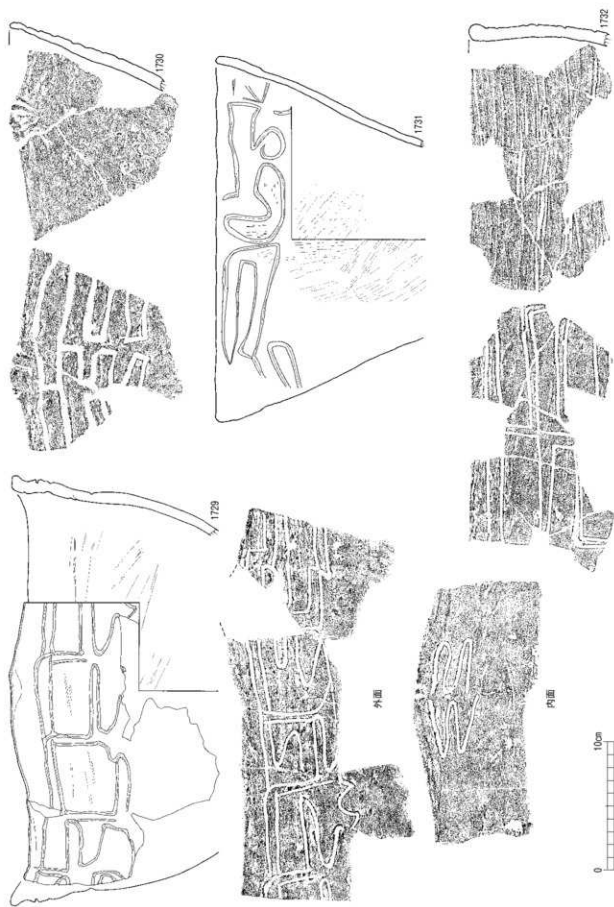
1737は細くて深い沈線で、一筆描きの矩形が2段描かれている。

1738は上の横線が上へ立ち上がる部分の破片で、その下に矩形様の文様があり、矩形内に入組文もある。左側に補修孔も見られる。

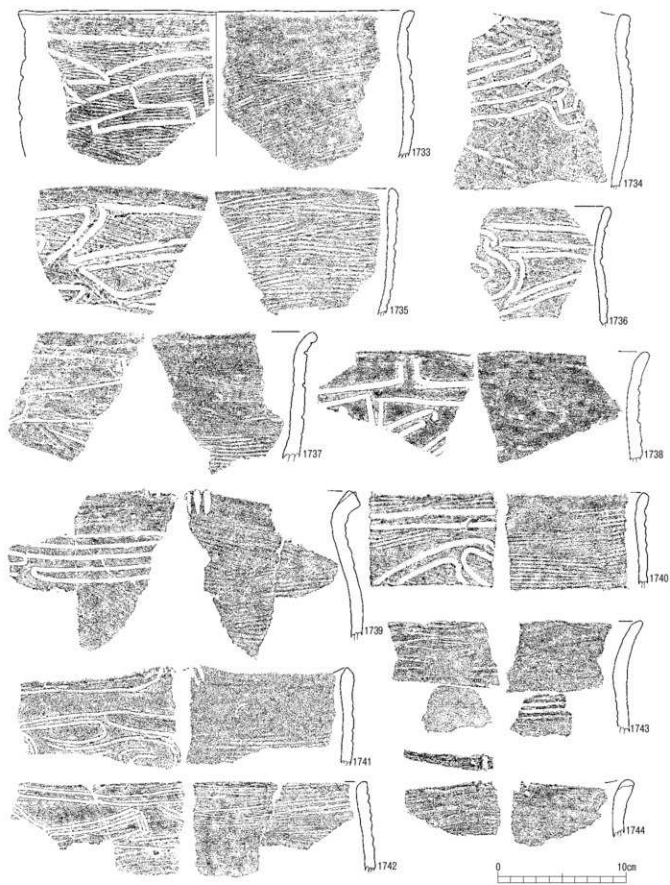
1739は端が三角状となる口縁部で、強く外反している。低く突起した部分の内側に3本以上のヘラ押圧文が見られる。外面は3本の横線の下に、曲線風となる矩形が段



第240図 指宿式土器(84) I b類②



第241图 指环式土器 (85) I b 類②



第242図 指宿式土器(86) I b類㊸

違いとなり、それぞれに横線が取り付いている。

1740は2本の横線の下に、2本沈線で、やや曲線風の矩形が描かれている。色調等からして指宿地方産と思われる。

1741は上の横線が突起部で上へ立ち上がり、その下には曲線風の矩形がある。突起下では時計回りの渦巻文も見られる。突起の内面には2本のハの字沈線があり、その右手には半月様の刺突文もある。

1742は細い沈線で上下に2本沈線が描かれ、その間には鋸歯状の2本沈線で矩形も描いている。

1743・1744は極細の浅い沈線で横線と縦線が引かれ、縦長の矩形が描かれている。縦線は上へ飛び出し、突起頂部には二枚貝刺突文がある。

(イ) 鉢 (第243図・第244図 1745～1753)

鉢には頸部でくびれてくの字になるもの、口縁が直立するもの、底からまっすぐ立ち上がる小型のものなどがある。

1745～1751は外反する器形をしている。

1745は口径が16.5cmと小型で、低い突起が4か所にあるもので、突起内面には逆三角形になるヘラ押し文がある。外面は2本の横線間に2本の縦線が引かれた矩形が

連なっている。

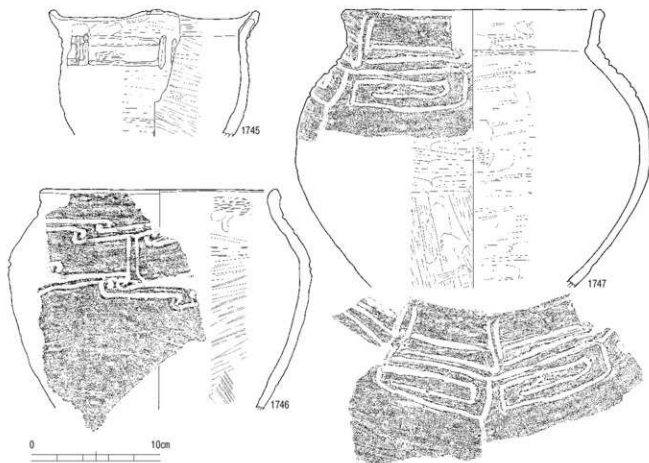
1746は口縁部が短く、肩は張っている。口径が18cmである。2本沈線が上下に2列あり、それを縦線で結び矩形としている。横沈線は入組文でつないでいる。

1747は口縁部が頸部から直に近く立ち上がる器形で、口径が20.8cmある。2段に矩形が描かれており、上は横方向の長い2本沈線を上へとび出す縦線で区切って矩形としている。下のほうは一筆描きで二重の矩形となる。

1748はやや外反さみだが直口する口縁で、口径は26cmある。上に横沈線があり、その下を一筆描きの逆コの字状沈線が連結して段違いに2段の矩形を作っている。下段の直線左端は逆時計回りの渦巻文となる。色調・胎土からして指宿地方産と思われる。

1749は端部が分厚くなる二重口縁風の口縁部で、頸部に楕円風の矩形とその下の間にミガキの加えられる2本沈線がある。さらに、その下の肩部から胴部には菱形などの直線文様が描かれている。

1750は低い山形突起のある口径34cmの土器で、口縁部はくの字状に強く短く外反し、端部は矩形におわっている。突起部内面には2段の矩形が描かれている。外面は上に1本の横線があり、その下に一筆描きで矩形が描か



第243図 指宿式土器 (87) I b類②

れている。

1751は強く外反し、端部が丸く分厚くなる。外面は上に横線があり、下に矩形が描かれている。

1752・1753は底部からまっすぐ口縁部へ向かう小型の鉢である。

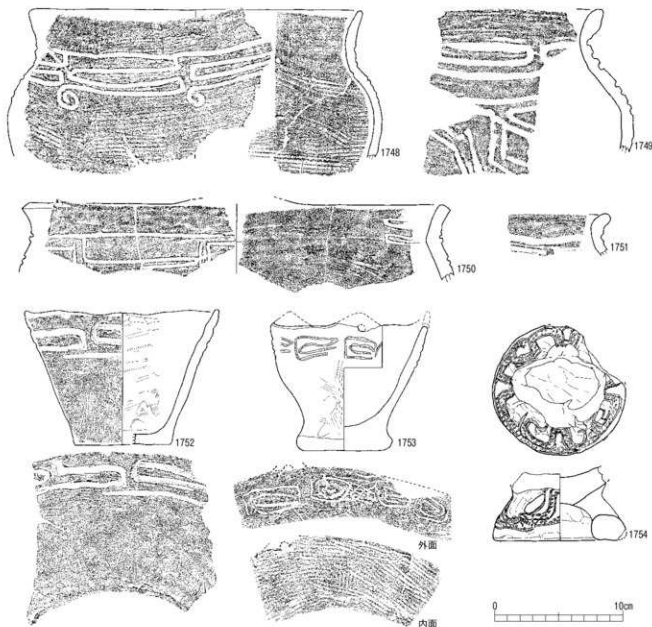
1752は口径15cm、底径3.8cm、高さ10.4cmで、底はヘラでナデられ、白粉が付いている。外面は中央に渦巻文があり、その脇に矩形があるが、中央では上の線の端が上へ立ち上がる。下には横線がある。

1753は口径12.5cm、底径7.6cm、高さは突起部が欠けているため不明だが、11cmほどかと思われる。先が尖ると思われる突起が3か所にあり、下には円孔がある。外面

には細い一筆描きで、9か所に二重の矩形が描かれている。矩形間の一部には斜格子文も見られる。内面の突起付近にも矩形が見られる。

(ウ) 台付鉢 (第244図 1754)

脚台部のみが残っている。横長矩形の透しが4か所にあり、脚台部の直径は10.5cmである。脚台の橋部から裾部にかけて2本沈線で、直線が描かれており、主として矩形や凸形を呈している。沈線間には巻貝殻頂による小さな刺突文がある。



第244図 指宿式土器 (88) I b類③

ウ Ic類土器 (第245図～第267図)

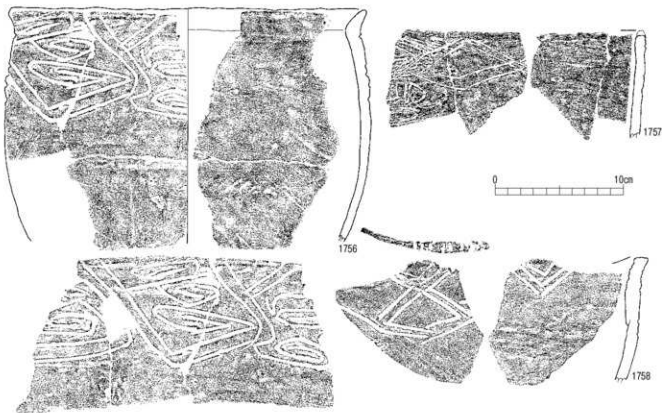
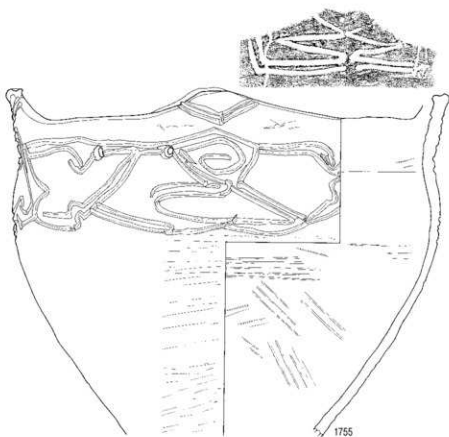
Ic類土器は、横線や斜線を利用して菱形主体の文様を描くもので、器種には深鉢と鉢がある。

(ア) 深鉢 (第245図～第265図 1755～1844)

これは大きく、口縁端から下へ向かって斜線を用い、菱形を描いており、上の方は逆三角形となるもの、上下に横線を引き、その間に斜線を引き菱形を描くもの、小さく斜線を交差させ、斜格子となるもの、横長の菱形で、丸みをおびるもの4種に分けられる。これらの中には直線が入組文でつながれたり、鉤状になるものや、曲線風となるものなど多い。

1755～1784は口縁部の下に菱形が描かれるもので、口縁端から下へ伸びるものは逆三角形の文様もある。

1755は4か所で山形突起となるもので、口径は35cmである。突起

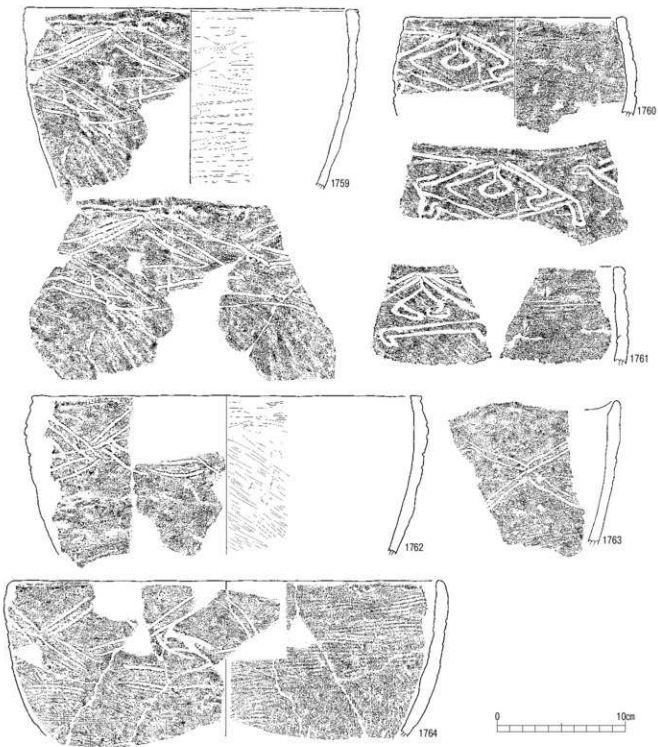


第245図 指宿式土器 (89) Ic類①

部の頂部は平坦で、外面には逆三角形の2本沈線があり、内面には一筆描きによって矩形・三角文・菱形文が施されている。外面は入組文でつながる横・斜方向の沈線で、菱形を主として三角形・逆台形などの文様が描かれ、突起下には渦巻文がある。2個の補修孔もある。色調・胎土からして指宿地方産である。

1756は口径が28cmで、口縁端近くで短く外へ屈曲している。細い2本沈線で口縁端から一筆描きの菱形を主とした文様があり、菱形の中に曲線風の逆三角形や矩形・楕円文などがある。

1757は直立する口縁部で、突起が端にある。細い線で菱形を描いているが、突起下では菱形の下に王冠状沈線



第246図 指宿式土器(90) I c類②

や栴門文がある。

1758は山形突起となる部分で、突起内外面にはそれぞれ3本の短い斜線で逆三角形を描いている。突起口唇部には巻貝殻頂押し文が9列押されている。外面には2本沈線で菱形が描かれている。

1759～1764はやや内反ぎみにまっすぐ立ち上がる器形をしている。

1759は口径が26.4cmで、口縁端は粘土を貼り付けて分厚くしている。口縁部近くから細い2本沈線で菱形が縦に描かれ、下には横線もある。

1760と1761は同一個体と思われるもので、分厚い。口径は19.2cmで、菱形と三角形が描かれ、その頂部から下へ三角形の線が垂れている。直線の端はそれぞれ下や左右に屈曲し、とじている。

1762～1764は2本沈線の菱形が描かれている。

1762は口径が32.7cmで、口縁端の断面は矩形を呈し、外面がでこぼこしている。

1763は山形突起の頂部にヘラ刻みがあり、外面は横に菱形が並ぶ。

1764は菱形の下に横線があり、口径が34.5cmである。下の方は貝殻条痕を残しているが、文様部分は良くナデ

ている。

1765は口径が26.7cmで、4か所に山形の三角突起がある。外面は斜方向の2本沈線で、菱形や三角文が描かれている。

1766～1770は外反するものである。

1766は長くくの字状に折れる口縁部で、細い横や斜方向沈線で、横長の菱形や三角形様の文様が描かれている。

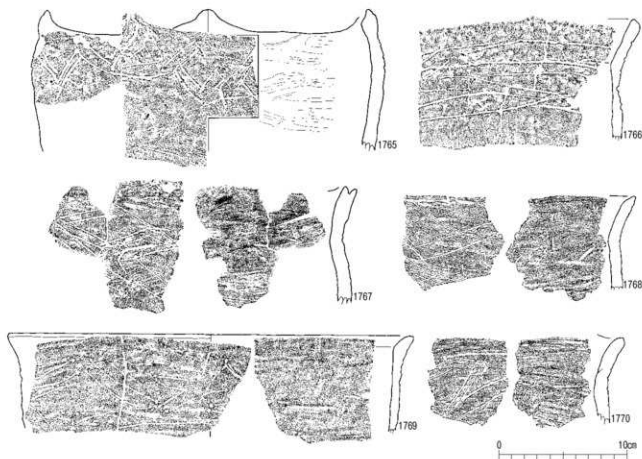
1767はやや分厚くなった低い突起部で、頂部には刺突文があり、外面には2本沈線で菱形や三角文が描かれているが、2本沈線内に並行横線が引かれ、はしご状を呈している部分がある。

1768の口縁部はでこぼこしており、外面には細い2本の斜線で菱形や三角形などが描かれている。これも1767と同じように、2本沈線間に平行横線が引かれていたり、斜線のある部分があたりする。

1769は端部が小さく外へ折れる土器で、口径は32.2cmである。外面は端を押さえている細沈線で三重の菱形や三角形が描かれている。内面はヘラケズリで仕上げ、軟質である。

1770は横線や2本の菱形や斜線が描かれている。

1771は口径31cm、底径12cm、高さ30cmで、ややひずん



第247図 指宿式土器(91) Ic類③

だ器形をしている。外面は入組文でつながる2本沈線を上下に引いたあと、左下がりの2本斜線を引き、菱形を描くが、半分ほどは斜線のない部分がある。底部はやや外へ張り出す安定した平底で、輪状網代直路が中央に残り、周辺はナデ消している。白粉が付いている。

1772～1778は内反ぎみの口縁である。

1772は口径が30.4cmで、3か所に山形突起がある。突起部は頂部から内面にかけてヘラ押圧文があり、内面はヘラケズリで仕上げるが、文様部のみ丁寧なヘラナデで仕上げ、菱形を描くが、下の方が外へ開く。外面は端の丸い2本沈線で菱形を描いているが、突起部の下はS字状などで三角形となる。

1773は4か所のゆるやかで低い台形状突起があり、口径は26.3cmである。外面は2本の細沈線で雑な菱形や三角形が描かれている。1cm近くの大きな礫を多く含んだ粗い土を用いている。

1774は橋状突起部分で、斜めの2本沈線によって菱形や三角形が描かれている。内面の端近くで、短く外へ屈

曲している。

1775の外面は2本沈線によって、丸みをもった菱形が描かれている。

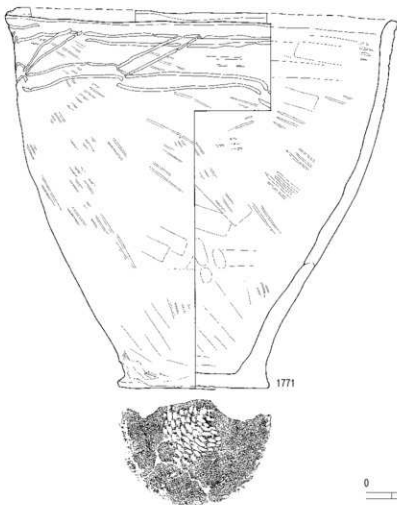
1776は低い突起部で、突起内面には4本の右下がり斜線があり、外面には2本沈線により2段に菱形文が描かれている。

1777は低い突起部で、突起部は二枚貝押圧文を施したあと、上から押さえて内外へ張り出し、幅広く作っている。外面には2本沈線の菱形文が描かれている。

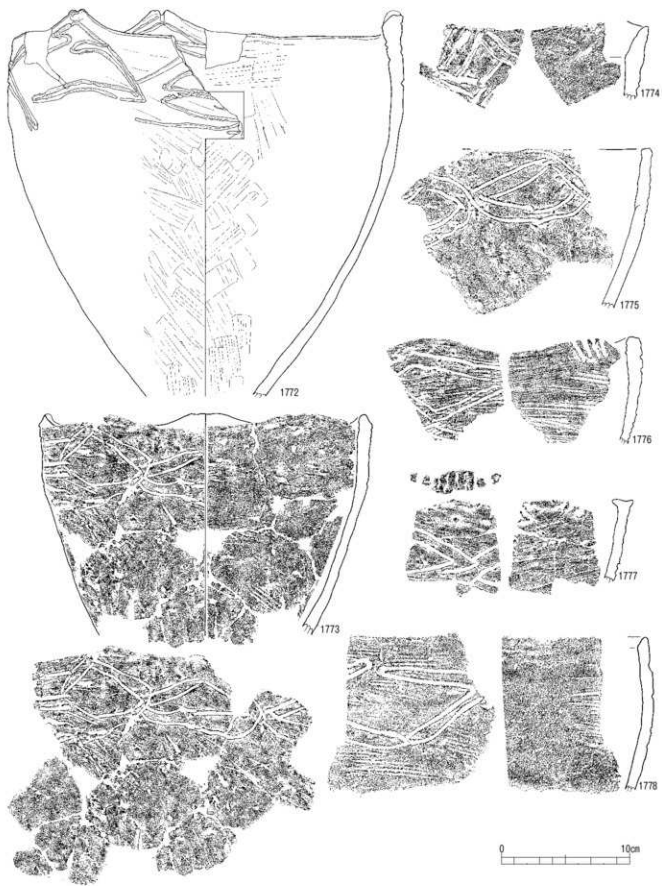
1778は山形突起部近くの破片で、突起部下には渦巻文が、その脇には端が丸くとする向かい合うV字状の2本沈線で菱形が描かれている。

1779～1781はやや外反する器形で、4か所に突起がある。

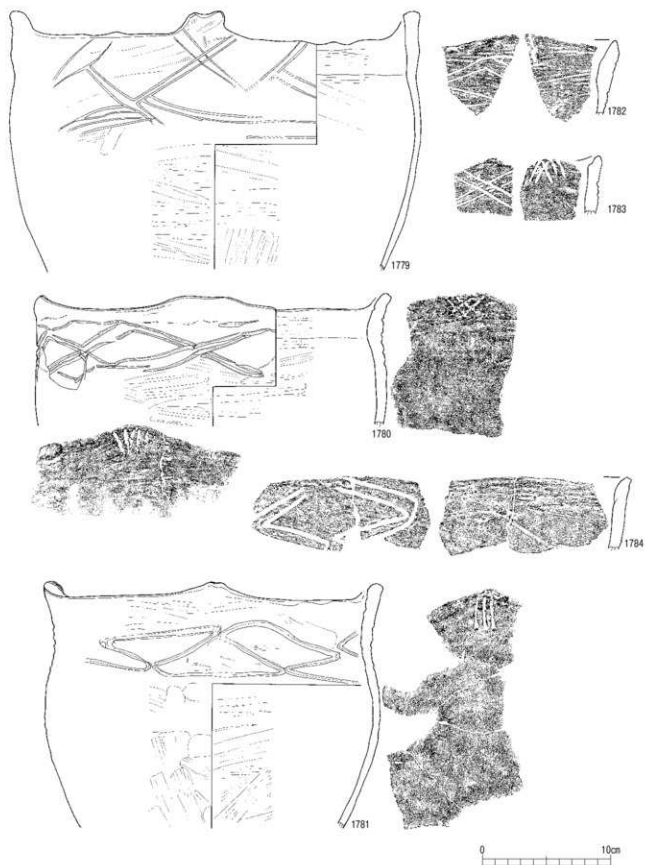
1779は口径が32.4cmで、薄い作りとなり軽い。突起は矩形状となっている。外面は細い2本沈線で斜線や横線を引き、下に横線が、その上に菱形や三角形を描いている。



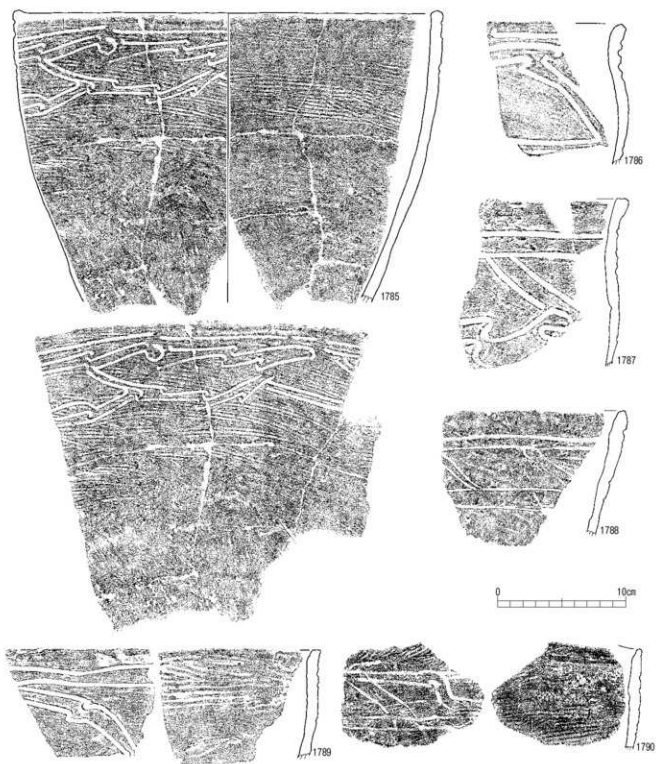
第248図 指宿式土器(92) Ic類④



第249图 指宿式土器(93) I c類⑤



第250图 指宿式土器(94) Ic类⑥



第251图 指宿式土器(95) Ic類⑦

1780は口径が28.2cmで、4か所の突起のうち1か所だけはヘラで調整してやや平坦にしている。突起内面は二枚貝腹縁による4・5本の縦線あるいは斜格子で逆三角形の文様が描かれている。外面は2本沈線の短絡線によって菱形や逆三角形が描かれている。

1781は口径が26.8cmで、ゆるやかな山形突起内面には3本の端を押さえた縦沈線が描かれる。外面は一筆描きで三角形と逆三角形が交互に描かれている。薄い作りで軽い。

1782～1784は内面口径端が短く外反するもので、1782・1783は山形突起部分である。

1782は頂部から内面にかけてヘラ沈線があり、外面には2本細沈線の菱形や三角形が描かれる。

1783も頂部から内面にかけて右下がりとし左下がりの斜沈線が3本引かれ、ハの字状となる。外面は左下がり斜線を引いたあと右下がり斜線を引き、菱形風に描いている。割れ口は外半分が白っぽいものに対して、内半分は灰がかっている。

1784は下の端をとじる横V字文を向かい合わせ、菱形を描いている。

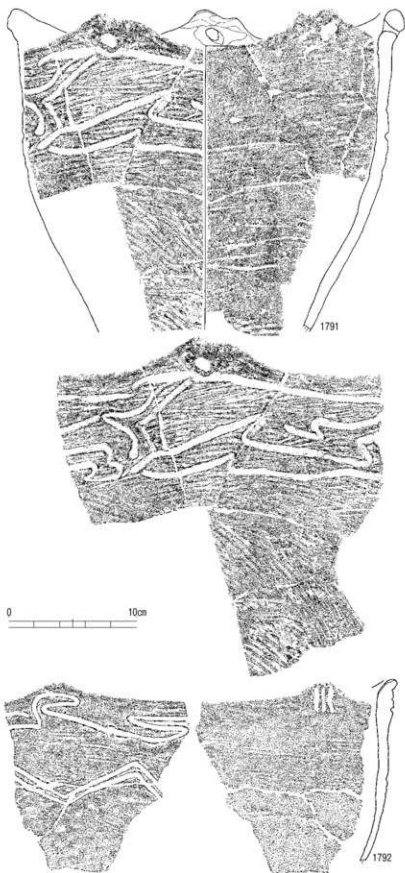
1785～1830は上下に横線のあるものである。

1785は口径が34cmで、入組文でつなぐ2本沈線で菱形を連結しており、その上には途中で切れる横線が引かれている。

1786～1790は2本沈線の横線が上下にあり、その間に2本の右下がりの斜線を引き、菱形となる文様である。

1788がいずれも直線であるのに対して、1786・1787・1789は斜線や下の横線を連続の入組文でつなぎ、1790の横線は鉤状につないでいる。

1791～1794は4か所に山形突起のあるものである。



第252図 指宿式土器 (96) I c類⑧

1791は口径が31cmで、突起の下に大きな穿孔がある。外面は上に1本、下に2本の横線があり、その間を左下がり斜線で結び菱形を描いているが、下の横線と斜線は連続する入組文でつなく直線となっている。

1792の突起部内面には3本の縦沈線が描かれている。外面の上には連続する入組文でつなく横線が、下には2本の鋸歯文があり、菱形文を描いている。

1793は口径が36.8cmで、突起内面は3本沈線による人字文があるが、場所により文様がやや異なる。外面は入組文でつなく2本横直線を上下に配し、間には菱形や三角形を引き、突起部では渦巻文や三角文もある。菱形等の中には楕円文などがある。

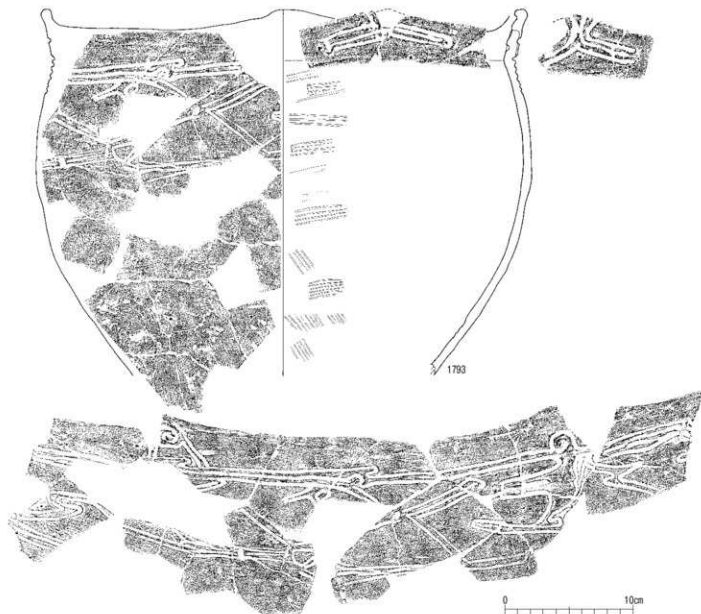
1794は口径が34.5cmの、ゆるやかに口縁端が外反する

もので、外面は上に2本の横沈線があり、その下に入組文でつなく直線で連結する菱形を描いている。

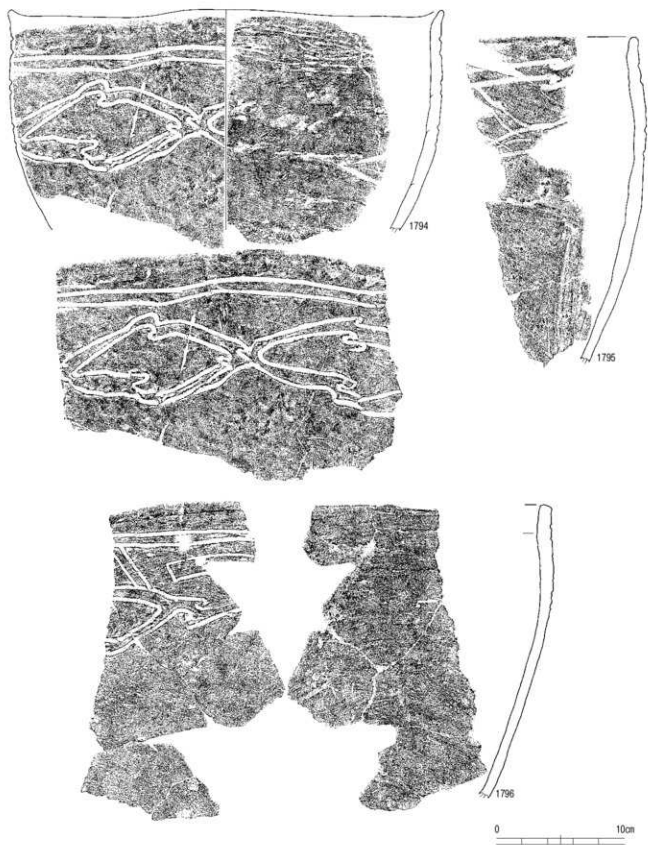
1795は入組文でつなく2本の横沈線が上下にあり、右下降り斜線との組み合わせで菱形を描いている。

1796は上に横線があり、その下に斜線や矩形、楕円に近い菱形文などが描かれている。横線の中には入組文もある。

1797は低い突起部を4か所にもつもので、口径は32cmある。突起頂部には右下降りと左下降りの斜線で3本ずつでハの字文が刻まれている。外面は2本あるいは3本沈線で、横・斜め・縦線が引かれる。上下に横線があり、その間を縦線で区切り、区切った部分に斜線を引き、三角形を描いている。



第253図 指宿式土器(97) Ic類⑨



第254図 指宿式土器(98) Ic類⑩

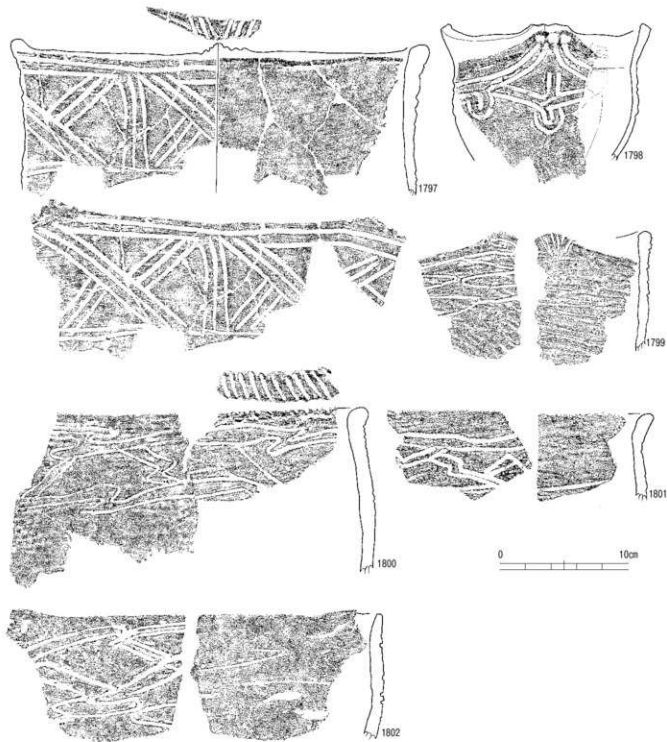
1798は口径が16.5cmと小さく、4か所に台形状突起がある。外面は、突起部で立ち上がる2本の横沈線と、入組文となる直・曲線などで菱形やU字文などを描いている。突起頂部には3個の巻貝刺突文がある。

1799は突起外面から内面にかけて6本のV字状沈線が引かれる。外面は突起下に反時計回りの渦巻文があり、

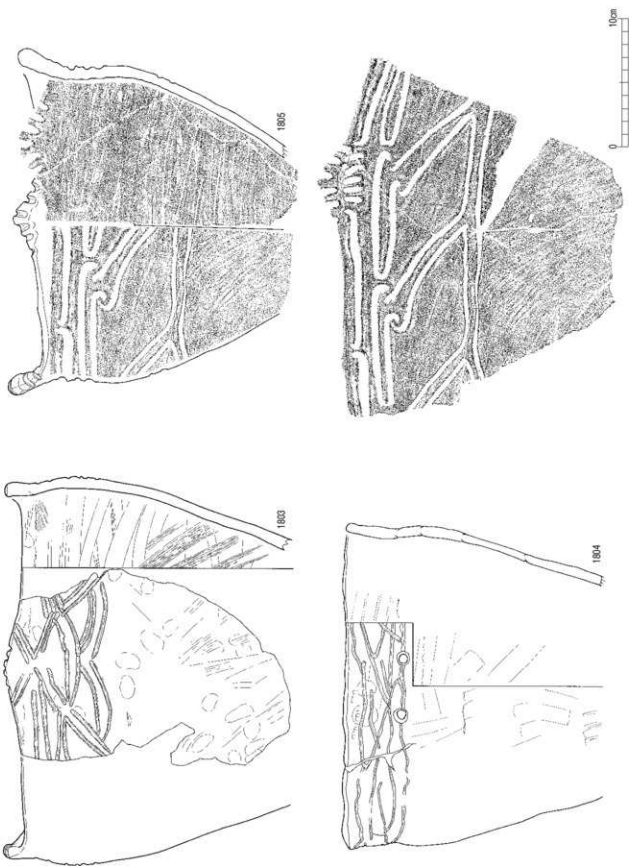
上下に横線、その間に丸みをおびた菱形などがある。

1800は分厚い作りで、口唇部の一部に11列以上のヘラ刻目文があり、外面は入組文崩れのある2本沈線で上下に横線、その間に右下がりや左下がりの斜線を引き、菱形を描いている。

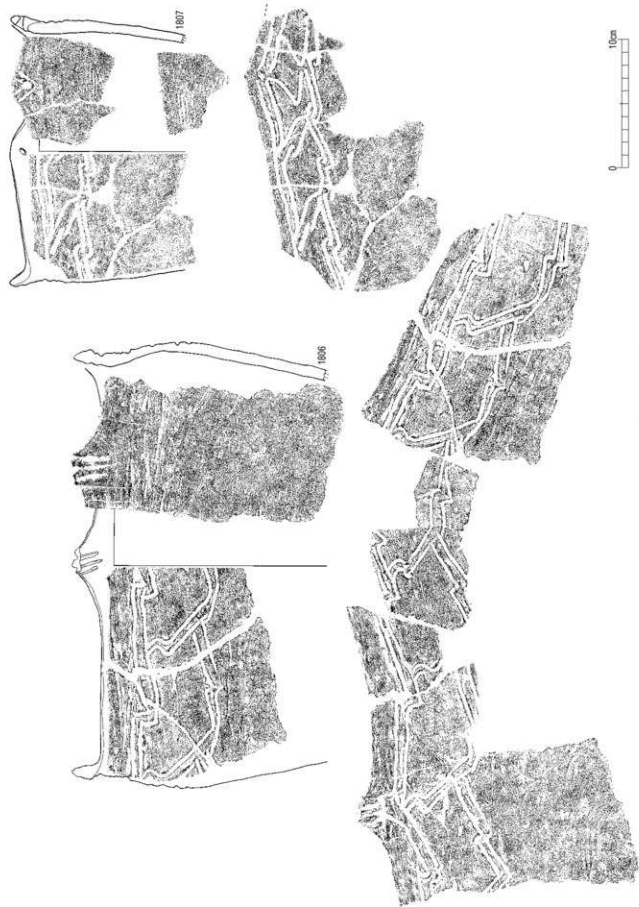
1801も1800と同じような文様だが、間の直線は鉤状と



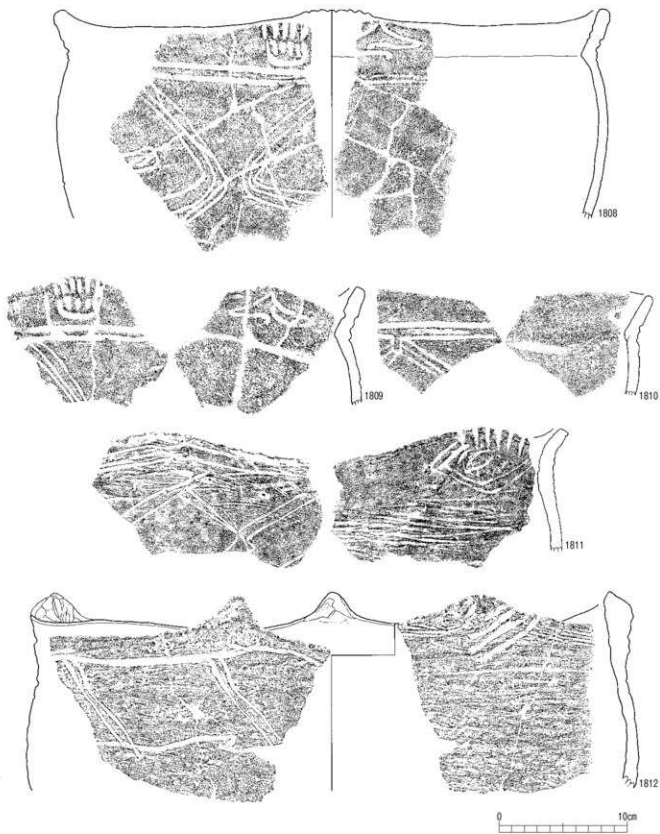
第255図 指宿式土器(99) I c類①



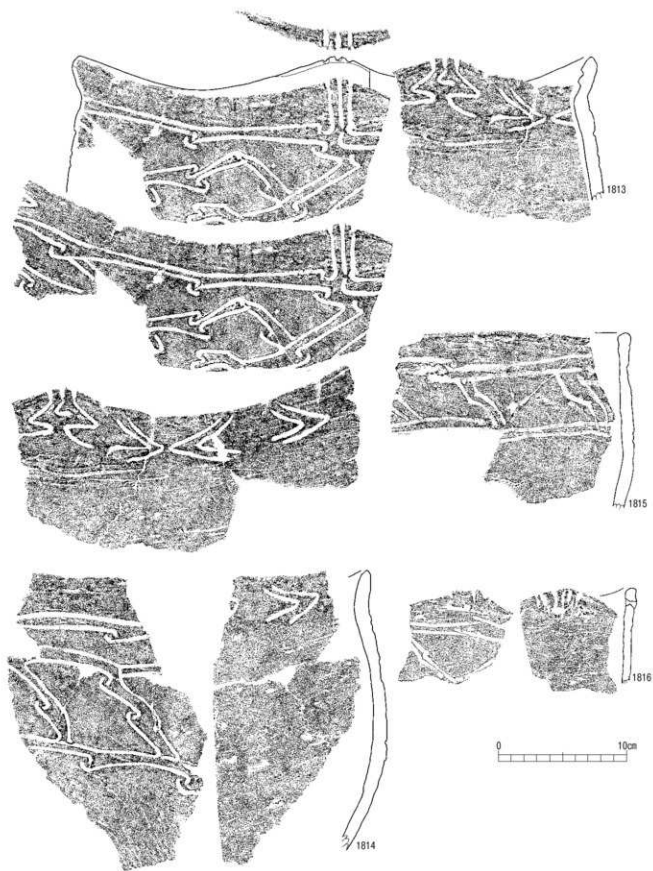
第256号 指宿式土器 (100) Ic類②



第257圖 指宿式土器 (101) I c類⑬



第258图 指宿式土器(102) I c類⑭



第259图 指宿式土器 (103) I c類⑯

なり、逆三角形や三角形・菱形が描かれている。

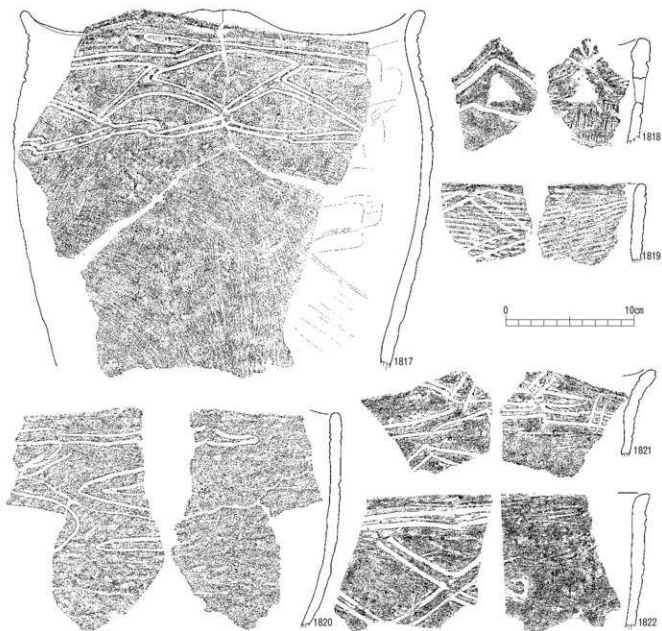
1802も同じような文様で、上に菱形や三角形が引かれ、下には長楕円形となった連結文がある。

1803は口径が30cmで、4か所の山形突起がある。突起口唇部には5列のヘラ押圧文があり、外面に2本沈線の逆三角形が描かれている。その下には2本沈線で、菱形と三角形、逆三角形がある。

1804は口径が25.8cmで、口縁部はでこぼこしている。外面は浅い細沈線で、横・斜め・波状の沈線があり、菱形や三角形が描かれている。内外面の両側から穿たれた2個の大きな補修孔がある。

1805は口径が30cmで、4か所の山形突起がある。突起部には外面から内面にかけて6列の押圧文があり、外面にはさらに5つの押圧文がある。外面は上に横長のコの字状直線があり、その下に端がとじる横長楕円形が連続してある。この楕円と入組文でつなぐ右下がり2本斜線があり、下は横線となる。これによって斜状の菱形が連結している。

1806も同じような器形で、口径が33cmある。突起部内外面に3本の二枚貝腹縁の刺突文がある。外面は鉤状に曲がったり、入組文で連結する横・斜線で、連続する菱形を描いている。



第260図 指宿式土器(104) Ic類⑬

1807は口径が20.8cmで、4か所に山形突起があり、突起内面には斜方向2本あるいは3本の短沈線で逆三角形を描き、交差する部分に穿孔がある。外面は上に横沈線が引かれ、その下は入組文で連結する斜方向・横の2本沈線で、菱形文が描かれている。突起下の菱形文は入組文のない小さな菱形である。

1808～1810は口径内面が外へ屈曲するもので、突起がある。

1808と1809は同一個体で、口径が43.8cm、4か所に低い山形突起がある。突起頂部には、7か所のヘラ押し文が、外面に上向きのコの字状沈線があり、その中に4か所のヘラ押し文が見られる。突起内面には端が押さえられる三角状の沈線がある。外面には横方向の2本沈線があり、その下に3本沈線による曲線状菱形が描かれ、中には小さな矩形がある。

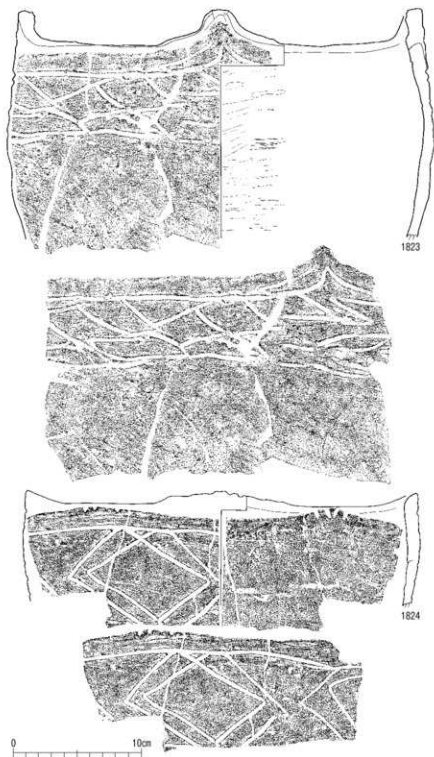
1810は突起部近くで、内面に楕円沈線がある。外面は上に2本横線があるが、突起部近くで下の沈線はU字状に下がり、その下には3本沈線の鋸歯文で、菱形と逆三角形を描いている。

1811は外反する山形突起部で、突起頂部から内面に6列以上のヘラ押し文があり、内面はその下に2本沈線の菱形文が描かれ、その中には楕円文がある。外面は上に2本横線があり、その下に浅い沈線で鋸歯状文が描かれ、逆三角形と菱形が2段に描かれている。

1812は口径が44cmあり、4か所の三角状突起があるが、突起部は分厚くなる。突起頂部から内面にかけて左下がりの3本沈線がある。外面は上下に幅広の横沈線があり、その間に右下がりの2本沈線があり、間は菱形となる。下の横線は入組文でつながれる。

1813～1816は入組文でつなぐ直線で文様が描かれている。

1813は口径が40.5cmと大型で、4か所の突起がある。



第261図 指宿式土器 (105) I c類⑦

突起頂部にはヘラ押し文がある。外面は突起部に3本の縦線があり、上下に横線を引き、そのあと斜線を引くことによって菱形文を描く。内面の突起下は3本のW字文で、その脇は2本のV字文で菱形とする。

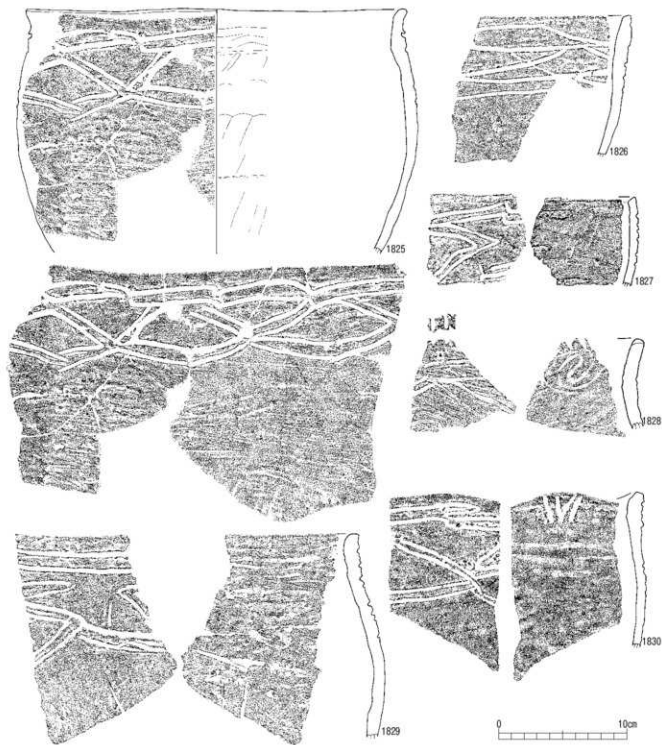
1814も1813と似た文様だが、上の横線が2段ある。

1815も似ているが、斜線は入組文が崩れた形となっており、内面は剥離が目立つ。内面に文様はない。

1816はゆるやかな山形突起で、突起頂部から内面は6列のヘラ押圧文があり、その下に穿孔が穿たれている。薄い作りで、外面は粗い2本沈線で、上に横線が、その

下に逆三角形があり、端は押さえている。

1817は口径が31cmで、山形突起が4か所あり、口縁部は外反している。突起部内面は細沈線の刻みがあり、外面には上下に2本の沈線があり、間には鋸歯状沈線で三角形・逆三角形・菱形文が描かれる。



第262図 指宿式土器(106) I c類¹⁸

1818は尖った三角突起で、外面は口縁に沿った直線を引き、その下には三角状の穿孔がある。2本沈線の下の方は突起部で穿孔を避けており、突起部内面は頂部から内面にかけて2本ずつの沈線で逆三角形を描く。

1819は貝殻条痕が良く残り、外面は1本の横沈線と、2本沈線による菱形が描かれている。

1820は低い突起をもつもので、外面は2本沈線により上に横線、その下には菱形や楕円・逆三角形がある。突起内面には長三角形があり、途中で分かれる。

1821はやや外反する突起近くの破片で、突起内外には2本沈線による逆三角形が描かれる。外面は上に横方向の2本沈線があり、その下には菱形がある。内面は2本沈線による鉤状に折れる横線や楕円・縦線などが描かれている。色調・胎土からして指宿地方産である。

1822は2本沈線による横線の下に、斜線で菱形や逆三角形が描かれている。線の端を押している。

1823・1824は4か所に突起のあるものである。

1823は小さい山形突起で、口径は31.8cmである。外面は上下に1本の横線があり、中に斜方向沈線で逆三角形や菱形が描かれている。上の横線は突起部で上へ立ち上がる。

1824は低い山形突起部で、頂部には4か所のヘラ押し文が見られる。外面は上に1本の横線が引かれ、下にはややずらした菱形が描かれている。

1825は口径30cmの外反した壺形をしたもので、上に鉤状の横沈線を引き、その下には二重菱形が横に連なっている。

1826は直口するもので、外面は上下に2本横線を引き、中に斜線があり、菱形もしくは三角形を描いている。

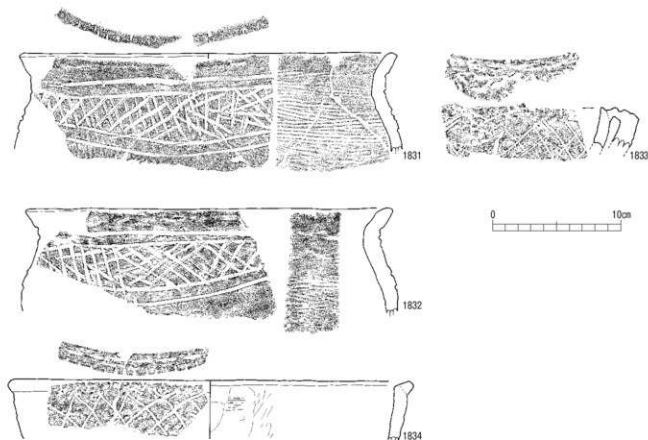
1827は上下に鉤状沈線があり、中に2本沈線の菱形を描いている。

1828は外反する器形の突起部で、口唇部から内面にヘラ刻み、内面に時計回りの渦巻文が描かれている。外面には2本沈線で横線と鋸歯文があり、この鋸歯文の中には渦巻文がある。

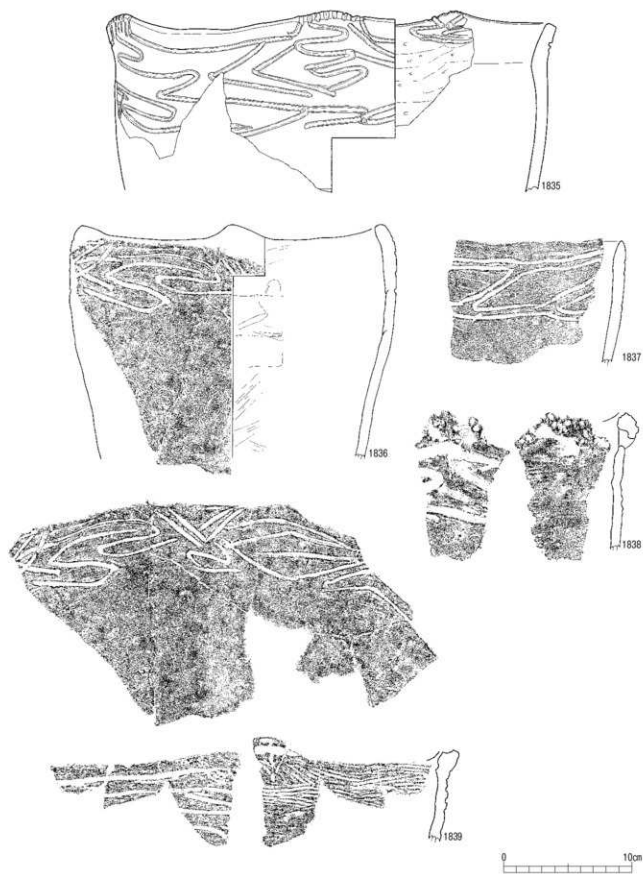
1829は内傾する器形で、2本沈線で上に横線、下にW字文ないしは菱形らしき文様と横線が描かれている。

1830も低い突起部で、外面には細い鉤状あるいは連続する入組文でつなぐ沈線で上下に横線、中に三角形ないしは菱形が描かれている。突起内面には左右2本ずつの斜沈線で逆三角形が描かれている。

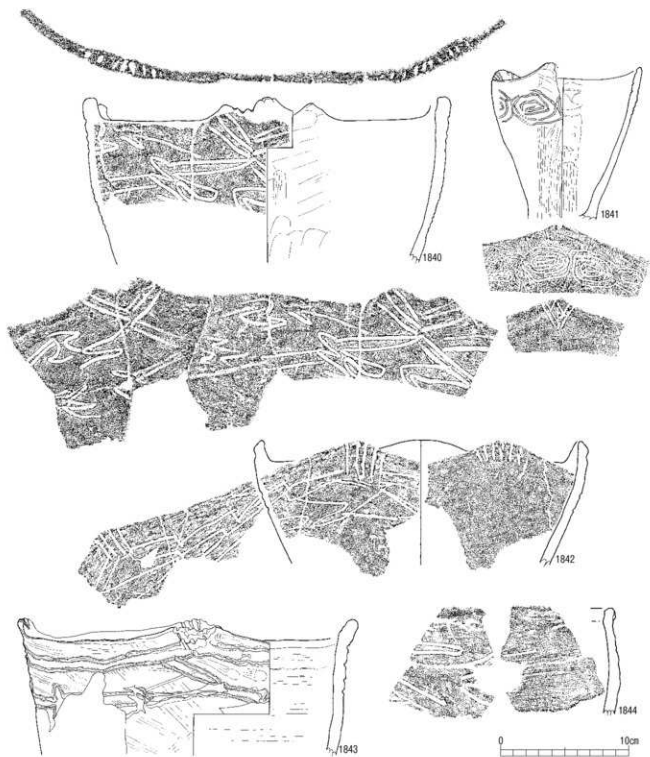
1831～1834は斜格子文が引かれるものである。



第263図 指宿式土器 (107) Ic類⑨



第264图 指宿式土器(108) I c類②



第265图 指宿式土器 (109) Ic類②

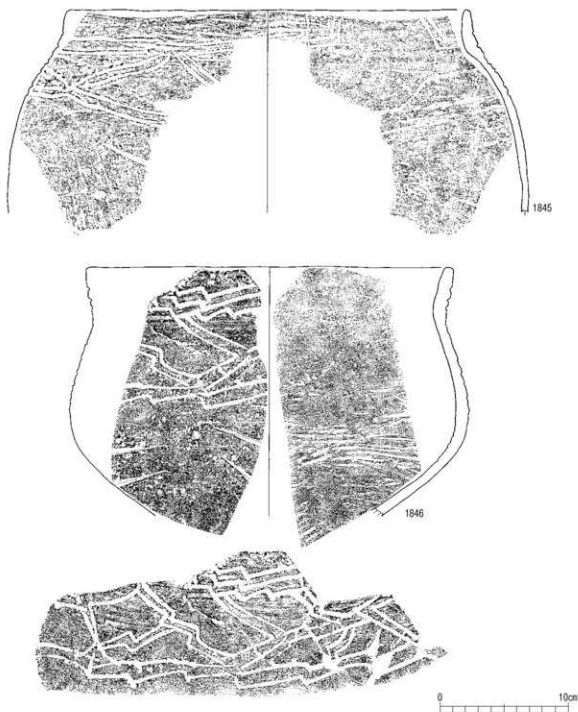
1831と1832は同一個体で、口径が30cmあり、分厚い作りである。上下に2本沈線、中に右下がり先に引かれる斜格子文がある。口唇部の一部に浅いヘラ刻みがある。

1833と1834は同一個体と思われる、口径が32cmで橋状把手が付く。口縁部は貼付突帯で逆L字状を呈し、外面と把手には細い斜格子文がある。口唇部には横向きの細沈線が切れ切れに続き、把手部では2列になる。口縁端外

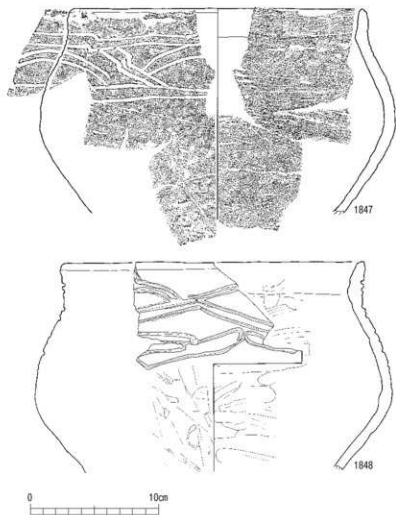
面にはヘラ刻みがある。

1835～1844は変形の変形文で、1837・1844以外は突起がある。

1835は口径が35cmで、5か所に突起がある。口縁端近くで外反し、ゆるやかな突起部外面には6～9列のヘラ押圧文が、内面には2本のW字文が向かいあい、人形を呈している。外面には突起部で上へ立ち上がる横線の下に横向きV字文や、縦向きのつづら折り状沈線などが描



第266図 指宿式土器 (110) I c 類②



第267図 指宿式土器(111) Ic類②

かれ菱形や楕円を呈している。

1836は口径が24.5cmで、三角状突起がある。外面は突起左に2本の逆三角形があり、その脇には中央に横線のある菱形文やつづら折り状沈線や楕円などがある。

1837は上下に2本沈線があり、その間をつないで菱形文を作る。

1838は山形突起上に粘土を貼り付けて分厚くしており、その内外面や口唇部に巻貝刺突文がある。外面には上下に横線を引き、中に斜線や楕円が文様を描くが、そのあと突起下に半円形の穿孔を設けている。

1839は突起部が分厚く、外面は上に2本横沈線、その下に横長菱形が描かれる。突起口唇部には直交する4本沈線で逆三角形を描き、そのあと直交したヘラ押し文を施す。内面には2本の巻貝押し文で逆三角形を描き、端を押さえている。

1840は口径が27cmで、4か所に二つ山の突起のあるものである。突起口唇部にはヘラ刻みがある。外面には逆三角形の2本沈線や菱形、つづら折り状などの細い沈線

がある。

1841は口径が7.9cmの小型土器で、3か所に三角形の突起がある。細い沈線の文様があり、外面には四重あるいは五重の菱形が2つ、三・四重の楕円が8つある。突起内面には2本あるいは3本の逆三角形と三角形が重なっている。台付のものと思われる。

1842は山形突起の外面と内面に縦線が引かれるが、外面4本の内面は5本、外面5本の内面は6本と規則性がある。外面は鉤状の横線下に菱形や三角形・W字文などが描かれている。

1843は突起の内面から外面にかけて3～5本のヘラ沈線があり、上に2本横沈線、下に鉤状の2本横沈線があり、間には2本沈線が斜方向に2か所引かれている。上の横線は突起部で上へ立ち上がり、下の沈線が1か所で上に凸状となって立ち上がっている。

1844は口縁端を粘土紐貼り付けで分厚くし、外面には細い沈線で楕円・菱形を描いている。

(イ) 鉢(第266図・第267図 1845～1848)

壺形の鉢である。

1845は口縁がやや内傾し、口径は32cmである。肩が張っており、色調や胎土等から指宿地方産と思われる。外面は2本沈線で、上下に横線があり、その中は端を閉じる鋸歯文で三角形あるいは菱形を描いている。内面も2本沈線で、矩形や楕円が描かれている。薄い作りである。

1846は口径が28.6cmで、鉤状直線の上に3本、下に2本の横線があり、間には菱形が描かれる。曲線や横線もある。

1847も1846と似た器形・文様だが、間の菱形内には山形の曲線文が描かれている。口縁端に粘土を貼り付け、玉縁状となっている。

1848は口径が22.4cmで、2本沈線によって菱形や三角形、矩形、長楕円形などが描かれている。

Ⅰ I d類土器 (第268図～第284図)

I d類土器は、三角形を主とした文様で、鋸歯文だけのもの、横線と鋸歯文の組みあわさったもの、単独の三角文のもの、三角文と楕円文の組み合わせるものなどがある。

器種には深鉢・鉢・台付鉢がある。

(ア) 深鉢 (第268図～第283図 1849～1953)

1849～1869は鋸歯文を主体とする文様である。

1849は口径が50cmと大型で、幅の広い台形突起が4か所あり、突起頂部には12列の押しき状押圧文がある。外面は口縁端から5本の鋸歯文が描かれたあと、その間に2～6本の幅広横線で埋めている。

1850・1851は小さな分厚い三角突起がある。1850は上から1本・2本・2本と横線が引かれたあと、2本の鋸歯文が描かれている。1851は4か所に突起があり、外面に3本の鋸歯文があり、下には2本の横沈線がある。

1852は幅広に立ち上がる口縁で、口唇部に刻みがある。2本横沈線の下に斜沈線がある。指宿地方産である。

1853は外反する分厚い突起部で、外から内へ5本の縦沈線が引かれ、内では逆三角形となる。外面は突起部で立ち上がる横線があり、下に三角形や菱形が描かれる。

1854は口径が35.8cmで、やや内傾している。外面には三角形や、縦方向のつづら折り状文がある。

1855～1859は突起を有するものである。

1855は紐状突起が貼り付けてある。鋸歯文が上にあり、その下に鉤状となる2本沈線がある。

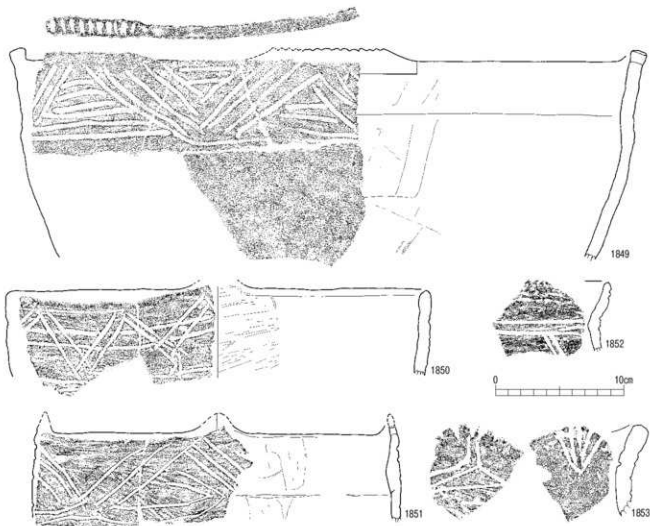
1856は三角突起で、外面に2本鋸歯文があり、突起内面は逆三角形の中央に縦線がある。

1857は口径が24cmで、4か所に先の尖った三角突起がある。突起口唇にはヘラ刻みがある。外面には三角文があり、その間に横線がある。

1858・1859は山形突起で、1858の内面には逆三角形となる3本の縦線があり、外面は上に横線を引いたあと、右斜線、左斜線、下線と引き、横線と鋸歯文になる。

1859の外面は2本の鋸歯文の下に、1本の横線がある。

1860は口径が35cmで、3本ずつの左下がりと右下がり



第268図 指宿式土器 (112) I d類①

斜線で三角形を描き、中央の斜線は内向きのJ字文となる。三角形の中には2本の逆U字文などがある。

1861は口縁端に二枚貝腹縁の刺突文があり、その下に鋸歯文が描かれる。

1862は粘土紐を貼り付けて把手の高い突起とし、外面には二枚貝腹縁刺突文と細沈線の鋸歯文がある。

1863は口径16cmの小型のもので、外面はゆるい2本の横長鋸歯文が続き、鋸歯のへこみ部分から逆L字や逆J字の文様が上へ立ち上がっている。

1864は上に途切れる横線があり、その下に2本鋸歯文があるが、へこみ部分から下にL字文が描かれている。

1865は突起外面に2本の逆三角形沈線が、内面には左右2本ずつの沈線で逆三角形を描き、その下に巻貝刺突文が3個ある。外面には2本斜線で三角形、変形がある。1866と1869は2本鋸歯文が続いているが、1869が細くて口縁端に接するのに対し、1866はやや離れている。

1867の外面は鋸歯文と横線で三角形を描き、鋸歯文のへこみ部分から上に反時計回りの渦巻文が上がる。口唇部にはヘラ刻みがある。

1868は口唇部や内面に巻貝刺突文があり、口縁端は薄くなっている。外面には浅い2本沈線でX字状が描かれ、三角形となり、栴円文も描かれる。

1870～1928は横線が三角文の上あるいは上下に引かれているもので、横線は入組文でつなげられたり、鉤状に屈曲するものが多い。

1870は口径が31cmで、4か所に三角突起がある。突起頂部には4列の二枚貝刺突文があり、逆三角形を描く。外面は上に2本の横沈線を引き、その下には一部の端が入組文になる鋸歯状三角形が描かれている。

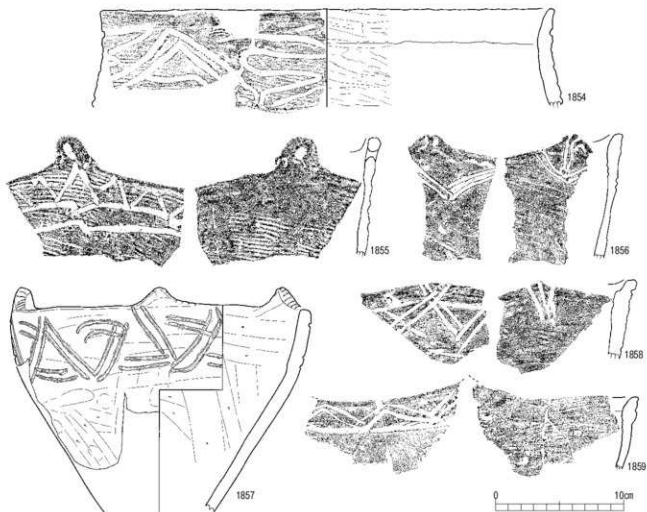
1871は上下に2本横線があり、間に2本の鋸歯文がある。下の横線は鉤状になる所もある。指宿産と思われる。

1872は2本横線の下に2本鋸歯文がある。

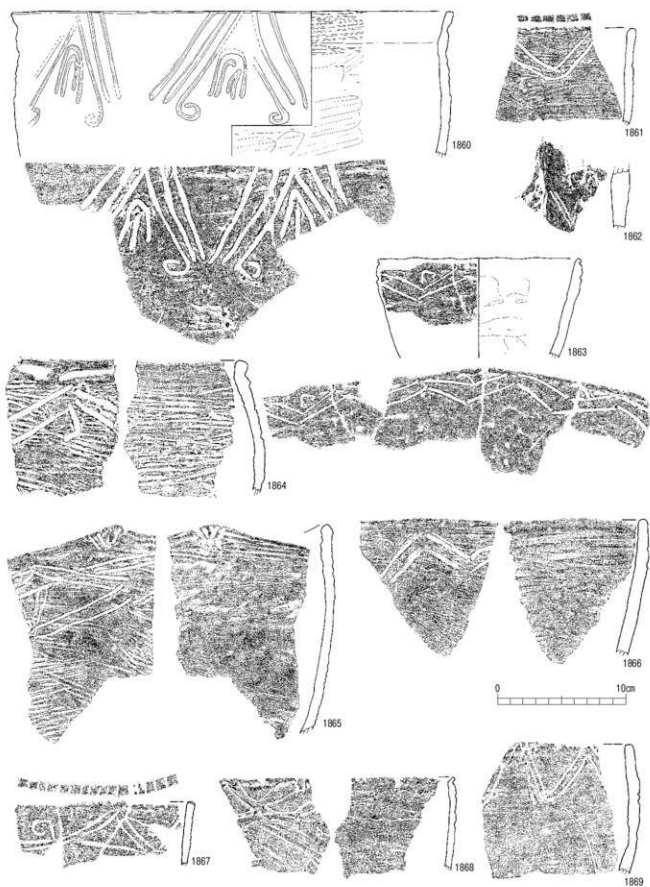
1873は横線の下に2本の三角文があり、その中にS字文も見られる。

1874は細沈線で横線が2本引かれ、その下に斜沈線があり三角形を描く。口唇部には小さなヘラ刻みがある。

1875は上下に横線が引かれ、その上に鋸歯文があり、



第269図 指宿式土器 (113) I d 類②



第270图 指宿式土器 (114) I d類③

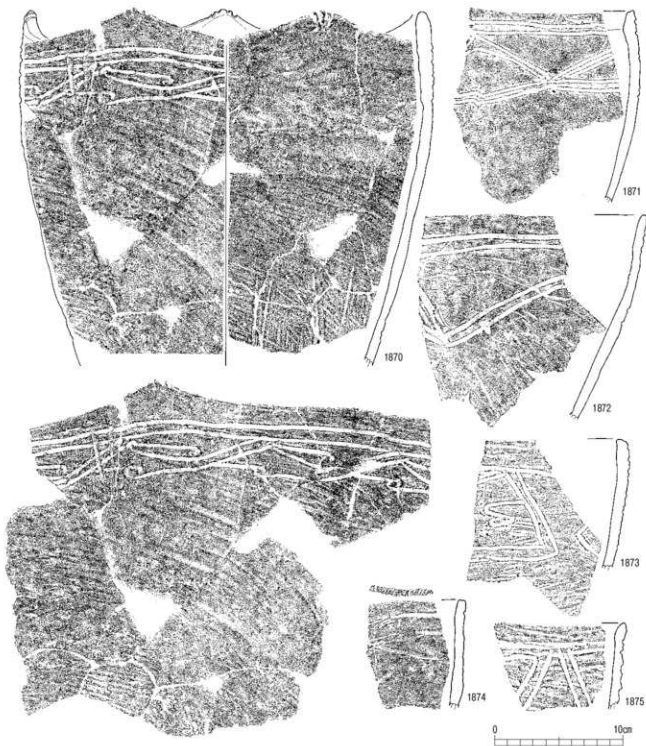
三角文を描いている。

1876は口径が27cmで、ややずれた位置で4か所に台形状突起がある。突起口唇部から内面にかけて5本のヘラ押圧文があり、外面には3本の縦沈線がある。外面には上に1本の横線があり、その下にW字文や逆三角文が描かれ、三角文の下などには菱形文などがある。

1877は口径24.6cm、底径9.6cm、高さ27cmで、4か所に

ゆるやかな山形突起がある。突起内面には4本の縦線と、入組文のある曲線文がある。外面には上に2本横線、下に途中で丸く途切れる2本沈線が引かれ、間には一方の端が丸くとじられる三角文が描かれる。

1878は口径が20cmと小さく、4か所に小さな三角突起がある。突起下外面には斜め沈線と穿孔、内面には穿孔を挟んで二枚貝腹縁による逆三角形の2本刺突文があ



第271図 指宿式土器 (115) I d類④

る。外面は横方向の沈線と、その下に鋸歯文がある。

1879は太い山形突起部で、外面は2本沈線による横線と三角文が、内面は鉤状沈線と、三角文が描かれている。

1880は口径が23.2cmである。上下に入組文でつなく2本横線があり、間に斜線を引き、三角文とする。

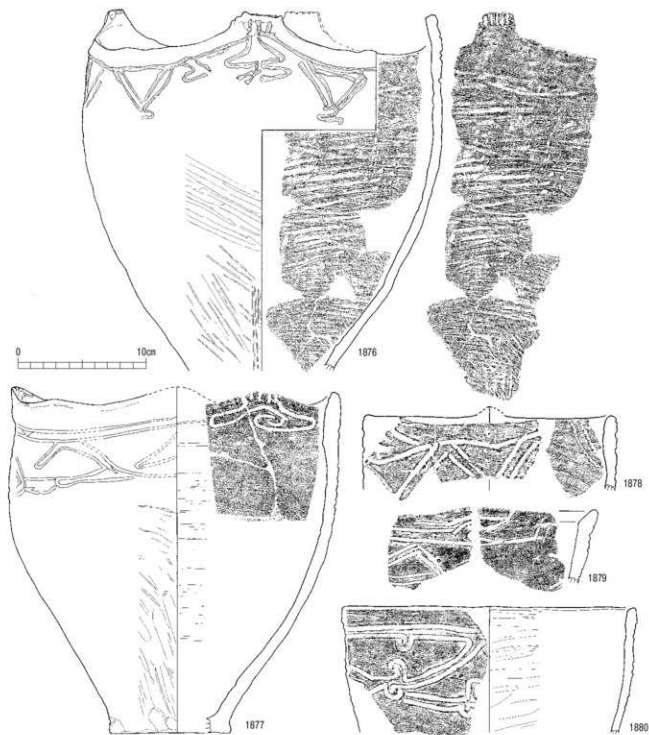
1881は口径が29cmで、4か所に低い突起があり、そこでは内外面とも縦線が3本引かれる。外面には上下に入

組文や鉤状の沈線があり、間に鋸歯文がある。

1882も1881と同じような文様だが、突起部の沈線は斜方向となり、逆三角形を呈すると思われる。

1883~1886は上下に2本横線が引かれ、この間に2・3本斜線で鋸歯文が描かれ、三角形としているが、斜線が上の横線を越える部分もある。

1887は突起内外面に縦線を引き、外面は上下に入組文



第272図 指宿式土器 (116) I d類⑤

でつなぐ横線があり、その間に鋸歯文が描かれる。

1888～1891は上下に2本の横沈線があり、その間には鋸歯文がある。1888は鋸歯文頂部の下に逆三角形を引き、小さな正方形となる。1889の上横線は鉤状となり、補修孔がある。1890の内面途中にはヘラ押圧文が3か所ある。口径は24.6cmである。

1892は口径が43.8cmと大型で、口縁部や器面調整は雑で、沈線端は高く盛り上がっている。上下に横線があり、間には鋸歯文がある。色調からして指宿地方産である。

1893は丸みをおびた三角突起で、突起外面は3本の逆三角形沈線が引かれ、内面は外から延びる6本の縦線と、

内面のみ2本の横沈線がある。外面は上下に2本の横線があり、間に鋸歯文がある。

1894は上下に横線が引かれるが、途中では三角を呈する所もある。その間には楕円文と、2本の鋸歯文がある。8mm大の細礫も含む粗い土を用いている。

1895は三角突起近くの破片で、2本の逆三角形が外面に描かれている。

1896は内外面とも貝殻条痕をよく残し、上に横線、その下に2本の斜線が描かれている。

1897は突起が高く伸びるもので、突起部の外面は三角沈線とそこに穿孔があり、内面は穿孔の周りに二枚貝

第273図 指宿式土器 (117) I d類⑥

— 160 —

腹縁刺突文によって、三角文を描いている。口唇部には深い穴があり、外面は横線と鋸歯文がある。

1898は上下に横沈線があり、間に菱形・三角文が描かれている。突起近くでは外へ幅広沈線がある。

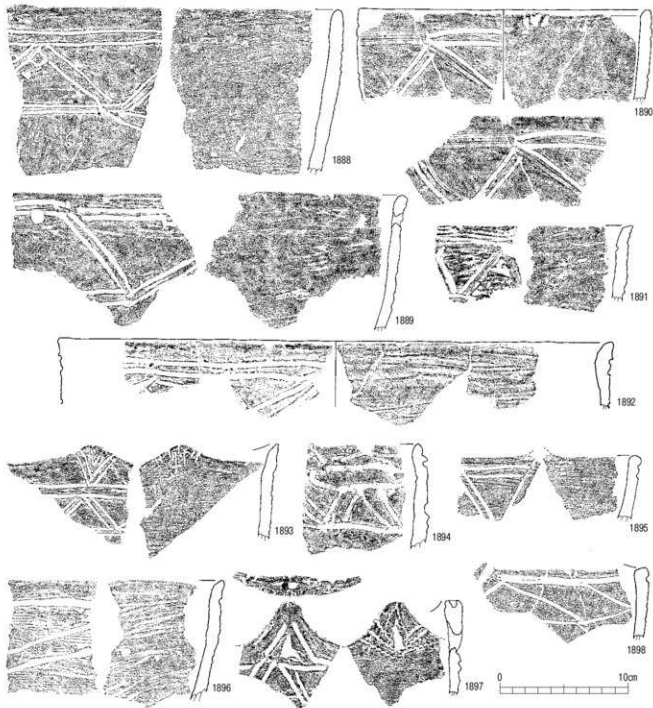
1899は口径が30.7cmで、上に入組文でつなぐ2本の横線があり、その下に2本の三角形が描かれているが、三角形の中には渦巻状となる逆三角形などがある。

1900は上に横線、その下に鋸歯文の2本沈線がある。

1901は口唇部に巻貝刺突文、外面に2・3本の鋸歯文と、それをつなぐ2本の横線がある。補修孔がある。

1902はやや太い沈線で、上に2本の横線があり、その下に縦線と左下がりの斜線がある。

1903は口径が30cmの壺形を呈する器形で、くの字に外反する口縁部は分厚く、低い突起が4か所にある。突起口唇部には4・5本の縦線が、内面には端のとじられるハの字状の2本沈線があり、入組文で結ばれている。頸



第274図 指宿式土器 (118) I d類⑦

部と肩部に両端を入組文が中央にある2本横線があり、その間に鋸歯文がある。外面と口唇のハの字文は似ている。指宿地方産である。

1904～1921は反外する器形をしている。

1904は2本の横線と斜線で逆三角形・三角形を描いており、色調・胎土からして指宿地方産である。

1905は2本沈線の横線と斜線で、三角形や矩形が描かれている。

1906は口縁端が肥厚し、口唇部に巻貝押圧文がある。外面には2本横線と、その下に右下がり斜線がある。補修孔があり、その脇には途中でやめた痕跡がある。

1907は上に2本横線があり、その下に2本斜線で逆三角形が描かれている。

1908は2本沈線で上に横線、その下に鋸歯文を描く。

1909は小さな三角突起のあるもので、細くて深い2本沈線で横線と斜線が引かれ、三角形や台形となる。

1910は上下に横線があり、間に鋸歯文が描かれる。

1911は突起部で、口唇部から内面にかけて4か所のヘラ押圧文があり、その下に巻貝刺突文がある。外面は上下に横線が、間に鋸歯文が描かれている。

1912は口径が29cmで、外面に2本の横線と、その下に斜・横方向・弧状沈線を引き、逆三角形などを描く。

1913は上に曲線ぎみの途切れる横線があり、その下に2本の斜線で三角形・菱形を描いている。

1914は上に2本横線があり、その下に斜線等で逆三角

形などを描いている。胎土等からして指宿地方産である。

1915は上に2本沈線、その下に鋸歯文が描かれ、鋸歯文の中には曲線ぎみの2本横線がある。

1916は突起部で、外面は矩形・三角形などが描かれ、突起内面は2本沈線で逆三角形が描かれる。

1917は上下に横方向の2本沈線があり、その間に2本沈線で変形の×印が描かれ三角形や菱形が描かれる。

1918～1928(1922・1925・1927を除く)はやや反外する口縁となるものである。

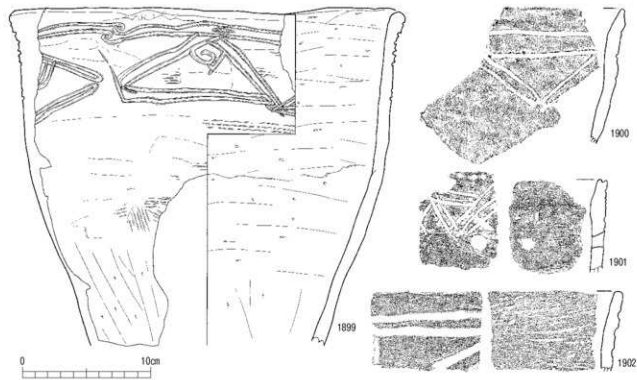
1918・1919は4か所に突起のある鉢形を呈するものである。1918は口径が31.5cmで、突起内面は2本の菱形を呈する沈線があり、突起頂部は平たい。外面は上下に矩形があり、その間には2本の鋸歯文が描かれる。

1919は口径が28.8cmで、突起には2本沈線が見られ、頂部には穴がある。外面は上に3本、下に1本の沈線があり、間に鋸歯文がある。

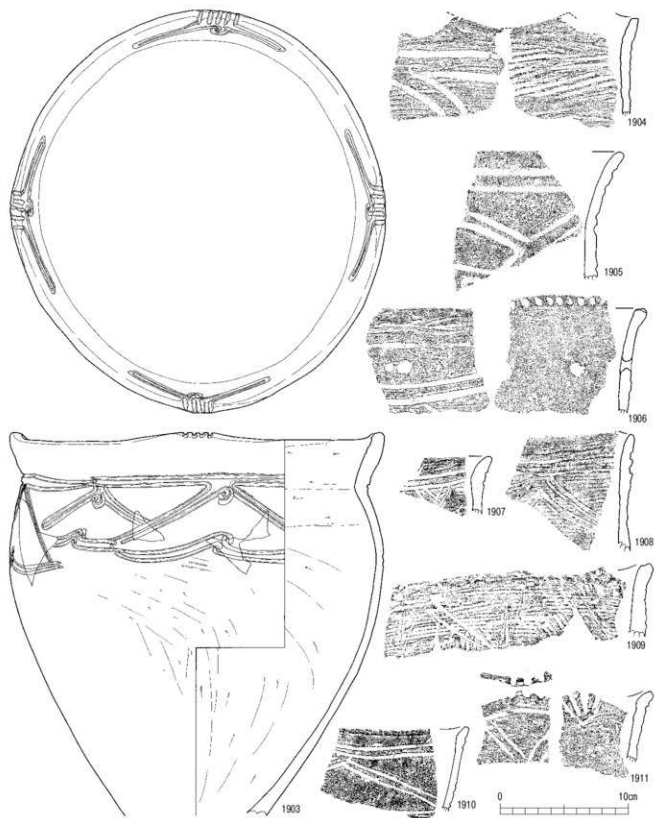
1920～1922は上下に2本の横沈線があり、その間に2本の鋸歯文がある。

1923・1924は上下に横線があり、その間に鋸歯文がある。1923の下や、1924の左下がり沈線は入組文を曲線ぎみにしたものが使われている。

1925・1926は上下に横線があり、間に鋸歯文がある。1926の突起部外面には5本沈線の逆三角形、内面には巻貝刺突文がある。



第275図 指宿式土器 (119) I d類⑧



第276图 指宿式土器 (120) I d 類⑨

1927は細い沈線で、上に横線があり、下に2本の菱形文と三角形が描かれ、それぞれ内側へ折れている。

1928は山形突起で、突起部の頂部から内面にかけて5本の沈線があり、外面には上に鈎状の横線、下に鋸歯状横線があり、間には縦線と横線がある。

1929-1948は様々な三角形が描かれるものである。

1929は口径が27.4cmの直口するもので、外面には二重の三角形が横へつがっている。大きな三角形の交差する谷の部分には小さな三角形がある。下の横線は端が丸く止まる所や、丸みをもった入組文の所もある。

1930は口径が27.4cmあり、幅が13cmほどの広い台形状突起が2か所に、粘土紐を貼付けた突起が2か所にある。外面には直線の三角形、内側がS字状に曲がる三角形、外も曲線風となる三角形などがつがる。

1931は口径が14cmと小型で、頂部に4つのヘラ押圧文がある高い山形突起が4か所にある。外面は三角形が横に並ぶが、突起下は斜線のみで逆三角形となる。

1932は口径が42cmと大型の内湾する器形である。外面に太い直線で、横線・三角形などが描かれ、下の直線は鈎状になるものや、入組文になるものがある。

1933は口径が23cmで、4か所に三角突起がある。突起

内面には左右3本ずつの斜線状で逆三角形があり、外面は突起下に菱形を3段に重ね、左側には上に矩形、下に三角形文様が、これらの左右にはW字文がある。

1934の外面には細い沈線で2段の鈎状横線や逆三角形文・横線などがある。

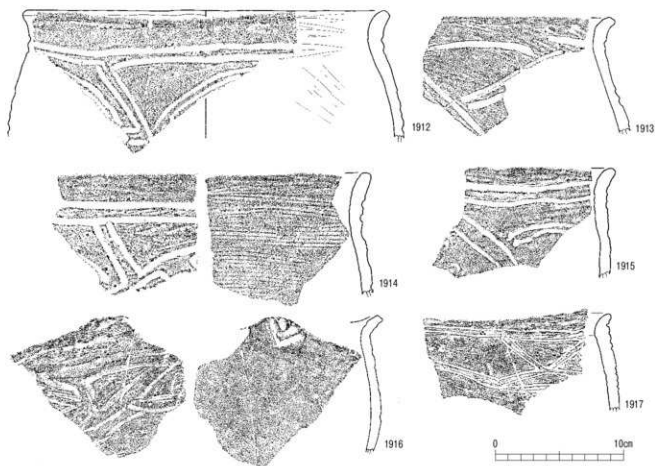
1935は山形突起近くの破片で、突起下に渦巻文と思われる曲線があり、その脇に2本沈線の斜線・縦線などがあり、その中には三角形が上下に描かれている。

1936は端部が分厚く、2本の横線と斜線がある。この中に三角文が描かれている。

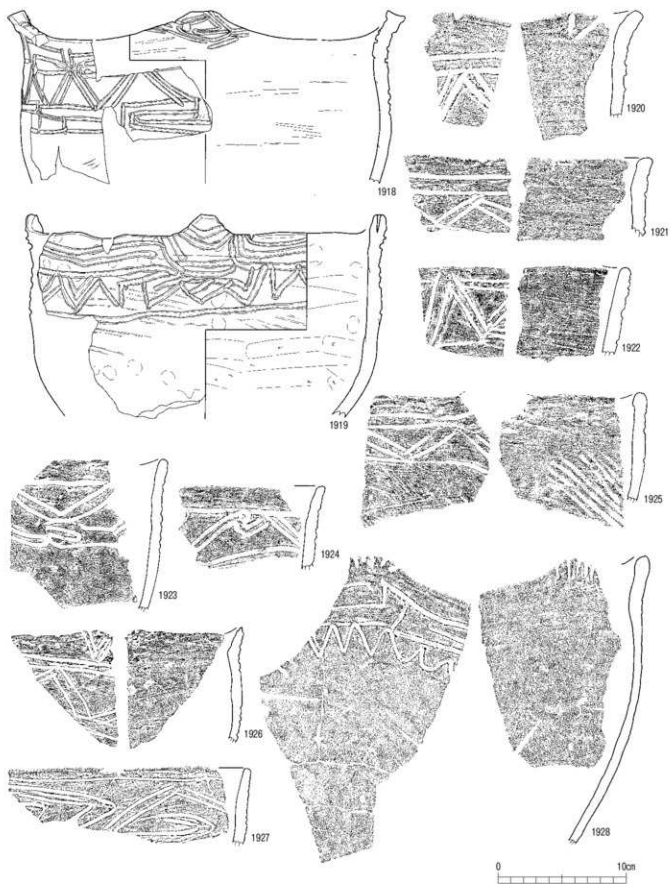
1937も端が分厚くなる突起部で、外面には2本の斜線で矩形・三角形などを描き、三角形の頂部から上へ逆丁字文が描かれている。突起の頂部から内面へ3本の沈線が伸び半円形を描いている。

1938は口径が28cmで、4か所に山形の突起がある。突起の下には三角形の孔があり、その下は二重の三角文がある。突起の左側には4本の右下がり沈線があり、その横には3本の横線がある。突起の右側には三角形や矩形が描かれている。

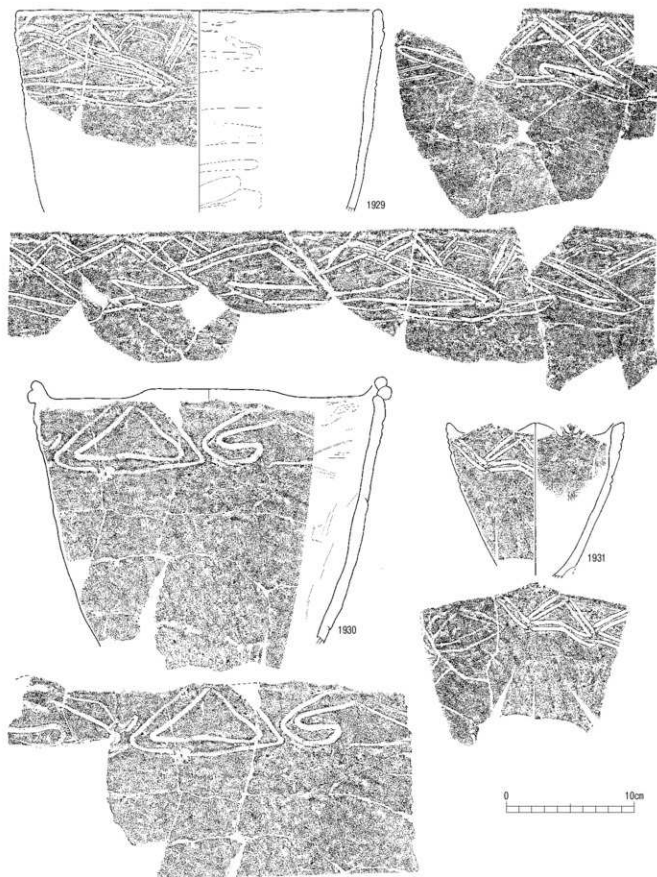
1939はやや外傾する口縁と胴部へ広がる斜に近いもので、いずれも途中で切れる直線で、上に2本沈線、その



第277図 指宿式土器 (121) I d類⑩



第278图 指宿式土器(122) I d類①



第279図 指宿式土器 (123) I d類②

下に2本の菱形文があり、菱形文の中と右上には二重の楕円文がある。沈線を引いたあと、ヘラナデをしている。指宿地方産である。

1940は外反する分厚い作りで、外面は2本沈線で上に横線、その下に上へ短く立ち上がる横線、その下に三角文が描かれている。周辺に鉄分が多く付着している。

1941は口径が26.6cmで、4か所に低い山形突起がある。突起外面には4本の縦線の下がまた状に開く文様があり、その周辺には4本の三角文や斜格子・菱形文などが描かれている。

1942は2本沈線で、上に横線、下に鋸歯文を描く。横

線と鋸歯文の接する所は入組文になっている。

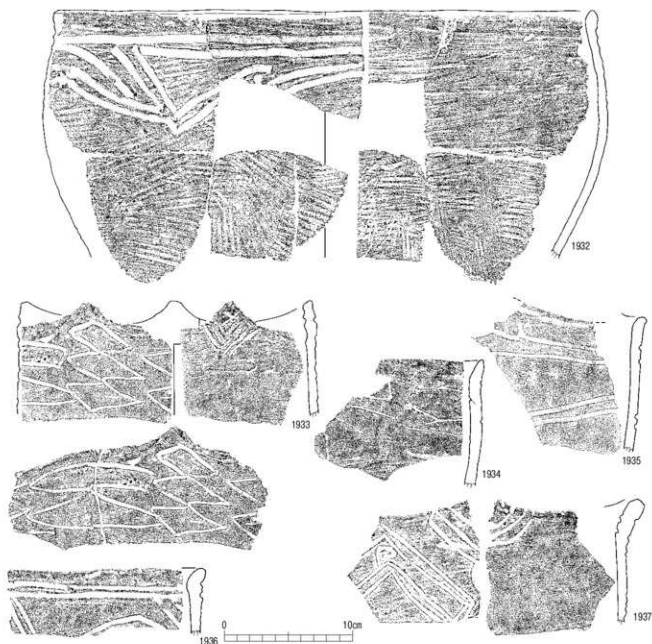
1943の外面は中央に渦巻文があり、その脇に1本や2本の横線、逆三角形などが描かれている。

1944は突起部近くの破片で、内面にはヘラ押圧文がある。外面は横方向の2本沈線の下に鋸歯文があり、鋸歯文の一部は入組文となっている。逆三角形の中には上向き

の2本J字文がある。

1945-1946は頸部がややくびれて、口縁部が立ち上がっている破片で、いずれも突起部近くの破片である。

1945は大型のもので、外面は上下に2本の横線があるが、最下の直線は鉤状に屈曲している。横線間は右下が



第280図 指宿式土器 (124) I d類⑬

り斜線が引かれている。

1946の外面は突起下に反時計回りの渦巻文があり、その下に2本沈線の三角文が描かれる。口縁下には2本横線があり、沈線の端は押さえている。

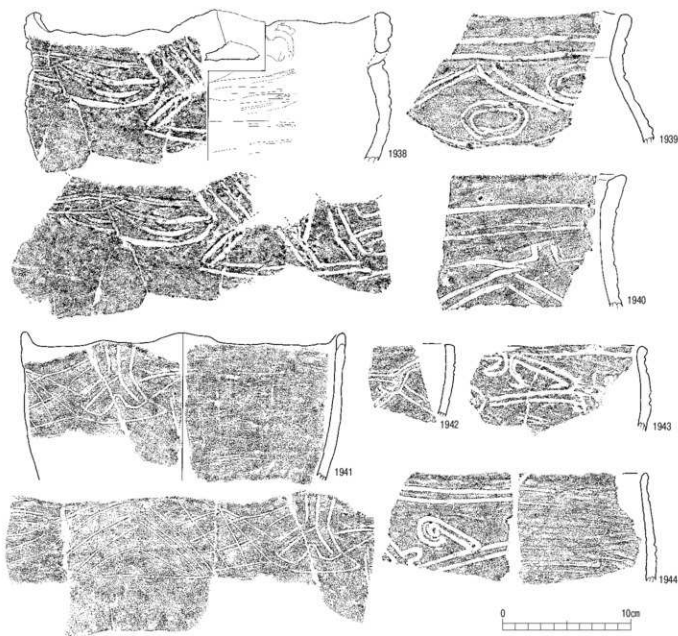
1947は山形突起のある直口する器形で、突起頂部には浅い穴がある。外面は突起部分に巻貝太線のW字文が背中合わせにあり、その周辺は細い沈線で横線と横長の三角文が描かれている。突起内面はV字状が背中合わせにあり、その左には横沈線がある。

1948～1953は鋸歯文あるいは三角文と、楕円あるいは矩形が組み合わさった文様である。

1948はやや内反する器形で、細い2本沈線が横・斜方向に引かれる。横線の下にハの字状の三角文が描かれ、その左に横長の矩形がある。

1949は口径が25cmで、やや内反する器形をし、4か所に小さい台形状突起がある。外面は上に横長の長楕円文があり、その下に横沈線と鋸歯文（一部は丸みをもっている）があるが、突起の下では鋸歯文が途切れ、矩形と楕円が二重となっている。突起は橋状となる可能性もある。

1950は頂部が尖った三角突起が4か所にあり、頂部の内面は粘土を貼り付けて厚くしている。外面は突起部に



第281図 指宿式土器(125) I d類⑭

縦線があり、その左右に楕円文が、その下には2本の逆三角文がある。その左右は楕円文があり、その下に三角文や台形が描かれている。突起右側には三角文があり、その下には中に三角文のある二重円形がある。口径は27cmである。

1951は口径が26.6cmで、上につづら折りの横に長い楕円があり、その下には二重の逆三角形や菱形文が描かれている。

1952は突起近くの破片である。やや太い沈線で、横線や2段の楕円文、入組文風の曲線、渦巻文などがある。

1953は内傾する口縁部で、矩形の下に鋸歯文が、その下に横線が引かれている。沈線は深い。

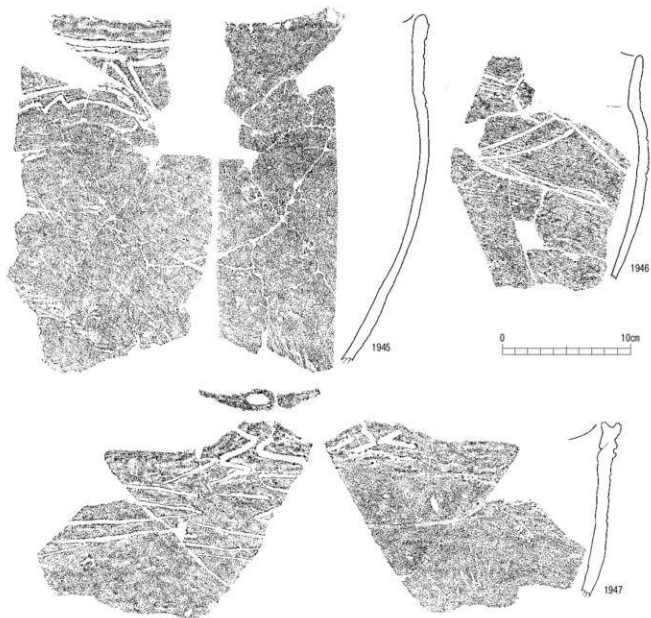
(イ) 鉢 (第283図・第284図 1954~1959)

1954は口径が26.4cmで、太い2本沈線で上下に横線、その間に鋸歯文が描かれている。

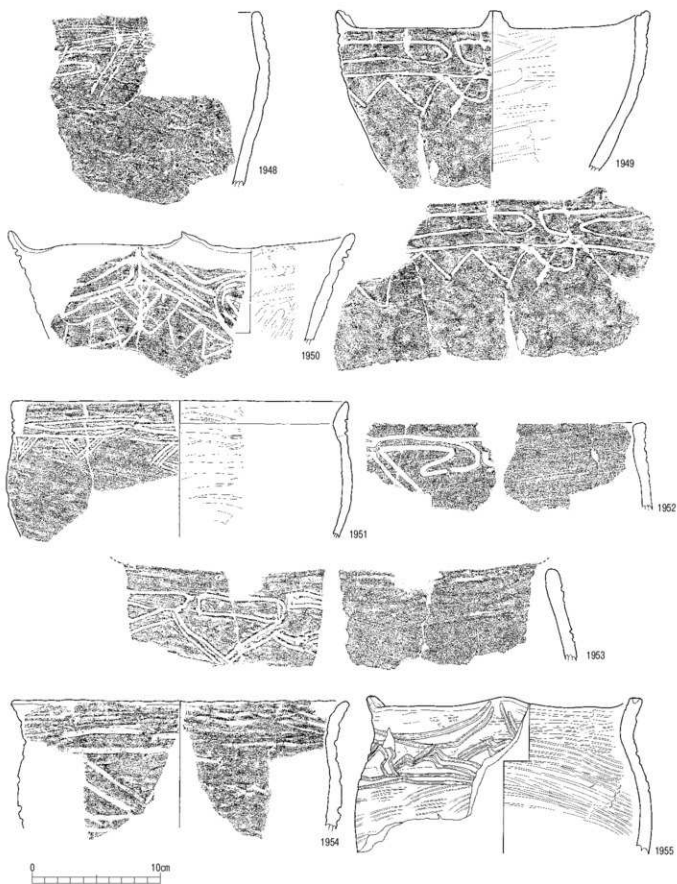
1955は口径が21.8cmで、4か所に低い突起があり、外面上の横線はここで立ち上がる。突起頂部には浅い穴があり、内面には逆三角形の短沈線がある。下にも横線があり、間には鉤状に曲がる直線の鋸歯文が描かれる。

1956と1957は同一個体である。剥脱しているが、4か所に楕円突起があり、口径は16.2cmである。頭部がくびれ、胴部中ほどが膨らむ。外面は上に横線があり、その下に三角形を主とした2本沈線が描かれ、S字文や楕円文などがある。

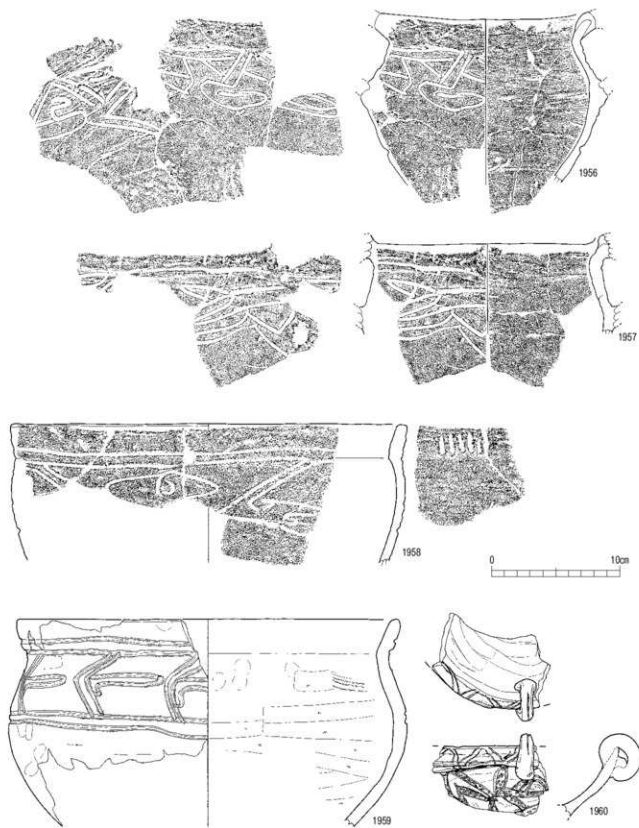
1958は口径が31.2cmで、口縁部は段をもち、分厚い。



第282図 指宿式土器 (126) I d類⑯



第283图 指宿式土器 (127) I d類^⑬



第284图 指宿式土器(128) I d類①

外面は上に2本、下に1本の横線があり、その間に鋸歯文があり、その交差部分では入組文もある。三角内に菱形の楕円文があり、その中には小さい円文がある。内面に5本の縦沈線がある。指宿地方産である。

1959は口径が30.5cmで、上下に2本の横沈線があり、間に楕円文がくっ付いた2本のくの字文が描かれる。

(ウ) 台付浅鉢 (第284図 1960)

橋状把手の付いた鉢部で、口縁部に鋸歯文があり、胴部には中に巻貝刺突文のある三角文や半円などの2本沈線が描かれている。

オ I e類土器 (第285図～第290図)

I e類土器は、W字文を主として、他にV字文や鋸歯文を縦方向に並べた文様で、深鉢と鉢がある。

(ア) 深鉢 (第285図～第290図 1961～1964)

1961～1982はほぼ直に立ち上がる器形を呈している。

1961は口径が18.4cmあり、台形突起が4か所高くとび出すもので、突起の下には穿孔が設けられている。穿孔のあとには粘土の貼付けがある。右向きW字文沈線のあとへラナデがされている。

1962は4か所に三角突起のある口径22cmの直口するもので、左向きのW字文が連続して描かれている。

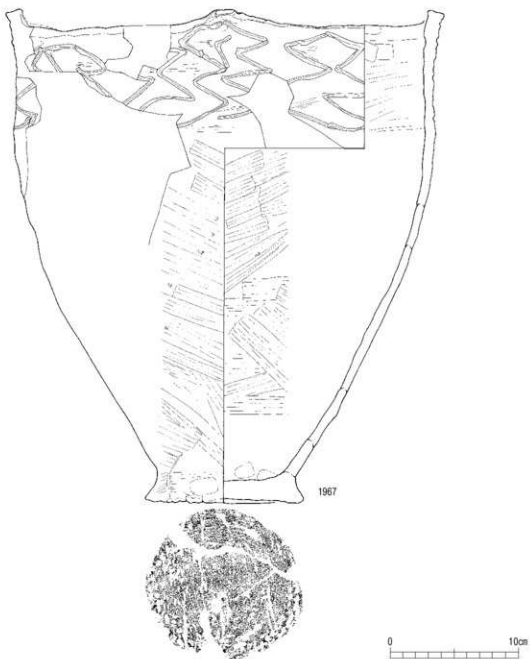
1963は左向きのW字文が連続し、上の沈線が2本となり、途中で筋違いとなる。突起部の下は菱形を呈し、突起外面にはへラ押圧文が見られる。

1964は突起近くに縦線が2列あり、その右には鋸歯文が続いている。鋸歯文は右から左へと続く。突起外面にはへラ押圧文がある。

1965は分厚した口唇部に巻貝刺突文のある口縁部で、左向きのV字文と、菱形があり、最下部に横線がある。



第285図 指宿式土器 (129) I e類①



第286図 指宿式土器 (130) I e類②

1966は口径が25.8cmで、4か所に低い突起がある。上に横沈線があり、その下にはW字文が連なっている。

1967は口径が34.6cm、底径が12.4cm、高さが39cmの土器で、ほぼ直口する器形だが、端部はやや外反し、4か所に低い突起がある。外面上部には向かいあうW字文がある。

1968は4か所に山形突起のある土器で、内反している。口径は27.4cmで、突起部には8本のヘラ押圧文が見られる。外面には細い横長W字文が続き、菱形となる所もある。そのあと、縦方向の2本V字文が描かれている。

1969は分厚い突起部で、横長のW字文が描かれている。

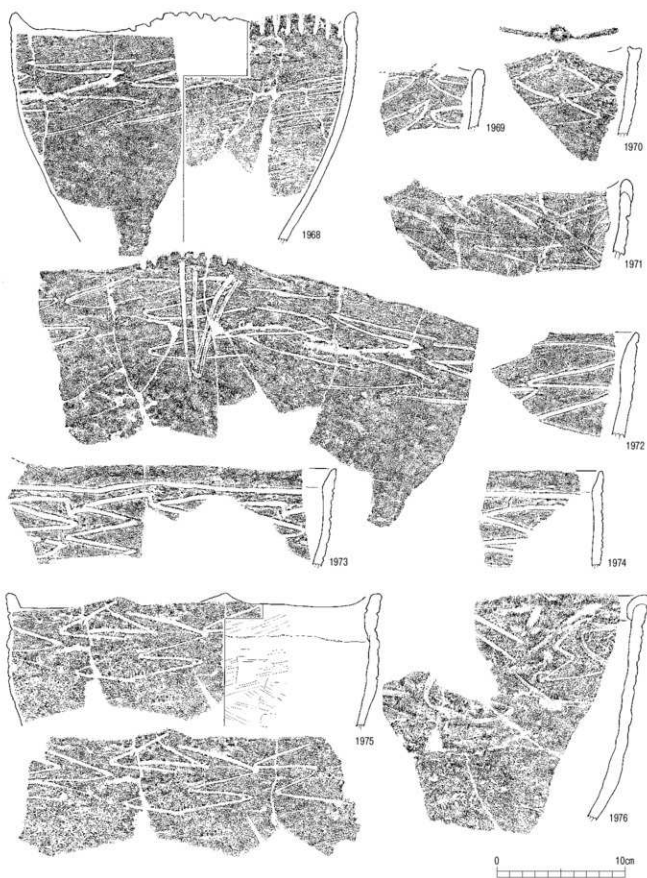
1970は向かいあうW字文の描かれている突起部で、突起頂部には窪みが見られる。

1971は三角突起のある口縁で、細いW字文が、雑に描かれている。

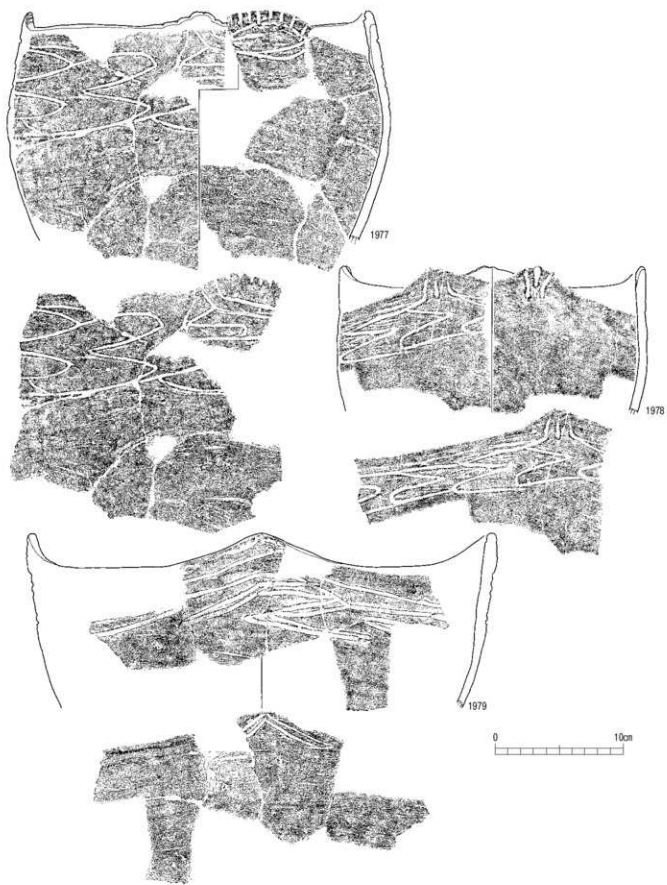
1972は端部が細くなる口縁で、横方向のW字文が描かれている。

1973は口縁端近くで内面が外反するもので、三角突帯がある。上に2本沈線があるが、下の直線は鉤状を呈している。その下にW字文があり、さらに横沈線がある。

1974も1973と同じような器形だが、上の横線が1本である。



第287图 指宿式土器(131) Ie類③



第288图 指宿式土器 (132) Ie類④

1975はやや外反する器形で、4か所に三角突起があり、口径は24.7cmである。細い沈線で、向かいあうW字文や三角文が描かれている。

1976は口縁端が分厚くなるもので、外面には逆三角形、W字文、菱形、三角形などが描かれている。

1977は口縁部がやや内反しており、口径は26.4cmである。4か所の突起があり、突起内面に二重の菱形を描いたあと、外面から内面にかけて8か所のヘラ押印文が見られる。外面には細い沈線で左向きW字文が描かれているが、突起下では右向きに変え、その上に凹形沈線がある。

1978も4か所の山形突起があり、突起内面は端を押さえる縦3本の沈線がある。外面は右向きのW字文だが、突起部では上へ立ち上がり、その中央に縦線が引かれている。

1979も同じような突起で、内面には三角状の2本沈線が引かれ、端はとじている。外面は2本沈線で、上に横線が引かれ、その下に右向きのW字文や楕円文が描かれている。

1980は口径が30.4cmあり、外面には両端が左へ延びるW字文が描かれている。

1981は口縁内面が外へ屈曲する口縁で、口径が23.4cmある。外面は細い沈線の左向きW字文である。

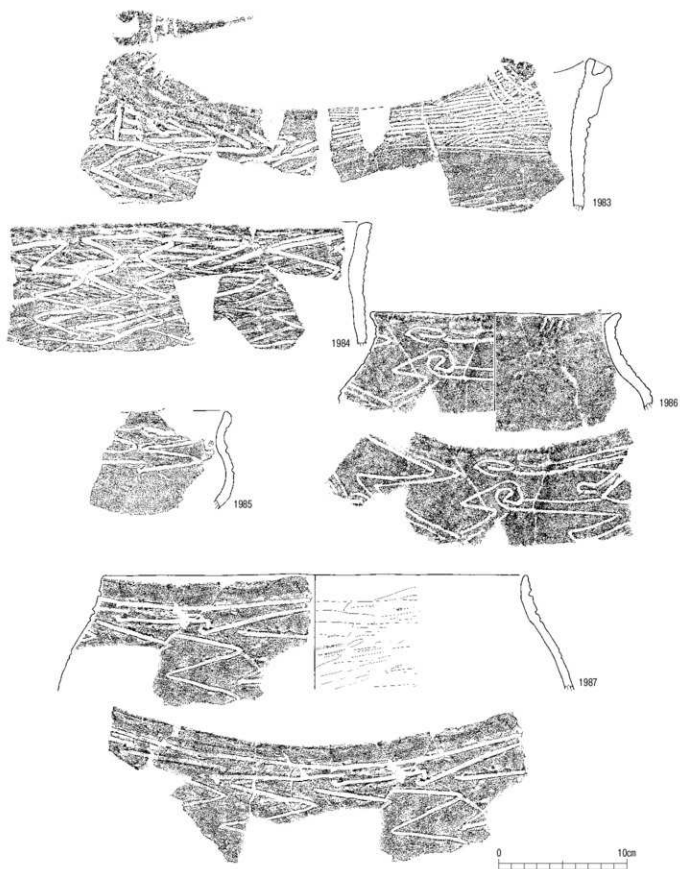
1982は山形突起部で、外面は端のとじる2本の左向きV字文で、頂部から内面にかけて4本の縦沈線が引かれている。

1983は小さな山形突起のあるもので、突起頂部に深い穴があり、頂部から内面にかけて二枚貝腹縁による3本ずつのV字形沈線がある。外面は突起の下に縦2本、横3本の沈線ではしご状を描き、その脇にV字文が描かれる。この下には上下に横線があり、間に右向きのV字文がある。

1984はW字文が2段に重なって、2組が上下で連なる文様である。



第289図 指宿式土器 (133) Ie類⑤



第290图 指宿式土器(134) I e類⑥

(イ) 鉢 (第290図 1985~1987)

1985はやや直立ぎみに口縁が伸びる器形で、頸部から肩部にかけてW字文が向かいあって描かれる山形突起のものである。突起下は矩形あるいは渦巻文かと思われる。

1986は肩が張り、口縁端は強く外反する。外面は横向きW字文や三角形・横線などが描かれているが、つなぎには入組文も見られる。内面の口唇部に3本の縦沈線がある。

1987は口径が33.2cmの内傾する口縁部で、上に2本の横沈線があるが、下の沈線は入組文でつないでいる。その下には左向きの横W字文が描かれている。

(2) II類土器 (第291図~第330図)

II類土器は、曲線的な沈線により文様が施されているものである。その構成される文様には、人形・楕円・渦巻・つづら折り・S字状のものがある。深鉢・鉢がある。器形的には、口縁部が外反するもの、直口するもの、内反・内湾するものがあり、口縁部形態も平口縁、波状口縁のものがある。

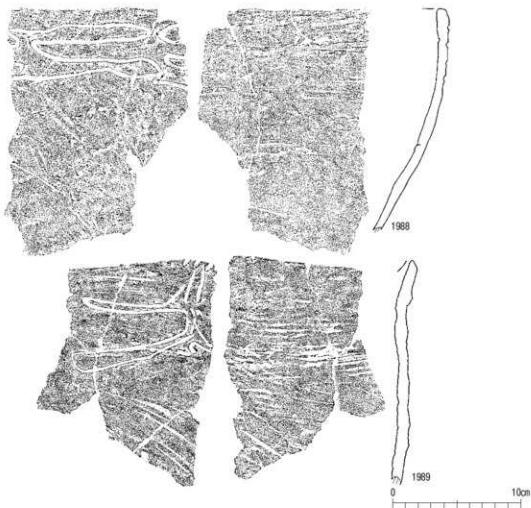
ア II a類土器 (第291図~第293図 1988~1994)

II a類土器は、口縁部付近に曲線的な沈線により人形文を施すものである。横位に連続して人形文を描くものと、単独で描くものがある。人形文は、一筆書きのように一連に続けて描いたものと数回に分けて描くものとが観察される。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。

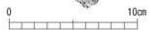
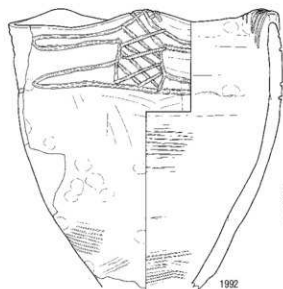
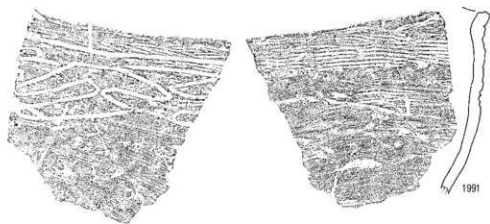
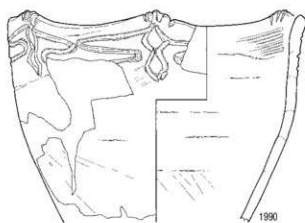
1988~1994は、深鉢であり、口縁部に人形文が施されている。

1988は、口縁部に人形文を横位に施すものである。平口縁であり、口縁部はまっすぐ立ち上がるものである。口縁部に、手足を横に伸ばしたような形の人形文が施されている。

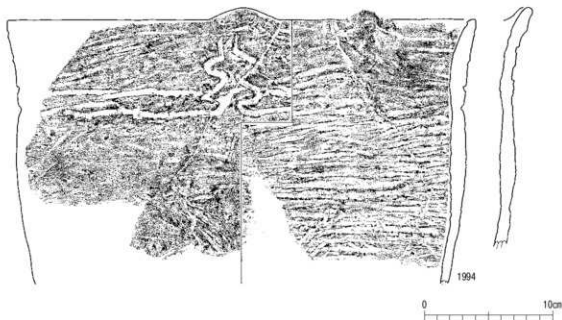
1989~1991は、胴部から聞きながら立ち上がり、口縁部が外反するものである。1989は、口縁部に、手足を横に伸ばしたような形の人形文が施されている。1990は、刻みのある突起を4か所に有するものである。突起直下に8の字状の文様の左右に、横に手足を伸ばしたような文様が施されている。8の字状の文様が人の体のように見えるものである。1991は、口縁部に横位の沈線を1本



第291図 指宿式土器 (135) II a類①



第292図 指宿式土器(136)Ⅱa類②



第293図 指宿式土器 (137) II a類③

巡らし、その下位に人形文が横位に連続的に施されている。

1992～1994は、膨らむ胴部から内傾・内弯し口縁部にいたるものである。

1992は、3か所に突起を有するものである。突起直下に格子状の文様が施され、その左右に手足を横に伸ばしたような形の人形文が施されている。1993は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に足を横に伸ばしたような人形文が施されている。横位の沈線により手を横に伸ばしつないだうに見えるものである。1994は、ゆるやかな低い山形の突起を2か所に有するものである。一定間隔ごとに逆S字状とS字状の文様を左右向かい合わせに描き人形文状にしているものである。

イ II b類土器 (第294図～第305図 1995～2042)

II b類土器は、口縁部付近に曲線的な沈線により楕円状や渦巻状の文様が施されているものである。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどであるが、平らに仕上げたものややや尖ったものがある。平口縁のものや波状口縁のものがある。深鉢と鉢がある。

1995～2031は、深鉢である。

1995～1997は、口縁部が開きながら立ち上がるものやまっすぐ立ち上がるもので、平口縁のものである。1995は、口縁部に横位に2本1組の沈線を巡らし、その下位に沈線により楕円状の文様につながるように施されている。1997は、口縁部に横位に2本1組の沈線を巡らし、その下位に楕円状の文様が施されている。

1998・1999は、口縁部が波状を呈するものである。

1998は、口縁部が開きながら立ち上がるものであり、低いゆるやかな山形の突起を有するものである。口縁部に、2本1組の沈線により楕円状の文様が横位につながるように施されている。1999は、底部から開きながら口縁部にいたるものである。口縁部に横長の楕円が2段に施されている。突起を4か所に有するものである。突起上面から外面にかけて、巻貝殻頂部による沈線が施されている。底部は、やや上げ底を呈している。

2000～2004は、口縁部が開きながら立ち上がり口縁端部が外反するものである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどである。2000は、口縁部に2本1組の沈線により横長の楕円状の文様が施されている。この楕円状の文様は、つ字状であり、このつ字状の文様が横位に連続的につながって描かれている。2001は、口縁部上部に横位に2本1組の沈線を巡らし、その下位に2本1組の沈線により0字状の縦長の楕円が横位に連続して施されている。この縦長の楕円の下を、2本1組の横位の沈線によりつないでいる。2003は、繊維質の強いヘラにより文様が描かれている。沈線に繊維質の痕がくっきりと観察できるものである。2004は、波状口縁であり、口縁端部が肥厚するものである。突起部下位に渦巻状の文様が施されている。この渦巻状の文様は、2本の横位の沈線とつながっている。突起部外面には、斜位の短沈線が3本施されている。また、突起部上面から内面に斜位の沈線が施されている。この沈線の始まりと終わりには、巻貝殻頂部による刺突文が施されている。

2005～2012は、口縁部が内傾・内弯するものである。

2005・2006は、平口縁のものである。2005は、口縁部に横位に沈線を2本巡らし、この沈線の間と下位に横長

の楕円状の文様が施されている。2006は、口縁部がやや肥厚するものである。口縁部に、角張った楕円状の文様が横位に施され、その下位にC字状の文様が間隔をとりながら施されているものである。

2007は、波状を呈しているものである。ゆるやかな山形の突起を2か所に有するものである。突起の下位には、渦巻状の文様が施されている。渦巻状の文様の右横には、渦巻状の文様を向く矢印状の文様が施されている。突起内面には、斜位の短沈線が4本施されている。

2008～2010は、口縁部が肥厚するものである。

2008・2009は、平口縁のものである。2008は、口縁部が内弯するものである。2001と同じような文様が施されているが、上部の横位の沈線の1本が鉤状になっている。2010は、2本1組の沈線により略三角形に近い楕円状の文様が横位に連続して描かれている。楕円状の文様の上部で2本1組の沈線が交差している。

2011・2012は、波状を呈するものである。2012は、粘土継を巻き上げた突起を4か所に有するものである。突起上面には、巻貝殻頂部による刺突文が施されている。口縁端部には、溝状に沈線が巡らされている。口縁部に

は、沈線により渦巻状の文様などが施されている。

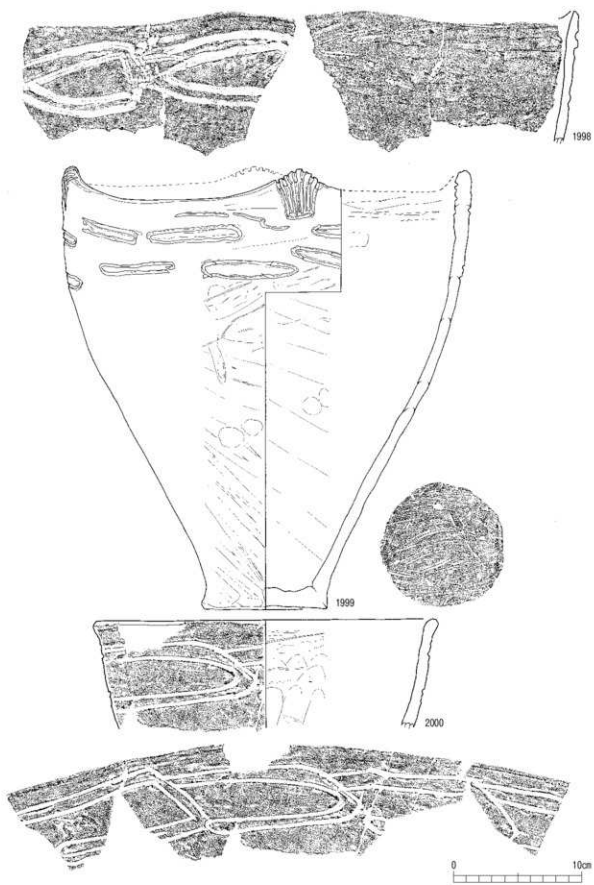
2013～2031は、口縁部が内傾・内弯するもので、その端部が外反するものである。

2013～2023は、平口縁のものである。口縁端部は、丸く収めるもの、平らに仕上げるもの、やや尖ったものがある。2013は、口縁部に横長の楕円状の文様が施されている。その下位には、2本1組の沈線により文様が施されている。2015は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に楕円状の文様や入組文が施されている。2016は、口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円状の文様が施されていると思われる。2017は、口縁部に横位に2本の細い沈線を巡らし、その下位に縦長の楕円状の文様が施されているものであると思われる。口縁部内面に、斜位の短沈線によりV字状の文様が施されている。2018は、口縁部が大きく外反するものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に横位の沈線から渦巻状の文様になるように沈線により描かれている。

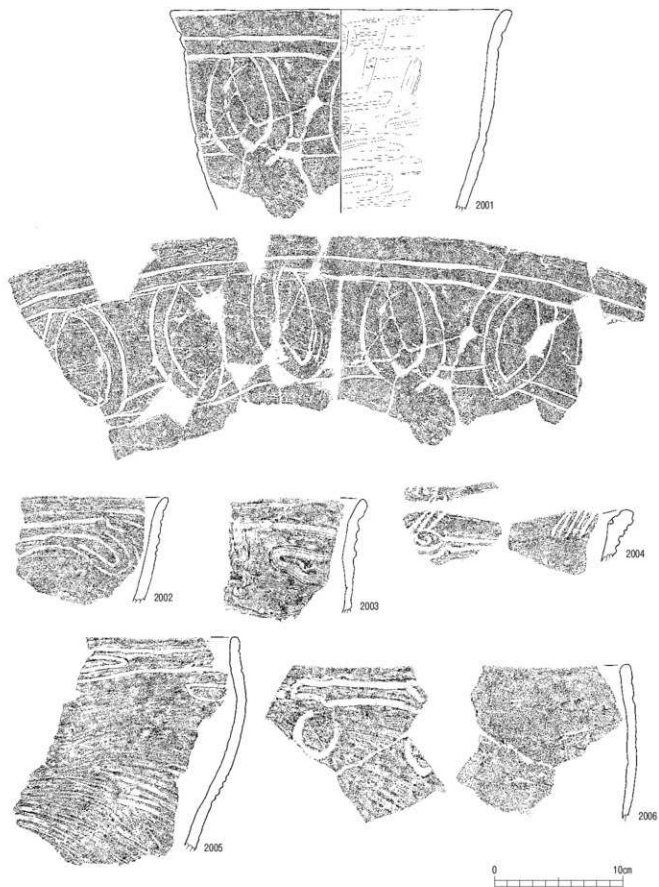
2019～2023は、影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するものであり、その端部が外反するものである。また、



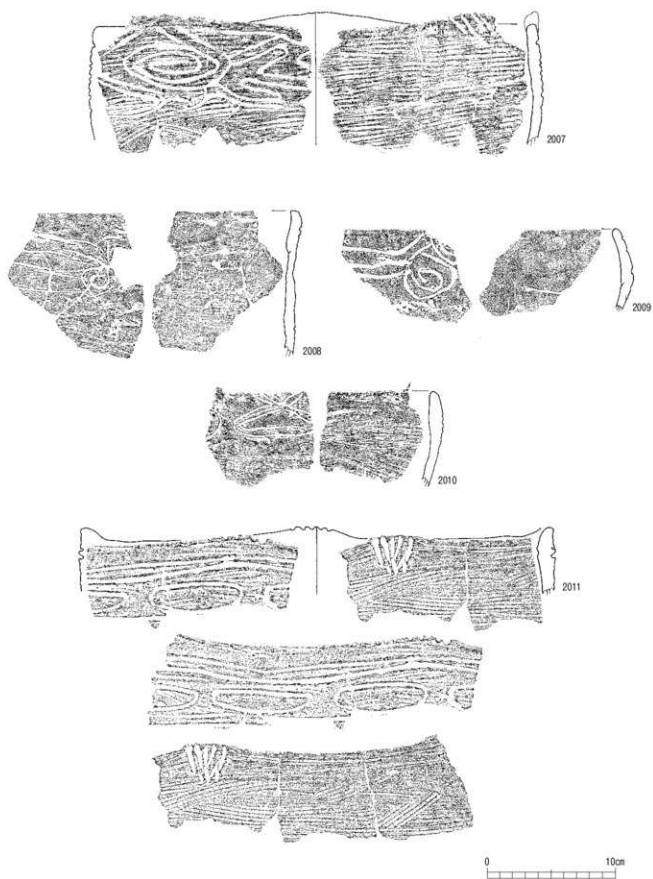
第294図 指宿式土器(138)Ⅱb類①



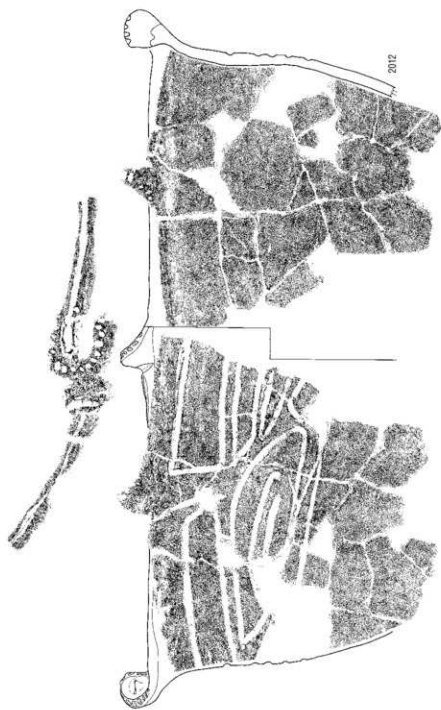
第295图 指宿式土器 (139) II b類②



第296图 指宿式土器(140)Ⅱb類③



第297图 指宿式土器(141)Ⅱb類④



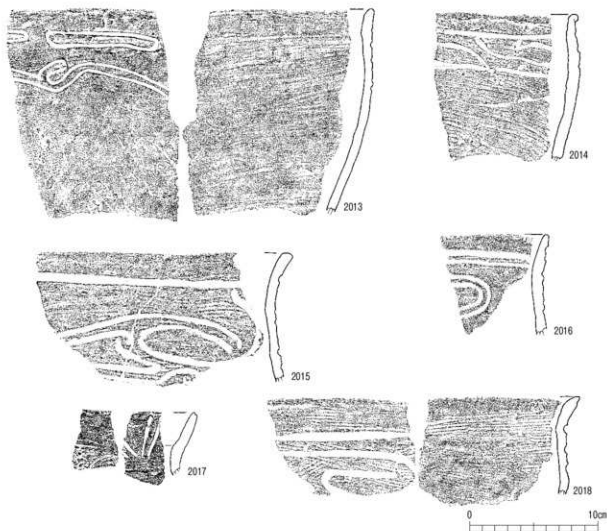
第298圖 指宿式土器 (142) II b 類⑤

口縁部が肥厚するものである。2019は、口縁端部を平らに仕上げている。口縁部には、2本1組の沈線により縦長の楕円状の文様が斜めに施されている。2020は、口縁端部が大きく外反するものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円状の文様を施すものと思われる。2021～2023は、口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円状の文様が施されている。2021は、入組文のある沈線により楕円状の文様が描かれている。2022は、始まりや終わりに刺突文が施されている沈線により楕円などの文様が描かれている。2023は、底部から開きながら膨らむ胴部にいたり、頸部でややくびれ口縁部が外反するものである。口縁部に鈎状の沈線を横位に1本巡らし、その下位に曲線や入組状のある沈線により楕円状の文様を描いている。

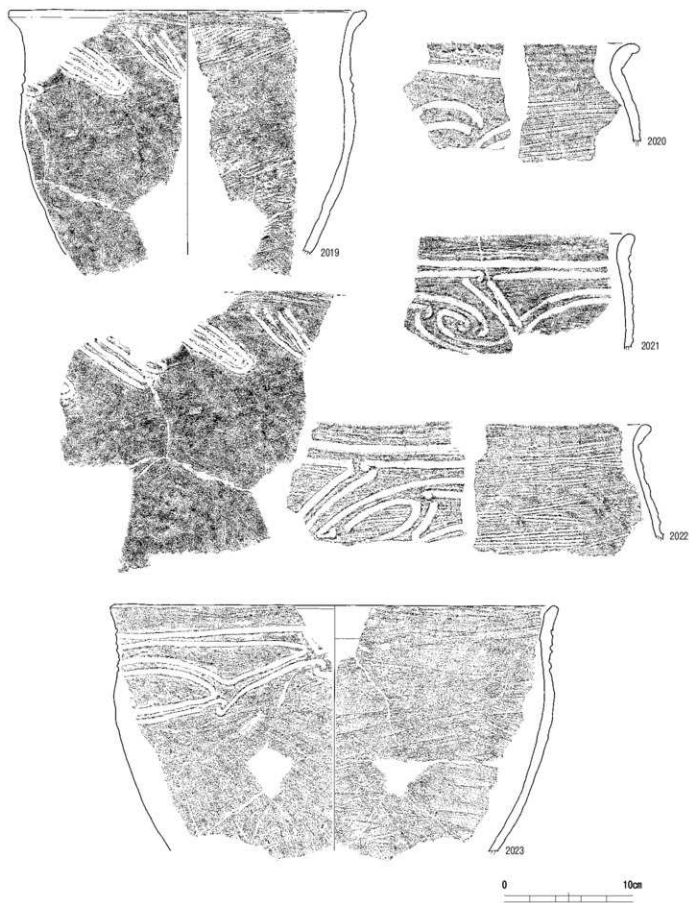
2024～2031は、口縁部が波状を呈するものである。口縁部に横位の沈線を施し、その下位に楕円状の文様を施

すものであり、音符のようにになっているものである。

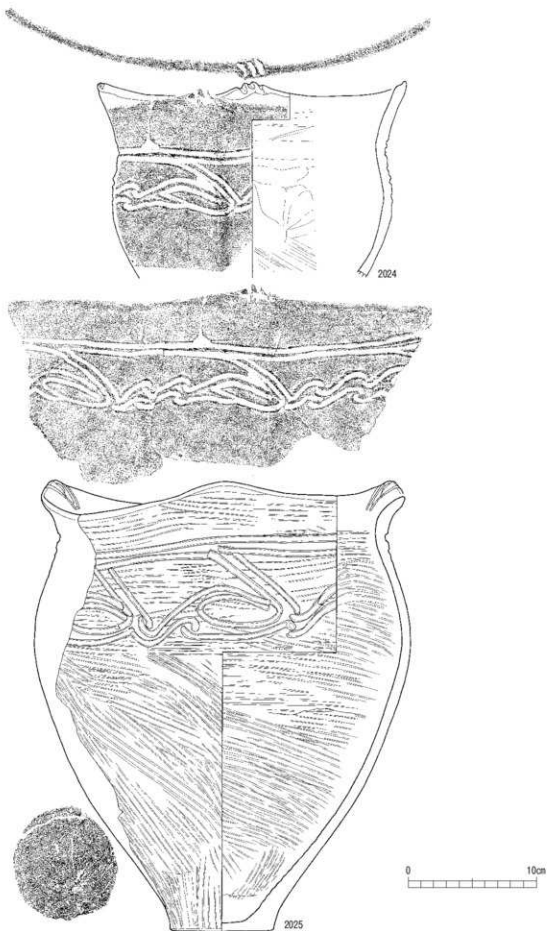
2024は、棒状工具の押圧による刻みのある突起を4か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円状の文様や入組文が描かれている。2025は、底部から開きながら膨らむ胴部にいたり、頸部でくびれ口縁部が大きく外反する器形のものである。3か所に突起を有するものである。口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に楕円状の文様や入組状の文様が施されているものである。2027は、楕円状の文様と2本の横位の沈線を結ぶ斜位の沈線が入組状の文様となっている。2030は、山形の突起を4か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を3本巡らし、その下位に2本1組の沈線により半円状の文様が施されている。突起外面には、2本1組の斜位の沈線によりX字状の文様が描かれている。2031は、ゆるやかな低い山形の突起を4か所に有するものである。底部から開きながら膨らむ胴部にいたり、頸部でくびれ口縁部が



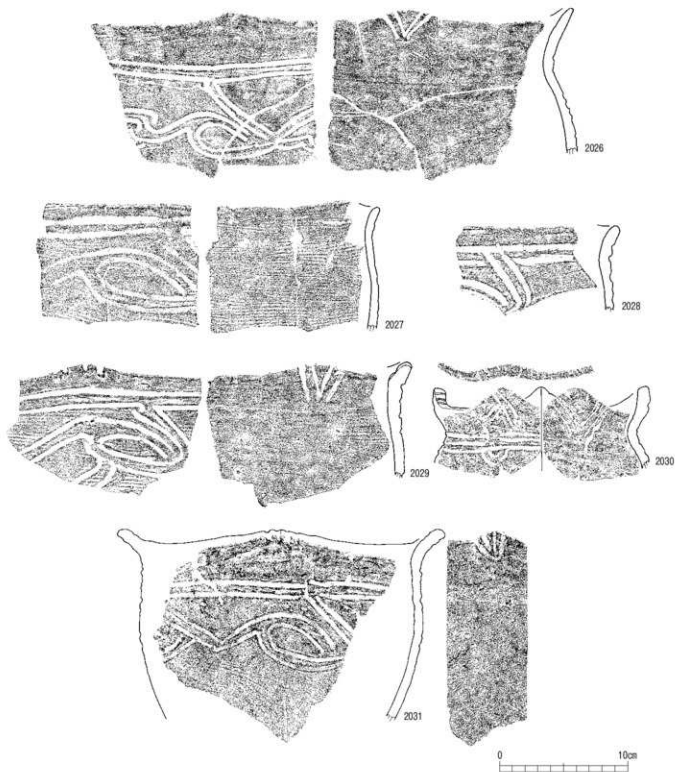
第299図 指宿式土器(143)Ⅱb類⑥



第300図 指宿式土器(144)Ⅱb類⑦



第301图 指宿式土器 (145) II b類⑧



第302図 指宿式土器 (146) II b類⑨

外反する器形のものである。口縁部に2本1組の横位の沈線を巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円状の文様が施されているものである。

2032~2040は、鉢である。

2032~2037は、膨らむ胴部から頸部でくびれ、口縁部

が外反するものである。平口縁の鉢である。

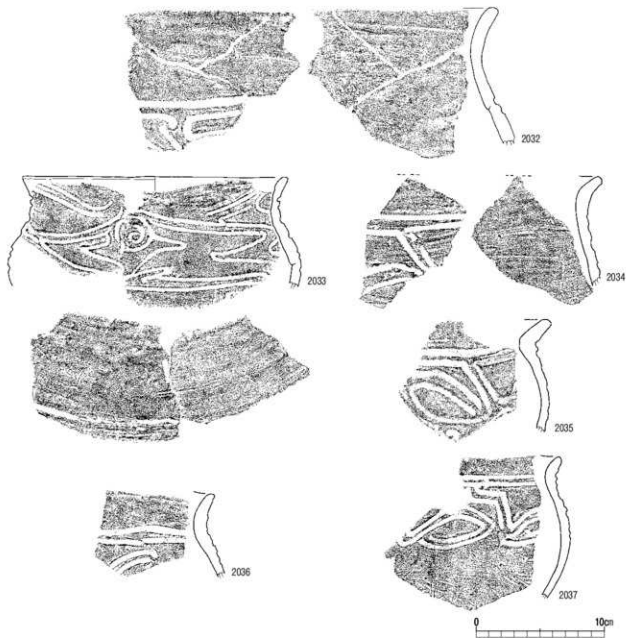
2032は、胴部上部に横位の沈線を1本巡らし、その下位に楕円状の文様を施すものと思われる。2033は、口縁部に横位や斜位に2本1組の沈線による文様を施し、その中に渦巻状の文様が施されている。2034・2035は、口

縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に楕円状の文様を施すものである。楕円状の文様は2本の横位の沈線から伸びる斜位の沈線と一緒に音符のような文様になっている。

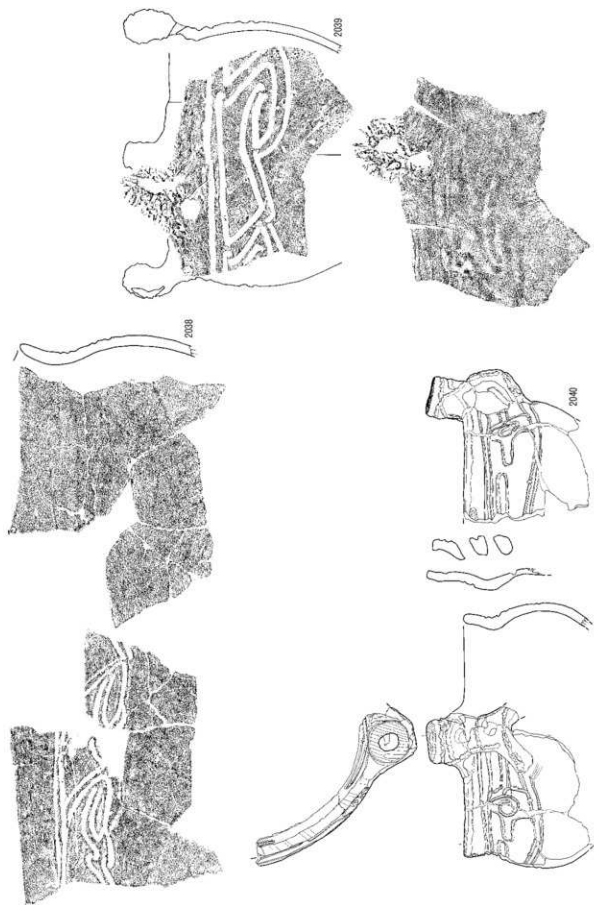
2036~2040は、口縁部が波状を呈するものや突起を有するものである。

2036~2039は、口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に楕円状の文様を施すものである。楕円状の文様は2本の横位の沈線から伸びる斜位の沈線と一緒に音符のような文様になっているものである。2036は、口縁部に横位に2本1組の沈線を巡らし、その下位に2本1組の沈線により楕円を施すものである。楕円を描く沈線には刺突文が施されている。2037は、口縁部に横位の

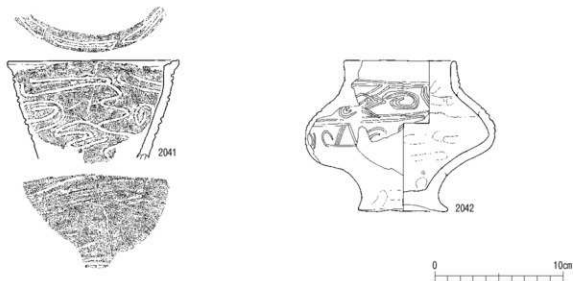
沈線を2本巡らし、その下位に楕円状の文様を施すものである。楕円状の文様は2本の横位の沈線から伸びる鉤状の沈線と一緒に音符のような文様になっている。2038は、口縁部に横位に2本1組の沈線を巡らし、その下位に楕円状の文様を施すものである。楕円状の文様は、2本1組の入組状の文様のある沈線により兩階の楕円状の文様とつながっている。楕円状の文様は2本の横位の沈線から伸びる鉤状の沈線と一緒に音符のような文様になっている。2039は、口縁部に粘土紐を楕円に貼り付け透孔のある突起とし、この突起を4か所に有するものである。突起には、貝殻腹縁部による刺突文が施されている。2040は、円筒状の突起を2か所に有するものである。この突起から胴部へ楕円状の把手のつくもので



第303図 指宿式土器(147)Ⅱb類⑩



第304圖 指雀式土器 (146) II b 類①



第305図 指宿式土器 (149) II b類②

ある。把手橋状部には、上下2か所に透かしが施され、把手下部は二叉に分かれ胴部に貼り付けられている。突起部上面及び口縁端部には貝殻背による押圧文が施されている。突起部外面及び把手外面には、貝殻腹縁部による刺突文が施されている。口縁部及び胴部上部に2本の横位の沈線が施され、この沈線間に楕円状や渦巻状の文様が施されている。

2041・2042は、小型の土器である。2041は、小型の鉢である。口縁部に楕円状や逆S字状の文様が施されている。口縁端部を平らに仕上げ、楕円状の文様を連続して施している。2042は、小型の壺形の土器である。口縁部上下に横位の2本1組の沈線を巡らし、その間に渦巻状の文様などを描いている。底部は、上げ底状である。

ウ II c類土器 (第306図～第309図 2043～2056)

II c類土器は、口縁部付近に曲線的な沈線によりつづら折り状の文様が施されているものである。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条状により施されているものがほとんどである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどであるが、平らに仕上げものややや尖ったものがある。平口縁のものや波状口縁のものがある。底部外形は、端部が張りくびれながら胴部へ立ち上がるもの、くびれはなく開きながら胴部へ立ち上がるものとなる。深鉢と鉢がある。ここではつづら折り状の文様としているが、文様の一部だけのものもあり、楕円状などの他の文様になる可能性のあるものも含まれている。

2043～2048は、胴部から開きながら立ち上がり口縁部にいたるものや、胴部から開きながら立ち上がり口縁部にいたり口縁端部が外反するものである。深鉢である。

2043・2044は、胴部から開きながら立ち上がり口縁部にいたるものである。2043は、口縁部に横位に沈線を1

本巡らし、その下位に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。2044は、端部が張りくびれのある底部から開きながら立ち上がり口縁部にいたるタイプのものである。底部には、スタゲ状の圧痕が観察できる。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。逆S字状の文様にも見えるが、やや角張った曲がりがあったり斜位の沈線が余計にありつづら折り状の文様とした。

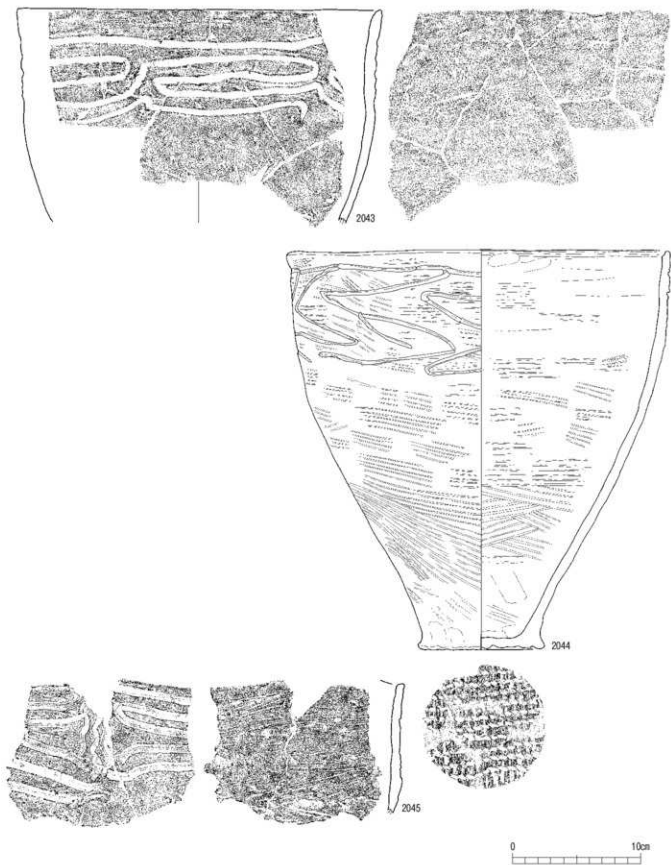
2045は、波状口縁のものである。突起下位に3本の縦位の逆S字状の文様が施され、その左右につづら折り状の文様が施されている。

2046～2048は、胴部から開きながら立ち上がり口縁端部が外反するものである。

2046・2047は、平口縁のものである。2046は、胴部上部と口縁部に、ゆるやかな横位の波状の沈線を巡らし、その間に沈線によりつづら折り状の文様が施されている。このつづら折り状の文様は一部なので、楕円状の文様になるものかもしれない。2047は、口縁部に横位に沈線を2本巡らし、その下位に沈線によりつづら折り状の文様が施されている。このつづら折り状の文様は一部なので、楕円状の文様などになるかもしれない。

2048は、外反するもので口縁部が肥厚するものである。突起を4か所に有するものである。端部が張りくびれをもつ底部から開きながらやややむ胴部へいたり、口縁部へまっすぐ立ち上がり、口縁端部が外反するものである。底部は、鯨底である。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。一部には、鉤状・入組文状の文様が施されている。

2049～2051は、膨らむ胴部から口縁部がやや内傾・内寄るものである。口縁端部は、丸く収めるもの、平ら



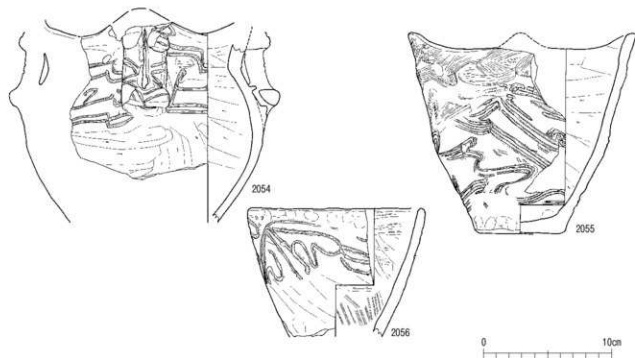
第306图 指宿式土器 (150) II c類①



第307图 指宿式土器 (151) II c類②



第308图 指宿式土器 (152) II c類③



第309図 指宿式土器 (153) II c類④

に仕上げるものがある。2049は、口縁部に横位に沈線を2本施し、その下位につづら折り状の文様が施されている。このつづら折り状の文様は一部なので、楕円状の文様になるかもしれない。2050は、口縁端部を平らに仕上げたものである。2051は、胴部上部に最大径があるもので、口縁部は内傾している。口縁部には、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。

2052~2054は、鉢である。2052は、影らむ胴部から頸部でややくびれ、口縁部がやや外反するものである。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。一部には、鉤状の文様となっているところがある。2053は、影らむ胴部から頸部でくびれ、口縁部が大きく外反するものである。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。一部には、逆S字状の文様となっているところがある。2054は、4か所に把手をもつものである。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。一部には、鉤状の文様となっているところがある。

2055・2056は、小型の鉢である。2055は、4か所に突起を有するものである。底部から開きながら口縁部にいたるものであり、口縁端部はやや平らに仕上げられている。外面全体に、ヘラ状の工具による沈線によりつづら折り状の文様が施されている。2056は、2055よりより小振りの鉢である。胴部上部から口縁部に、沈線によりつづら折り状の文様が施されている。

Ⅱ d類土器 (第310図~第315図 2057~2084)

Ⅱ d類土器は、口縁部付近に曲線的な沈線により、S字状・逆S字状の文様が施されているものである。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどであるが、平らに仕上げるものややや尖ったものがある。平口縁のものや波状口縁のものがある。深鉢と鉢がある。

2057~2080は、深鉢である。

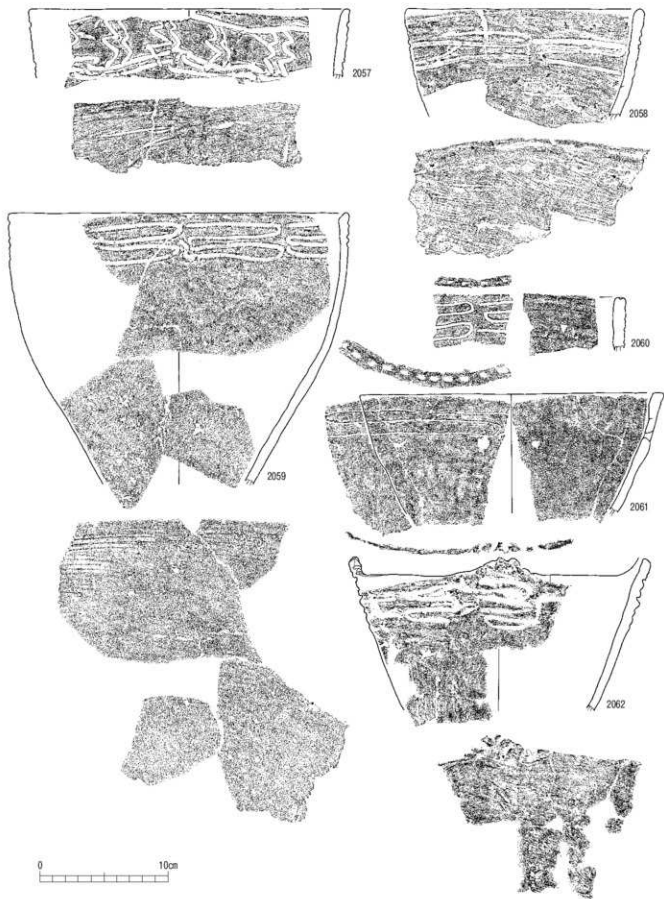
2057~2066は、口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するものである。

2057~2061は、平口縁である。2057は、口縁端部直下に横位の沈線を1本、口縁下部に2本1組の入組文状の横位の沈線を巡らし、その間に沈線による2本1組の逆S字状の文様が縦位に施されている。

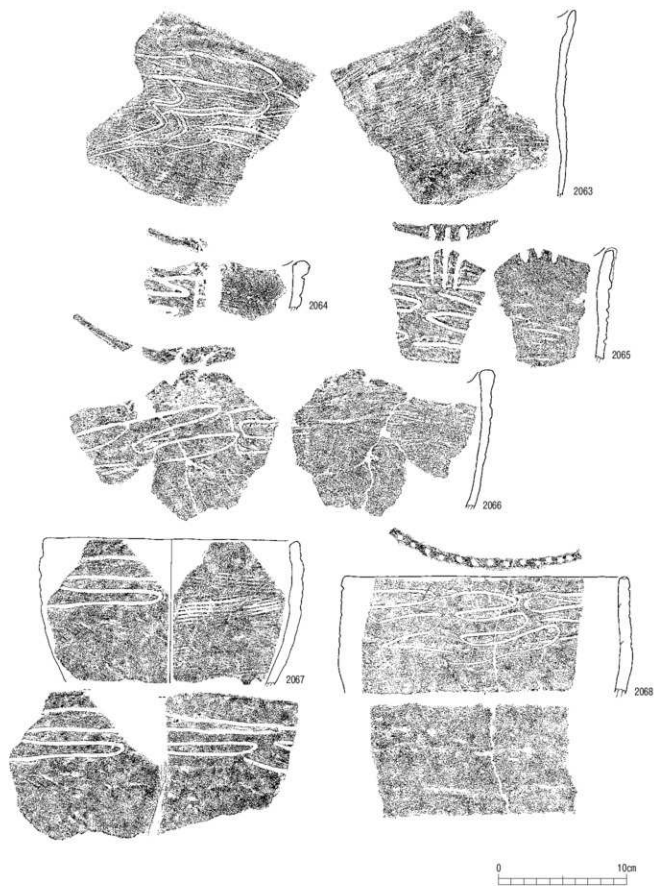
2059~2061は、口縁部が肥厚するものである。2060は、口縁部に細い沈線により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。口縁端部はほぼ平らに仕上げられ、ヘラ状工具による刺突文が連続的に施されている。2061は、口縁部により細い沈線により横長の逆S字状の文様が施されている。口縁端部は平らに仕上げられ、ヘラ状工具による刺突文が連続的に施されている。

2062~2066は、波状口縁のものである。

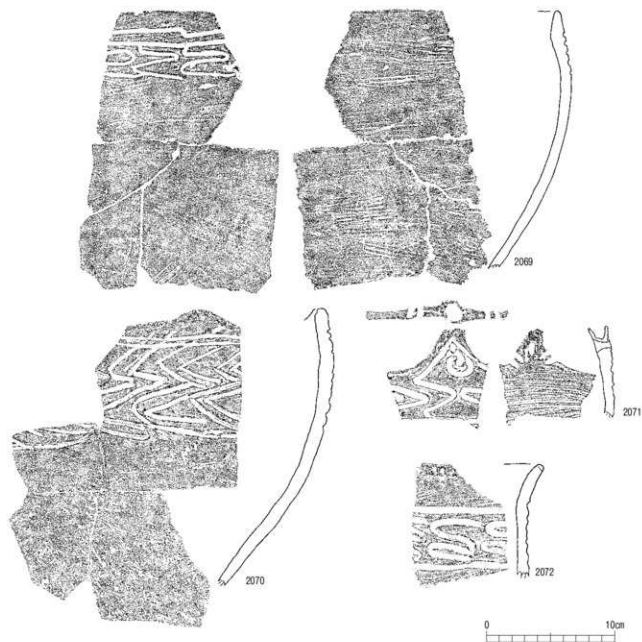
2062は、棒状工具の押圧による刻みのある波長部を4か所有するものである。口縁部に沈線により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2063は、口縁部に



第310图 指宿式土器(154)Ⅱd類①



第311图 指宿式土器(155)Ⅱd類②



第312図 指宿式土器 (156) II d類③

2本1組の沈線により垂下する逆S字状の文様が施されている。

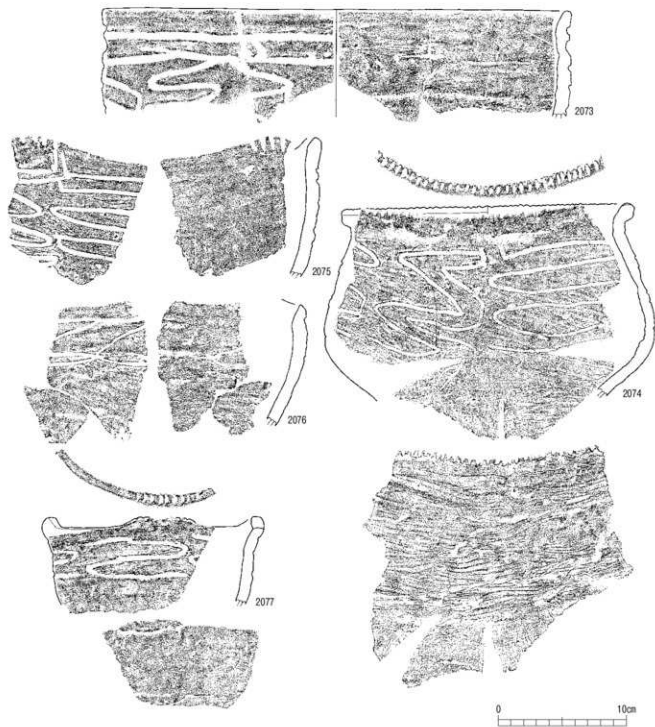
2064～2066は、口縁部が肥厚するものである。2065は、突起部上面から外面に3本の縦位の沈線が施されている。突起部内面にも、3か所の刺突文が施されている。口縁部には、沈線により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2066は、ねじった粘土紐の突起を有するものである。口縁部には、沈線による逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。

2067～2080は、膨らむ胴部から口縁部がやや内傾・内弯するものである。口縁端部は、丸く取めるものがほとんどであるが、やや尖ったものもある。

2067～2069は、平口縁のものである。2067は、胴部上

部から口縁部に沈線により横長のS字状の文様が横位に連続的に施されている。2068は、胴部上部から口縁部に沈線により垂下する逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。口縁端部には、巻貝殻頂部による刺突文が連続的に施されている。2069は、口縁端部をやや尖らせるように仕上げている。口縁部上部に鈎状の沈線を横位に1本巡らし、その下位に沈線によりS字状の文様が横位に連続的に施されている。

2070・2071は、波状口縁のものである。2070は、口縁部上部に横位の沈線を横位に2本巡らし、その下位に沈線によりS字状の文様が横位に密に連続的に施されている。2071は、凹みのある突起をもつものである。この突起には小さな孔が穿たれており、突起部上面・両側面か



第313図 指宿式土器 (157) II d類④

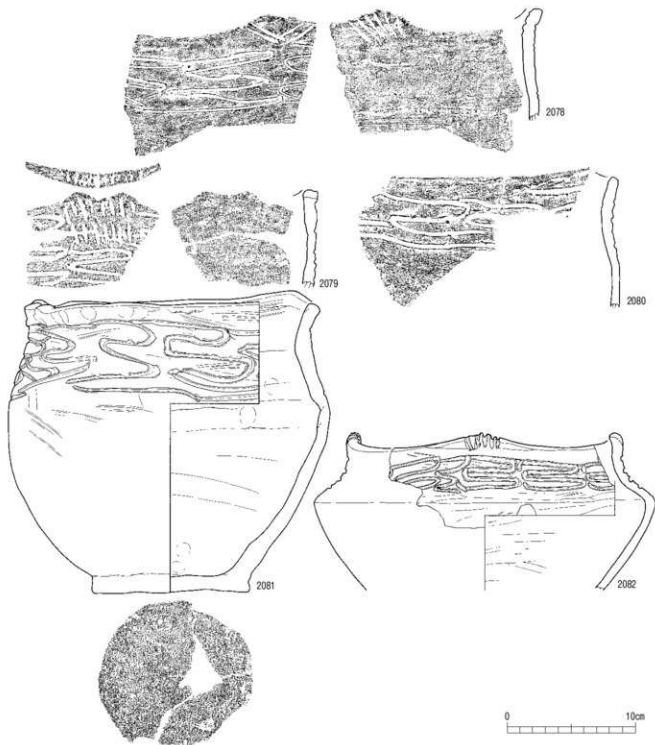
ら内面に2本ずつの沈線が施されている。

2072～2080は、膨らむ胴部から口縁部がやや内傾・内弯するもので、口縁端部が外反するものである。

2072～2074は、平口縁のものである。2072は、口縁部に上下2本の横位の沈線を巡らし、この間に沈線によるS字状の文様が横位に連続的に施されている。2073は、口縁部上部に横位に沈線を2本巡らし、その下位に沈線

により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2074は、膨らむ胴部から頭部でくびれ、口縁部が大きく外反するものである。口縁端部には、ヘラ状工具による刻みが密に施されている。口縁部には、2本1組による沈線によりS字状の文様が横位に連続的に施されている。

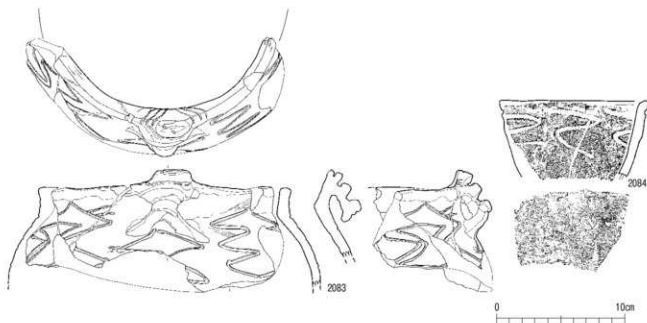
2075～2080は、波状口縁のものや突起を有するもので



第314図 指宿式土器 (158) II d類⑤

ある。2075は、突起部下に沈線により角張ったU字状を描き、その下に沈線により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2076は、口縁部が内弯し口縁端部が外反するものである。口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下に沈線により逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。文様が一部であるので逆S字状の文様としたが、楕円状の文様になる可能性もあるもので

ある。2077は、刻みのある台形状の突起がつくものである。口縁部には、沈線による逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2078は、波頂部をもつものである。波頂部は、外面に2本の斜位の短沈線によりV字状に文様が施され、内面に6本の斜位の短沈線が施されている。2079は、2つ山のある突起のつくものである。突起部の下に、縦位の短沈線を8本ずつ2段に施し、その下に



第315図 指宿式土器 (159) II d類⑥

や左右に沈線による逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。2080は、口縁部に沈線による逆S字状の文様が横位に連続的に施され、その下に沈線が1本横位に巡らされている。

2081は、壺である。胴部上部から口縁部に、沈線による逆S字状の文様が横位に連続的に施されている。逆S字状の文様は、上の方が横位の沈線によりつながっている。

2082～2084は、鉢である。2082は、胴部上位に最大径のあるそろばん玉の形をした胴部から頸部でくびれ、口縁部がほぼ直行するものである。口縁部から肩部に、逆S字状の文様が施されている。2083は、膨らみ胴部から頸部でくびれ、口縁部がやや外反するものである。突起部直下には、橋状の把手がつく。胴部上部から口縁部に、沈線により垂下するS字状の文様が施されている。2084は、胴部上部から口縁部に、沈線によりS字状の文様が横位に連続的に施されている。

オ II e類土器 (第316図～第330図 2085～2143)

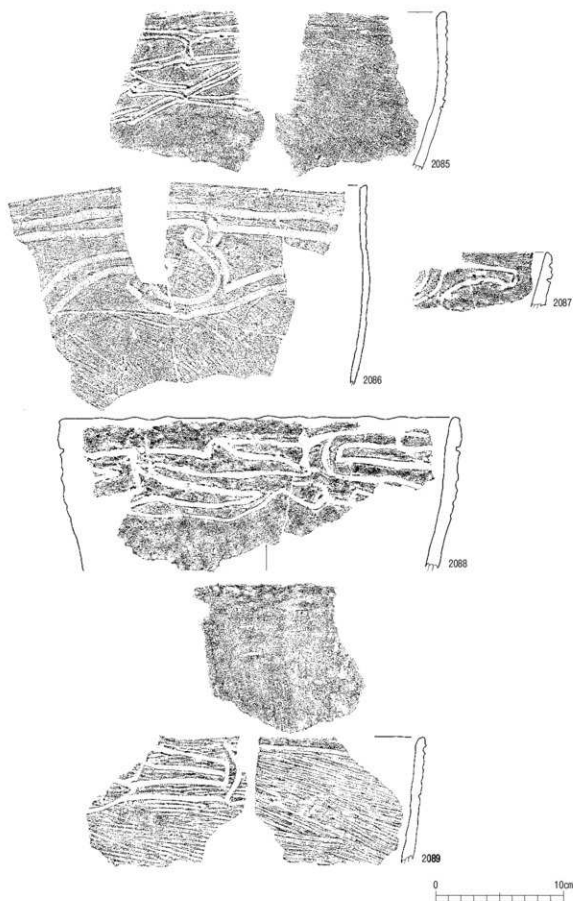
II e類土器は、口縁部付近に曲線的な沈線により文様が施されているものであり、II a類土器からII d類土器に分類できなかったものである。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどであるが、平らに仕上げるものややや尖ったものがある。平口縁のものや波状口縁のものがある。深鉢と鉢がある。

2085～2139は、深鉢である。

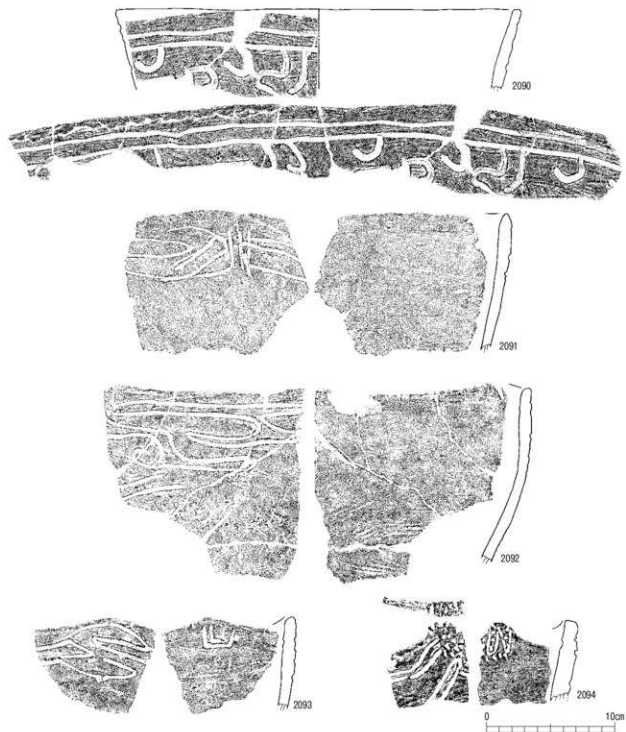
2085～2091は、平口縁のものである。2085～2106は、口縁部が胴部から聞きながら立ち上がるものや直行する

ものである。2085は、胴部上部から口縁部に、沈線により楕円状の文様や入組状の文様などが施されている。2086は、胴部上部から口縁部に横位の沈線を1本巡らし、その下に入組状の文様や波状の文様などが施されている。2090は、口縁部に横位の沈線を2本巡らし、下の沈線から下位にJ字状の文様が施されている。なかには、2本1組の沈線によりJ字状の文様が施されているところがある。

2092～2106は、波状口縁のものや突起を有するものである。2092は、突起部から縦位の短沈線が施されて、横位の沈線とつながっている。横位の沈線の下位には、つづら折り状の文様や楕円の文様などが施されている。2093は、低いならかな山形の突起をもつものである。突起部下位には、弧状やつづら折り状の文様が施されている。内面には、2本1組の角張ったU字状の文様が施されている。2095は、刻みのある低いゆるやかな山形の突起を4か所に有するものである。2096は、突起部下位では山形に隆起する横位の沈線を2本巡らし、その下位に沈線による楕円状の文様などが施されている。突起部内面には、細い沈線により二重のV字状に文様が施されている。2098は、粘土紐により三角形の意のつく突起部のあるものである。口縁部に楕円状の文様が斜位に組合せながら施されている。2099は、山形の突起を4か所に有するものである。口縁部に突起部下位では山形に隆起する横位の沈線を2本巡らし、その下位に沈線による楕円状の文様などが施されている。突起部から内面には、3本の縦位の沈線が施されており、この沈線の終わりには刺突文が施されている。2100は、ねじった粘土紐



第316图 指宿式土器(160)Ⅱe類①



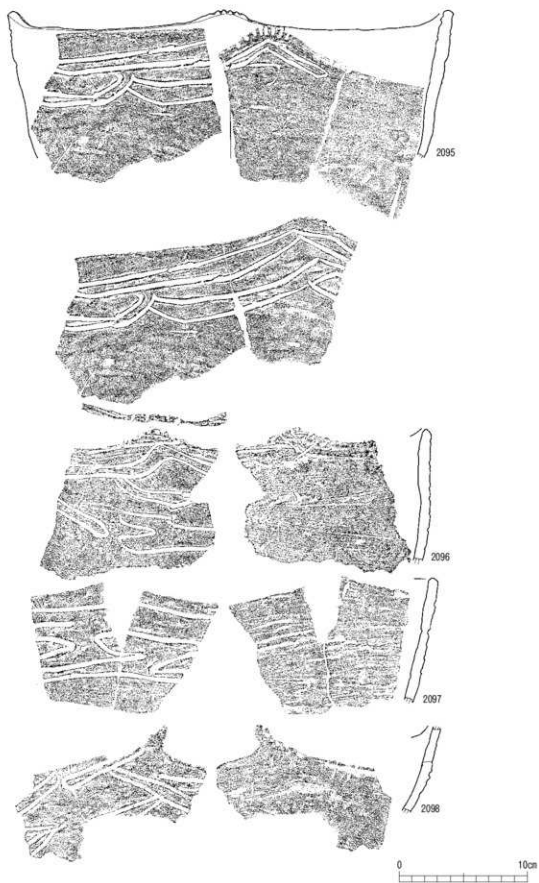
第317図 指宿式土器 (161) IIe類②

の突起が3か所につきものである。胴部上部から口縁部に、沈線による横位や楕円状の文様が施されている。2102～2106は、口縁部が肥厚するものである。2102は、刻みのある突起を4か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に楕円状や逆S状の文様が施されている。2104は、凹みのある円筒形の突起がつくものである。2105は、孔の穿たれた山形の突起を

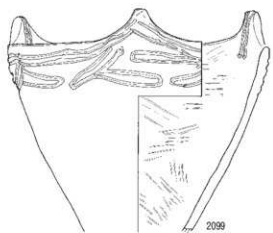
4か所に有するものである。この孔を中心として放射状に沈線が施されている。一番下の沈線につながるように斜位の逆J字状の文様が施されている。

2107～2113は、口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するもので、口縁端部が外反するものである。

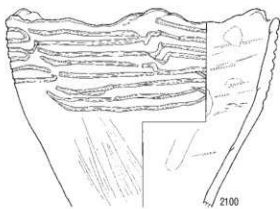
2107～2109は、平口縁のものである。2107は、口縁端



第318图 指宿式土器(162)Ⅱe類③



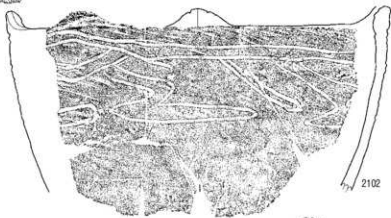
2099



2100



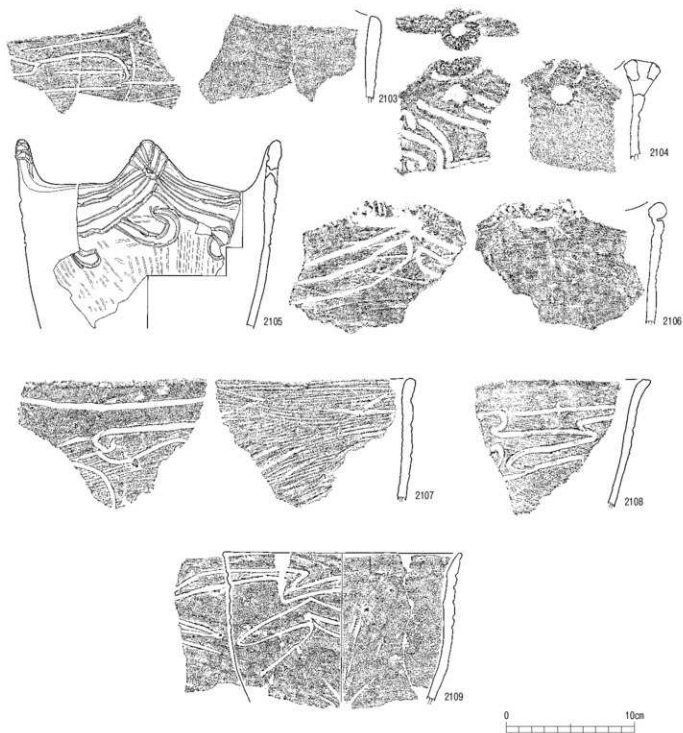
2101



2102



第319图 指宿式土器(163)Ⅱe類④

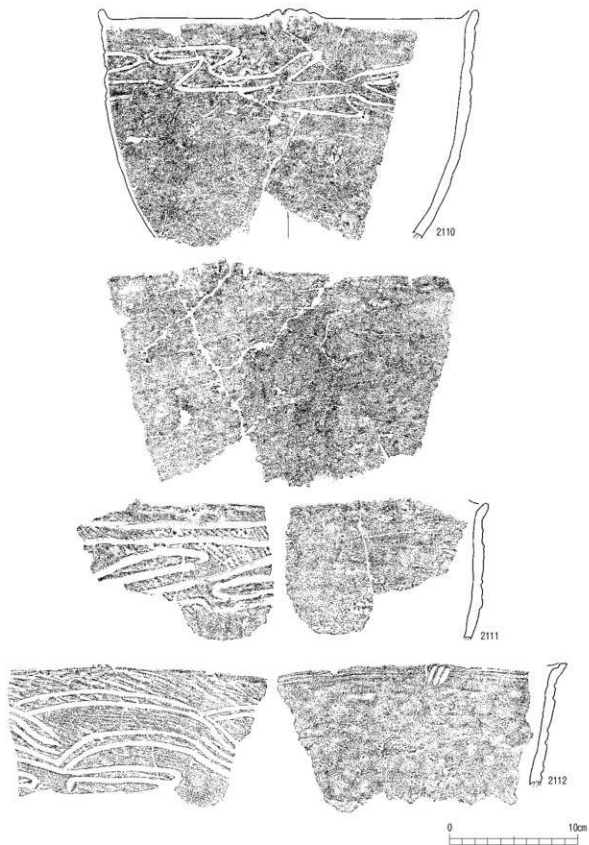


第320図 指宿式土器(164)Ⅱe類⑤

部が丸く収まるものである。口縁部に、横位の沈線を1本巡らし、その下位に曲線による文様を施している。2108は、口縁部には、逆S字状の文様が斜位につながるように施されている。2109は、口縁部に鉤状の横位の沈線を2本巡らし、その下位に逆S状の文様とつづら折り状の文様が施されているものであると思われる。

2110~2113は、波状口縁のものである。2110は、刻み

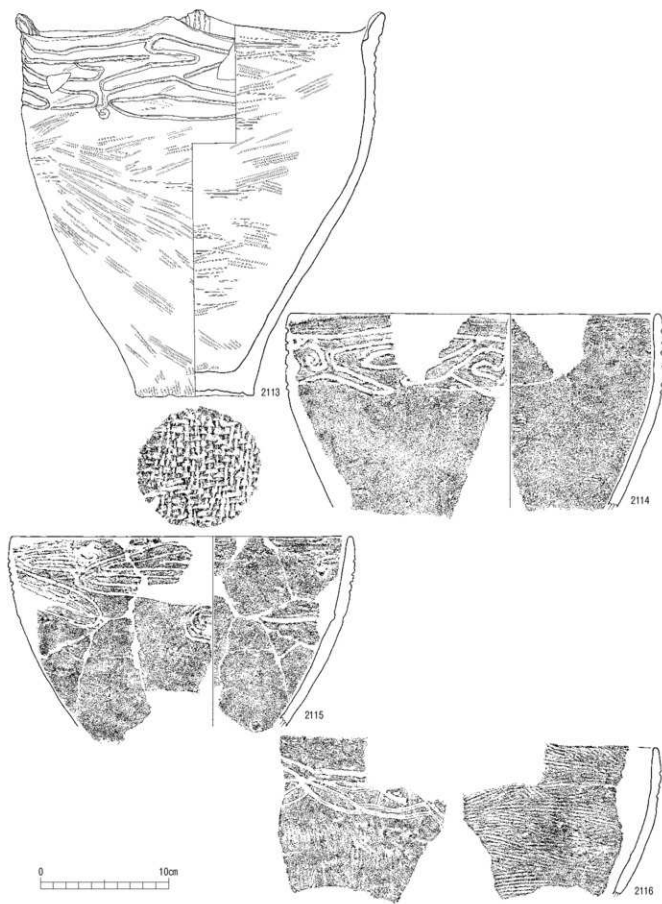
のある低い突起を4か所に有するものである。口縁部には、沈線による精円状やつづら折り状の文様が施されている。2111は、口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に精円状やつづら折り状の文様が施されている。2112は、口縁部には、弧状の沈線が横位に施され、その下位に沈線による弧状やつづら折り状の文様が施されている。2113は、底部から胴部へ開きながら立ち上がり、



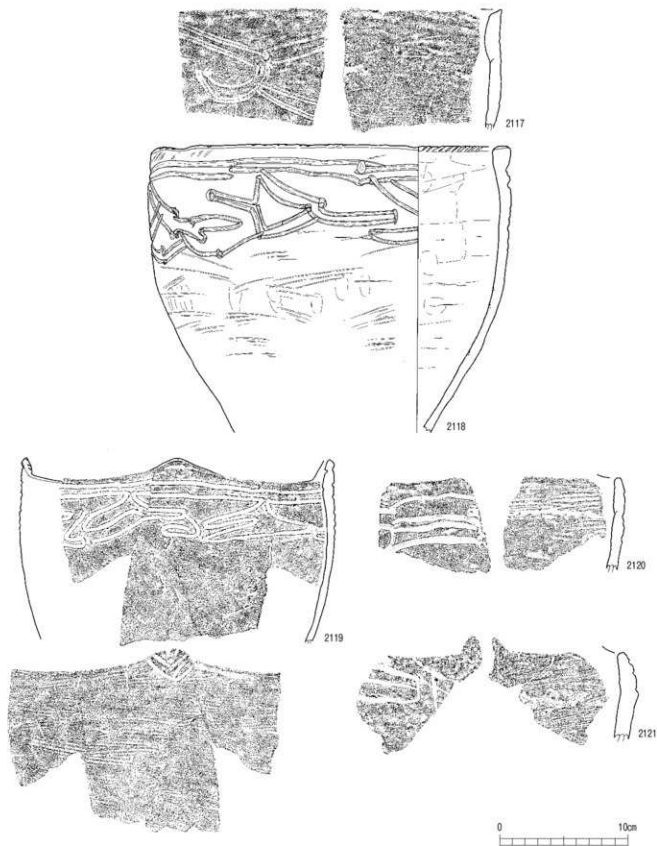
第321図 指宿式土器 (165) II e類⑥

胴部から口縁部へまっすぐいたり、口縁端部が大きく外反するものである。底部は上げ底を呈し、外面には網代

編みの圧痕が観察できる。山形の突起を4か所に有するものである。外面には、つづら折り状や逆S状の文様な



第322图 指宿式土器(166)Ⅱe類⑦



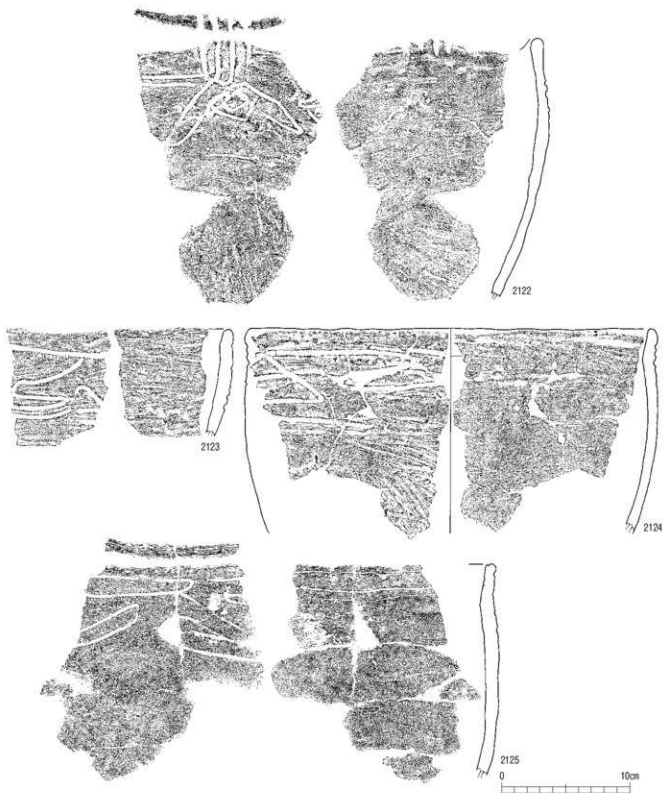
第323図 指宿式土器(167) II e類⑧

どが施されている。

2114～2139は、影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯す

るものである。

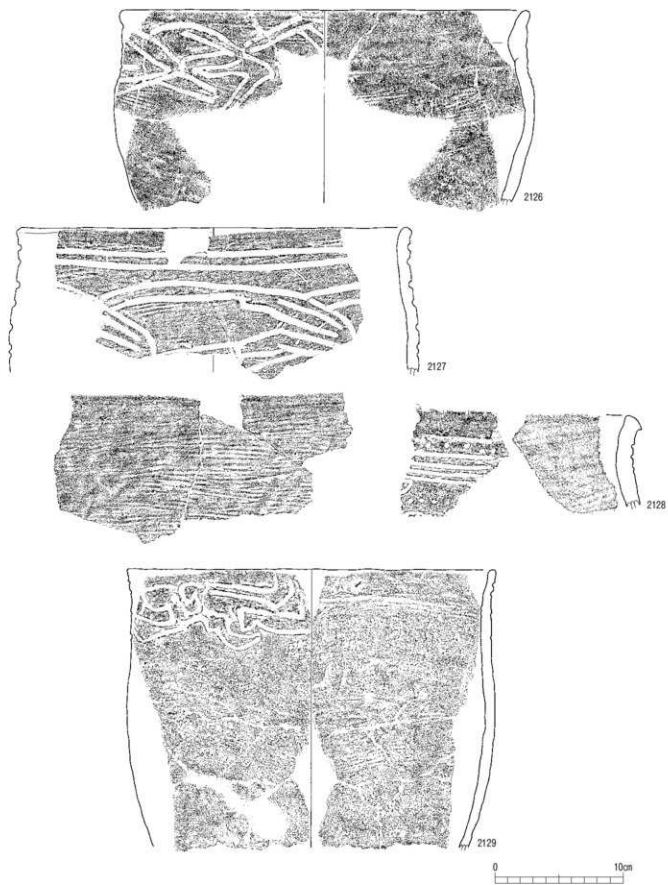
2114～2118は、平口縁のものである。2114は、口縁部



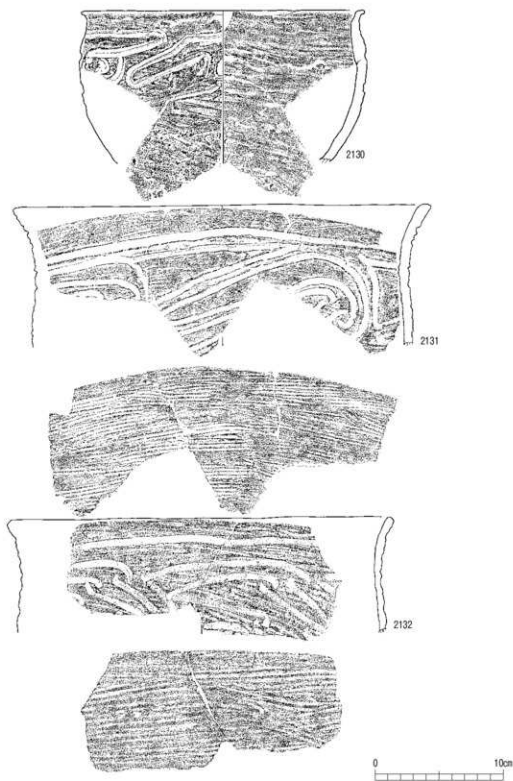
第324図 指宿式土器 (168) II e類⑨

に横位の沈線を巡らし、その下位に楕円状やつづら折り状の文様が施されている。2115は、口縁部に楕円状やつづら折り状の文様が施されている。2117・2118は、口縁部が肥厚するものである。2117は、口縁端部がやや尖るものである。口縁部に斜位の「J」字状などの文様が施されている。

2119～2122は、波状口縁である。2119は、口縁部に横位の沈線を巡らし、その下位につづら折り状や楕円状の文様などが施されている。2122は、刻みのある波頂部を有するものである。波頂部外面には、縦長のU字状の文様がつながるように3つ描かれている。その下位には、横位の沈線や楕円状の文様が施されている。



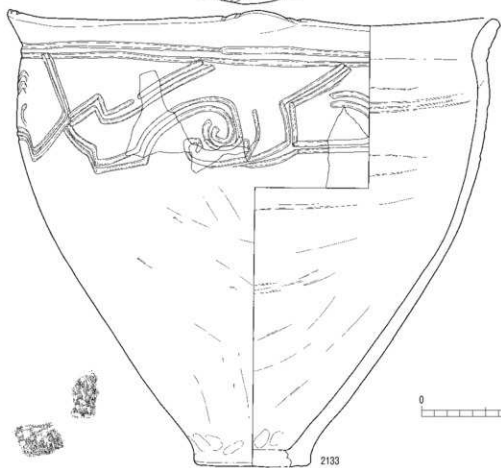
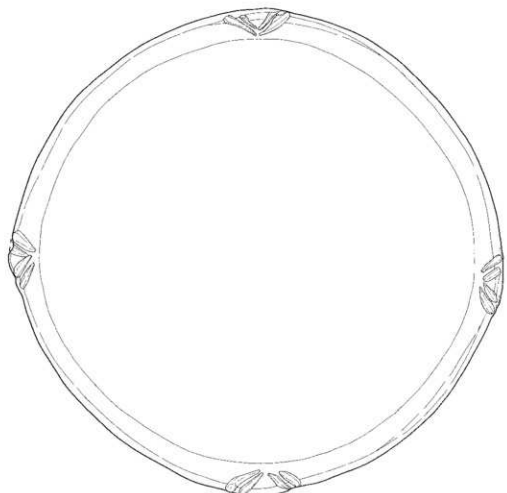
第325図 指宿式土器(169)Ⅱe類⑩



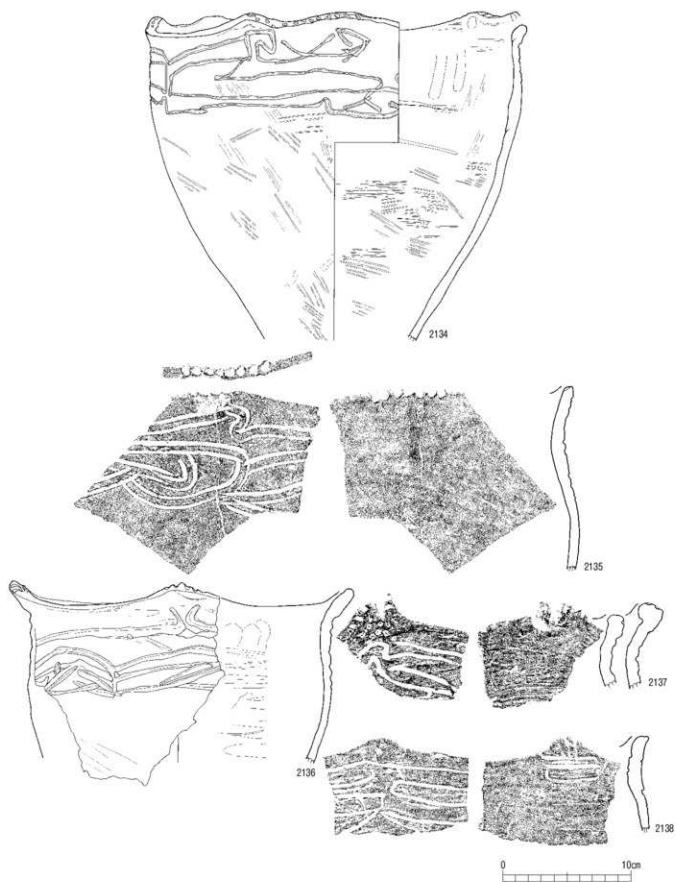
第326図 指宿式土器 (170) II e類①

2123～2139は、口縁部が外反するものである。2124は、口縁部にZ字状の文様やつづら折り状の文様が施されている。2127は、口縁部に沈線を横位に2本施し、その下に鈎状や弧状などの文様が施されている。2128は、口縁部に沈線による渦状や横位の文様や巻貝殻頂部による刺突文が横位に連続的に施されている。2130は、丸く影

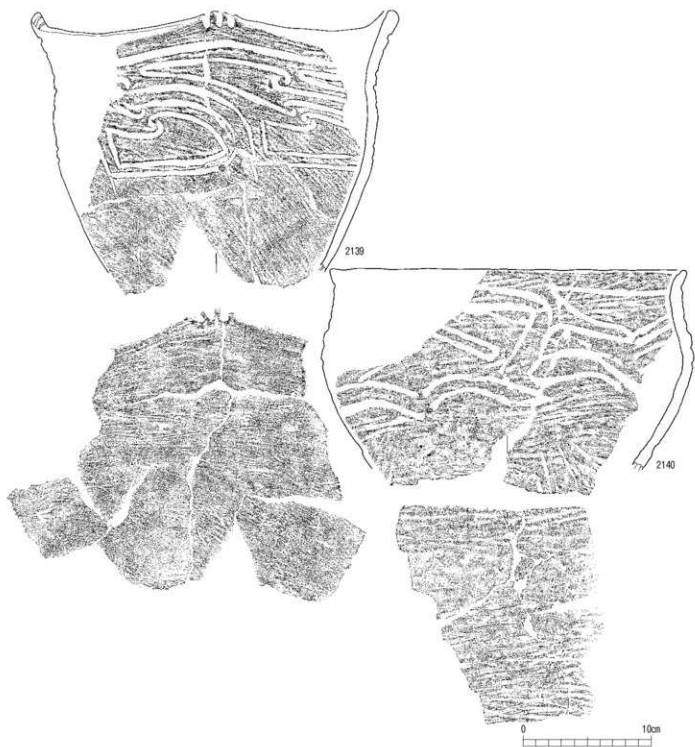
らむ胴部から弱くくびれ、口縁部が外反するものである。口縁部には、沈線によるつづら折り状や楕円状などの文様が施されている。2131は、口縁部に横位の沈線を巡らし、その下に楕円状や入組状の文様が施されている。2132は、口縁部に横位の沈線を巡らし、その下に斜位の入組状の文様などが施されている。



第327图 指宿式土器 (171) II e類②



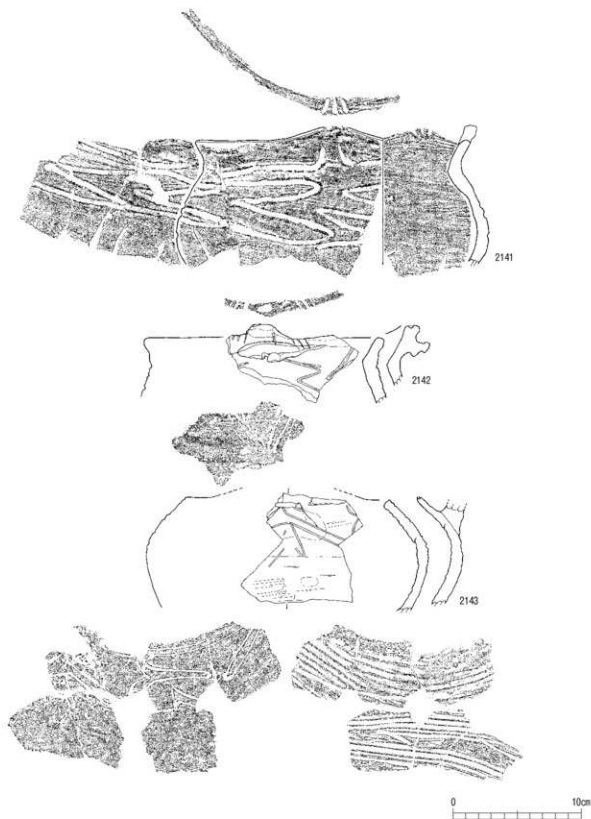
第328图 指宿式土器(172)Ⅱe類⑬



第329図 指宿式土器 (173) II e類④

2133~2139は、口縁端部が肥厚するものである。2133は、刻みのある低い波頂部を4か所に有するものである。口縁部に横位の沈線を2本巡らし、その下位に鉤状や嵩状の文様が施されている。2134は、二瘤状の突起を4か所に有するものである。突起部上面には、巻貝殻頂部による刺突文が施されている。口縁部には、沈線による鉤状やつづら折り状などの文様が施されている。2135は、巻貝殻頂部による刺突が施された台形状の低い突起を有

するものである。口縁部には、沈線による波状の沈線が横位に施され、その下位に沈線によるつづら折り状や楕円状の文様などが施されている。2136は、刻みのある低い山形の波頂部を4か所に有するものである。口縁部には、横位の沈線が施され、その下位に沈線による弧状や楕円状などの文様が施されている。2137は、上面に巻貝殻頂部による刺突が施された突起をもつものである。突起部外面には巻貝殻頂部による刺突文が施され、内面に



第330図 指宿式土器 (174) II e類^⑮

は貝殻腹縁部による刺突文が施されている。2139は、刻みのある山形の低い波頂部を4か所に有するものである。口縁部には、横位の沈線が施され、その下位に沈線

による斜位の入組状の文様などが施されている。

2140～2143は、鉢である。

2140は、平口縁のものである。膨らんだ胴部から頸部

で弱くくびれ、口縁端部が外反するものである。胴部上部から口縁部に、沈線によるつづら折り状や楕円状などの文様が施されている。

2141～2143、波状口縁のものや突起を有するものである。2141は、膨らんだ胴部から頸部でくびれ、口縁端部が外反するものである。胴部上部から口縁部に、沈線による逆S字状やつづら折り状などの文様が施されている。2142・2143は、把手のつくものである。2142は、浅い凹みのある台形状の突起部下位から把手が伸びるものである。2143は、膨らんだ胴部から口縁部が内傾するものである。突起部については欠損しているため詳細は分からないが、突起部から把手が伸びているものである。

(3) III類土器 (第331図～第376図)

III類土器は、横位の直線的な沈線や横位の曲線的な沈

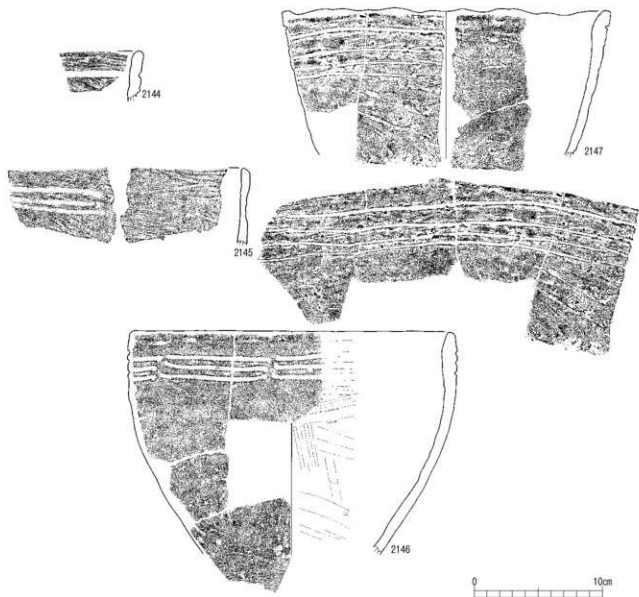
線、横位の入組文などの文様が施されているものである。深鉢・鉢がある。器形的には、口縁部が外反するもの、直行するもの、内反・内弯するものがあり、口縁部形態も平口縁、波状口縁のものがある。

ア III a類土器 (第331図～第339図 2144～2201)

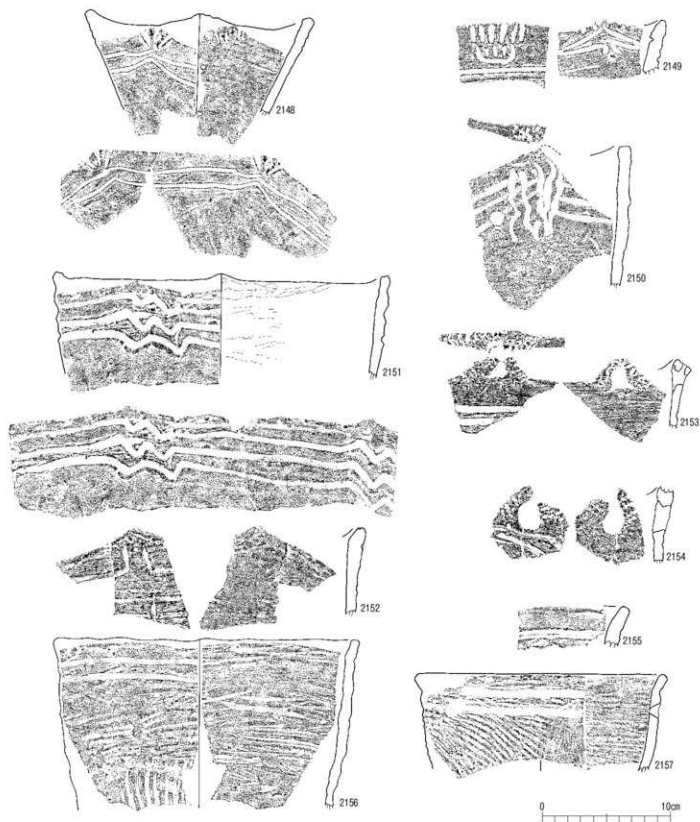
III a類土器は、口縁部付近に直線的な沈線により文様を横位に施すものである。器面調整は、横位・縦位や斜位の貝殻条痕により施されているものがほとんどである。口縁端部は、丸く収めるものがほとんどであるが、平らに仕上げるものもある。深鉢・鉢がある。

2144～2193は、深鉢である。

2144～2168は、口縁部が胴部から開きながら立ち上がるものや直行するものである。2144～2147は、平口縁のものである。2144は、口縁部に横位の沈線を巡らしている。2145・2146は、両端に刺突文が施されている沈線を



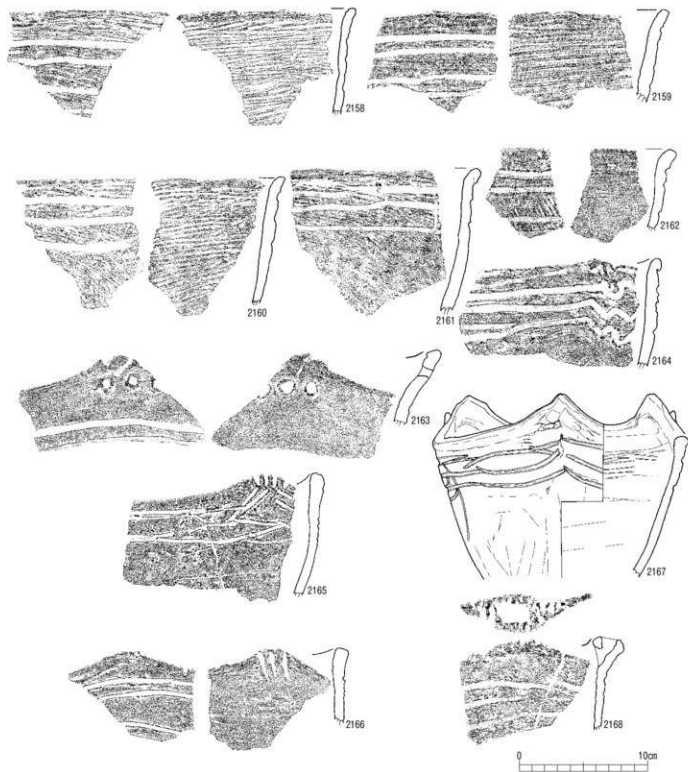
第331図 指宿式土器 (175) III a類①



第332図 指宿式土器 (176) III a類②

3本ずつ横位に連続的に巡らしている。2146は、口縁部が肥厚している。2147は、口縁部に細い沈線を横位に4本巡らしている。口縁部は、肥厚している。2148～2154

は、波状口縁のものである。2148は、4か所に波頂部を有するものである。波頂部下位で隆起する横位の沈線を2本巡らしている。2149は、低い突起をもつものである。

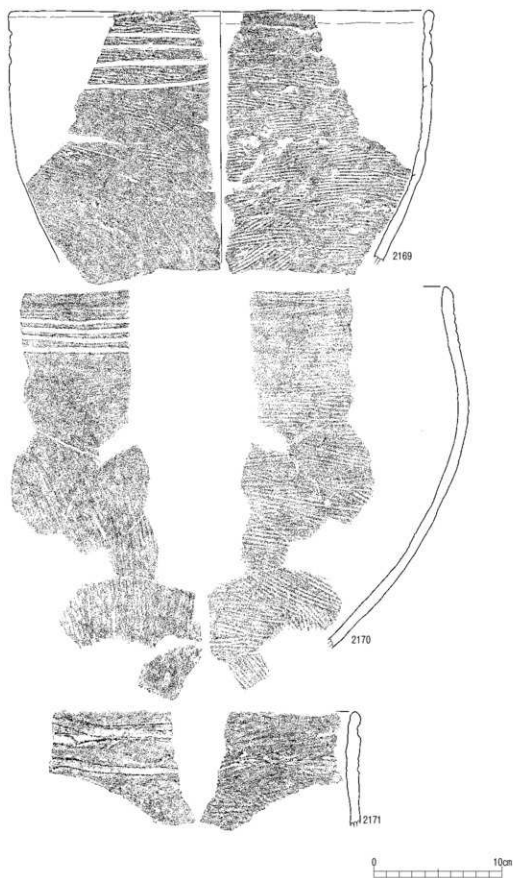


第333図 指宿式土器 (177) III a類③

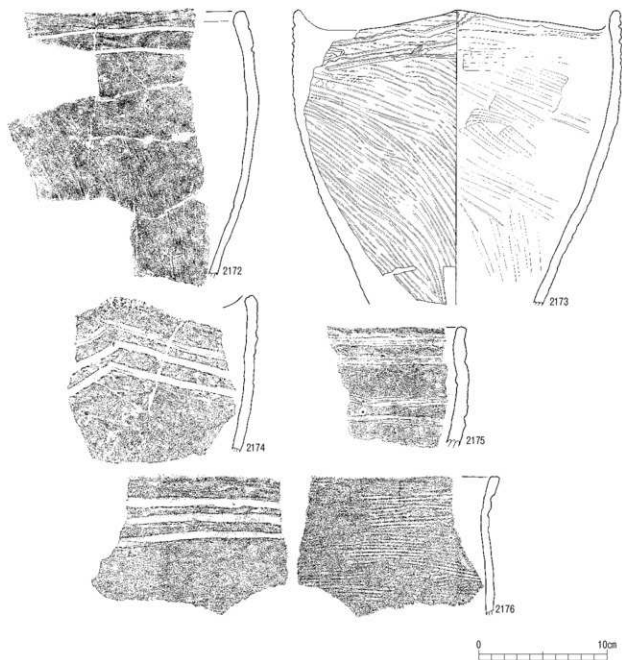
突起部外面には、6本の縦位の短沈線と温泉マークのような文様が施されている。2150は、突起部下位に垂下する逆S字状の文様を5本施し、突起部下位で隆起する横位の沈線を3本巡らしている。2151は、突起部を4か所に有し、突起部下位で波状になる横位の沈線を3本巡らしている。2153・2154は、楕円形や円形の窓ができるよう

に粘土紐により突起部を作出しているものである。突起部には貝殻腹縁部による刺突文が施されている。

2155～2168は、口縁部が胸部から開きながら立ち上がるものやまっすぐ伸びるもので、口縁端部が外反するものである。口縁部に、横位の沈線を2～4本巡らしている。2156・2157は、口縁部に横位の沈線を2本巡らして



第334图 指宿式土器(178)Ⅲa類④



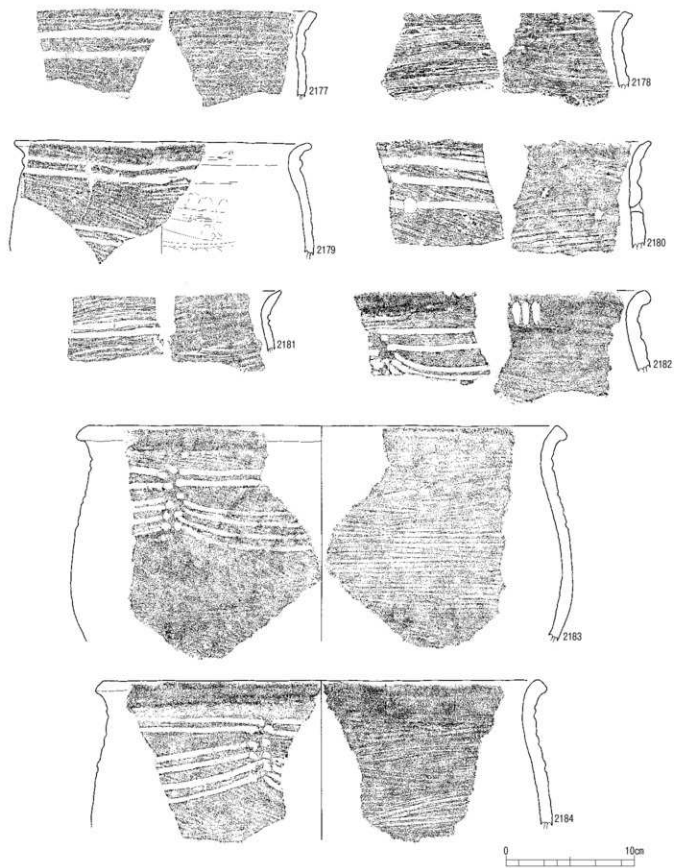
第335図 指宿式土器(179)Ⅲa類⑤

いる。2158・2159は、口縁部の上下に横位の沈線を2本ずつ巡らしている。2160～2162は、口縁部に横位に沈線を3本巡らしている。2163～2168は、波状口縁のものである。2163は、突起部の下に透孔を3か所設けている。2167は、突起を3か所に有するものである。2168は、上部から内面に貫通する孔のある突起をもつものである。口縁部に、横位の沈線を3本巡らしているものと思われる。

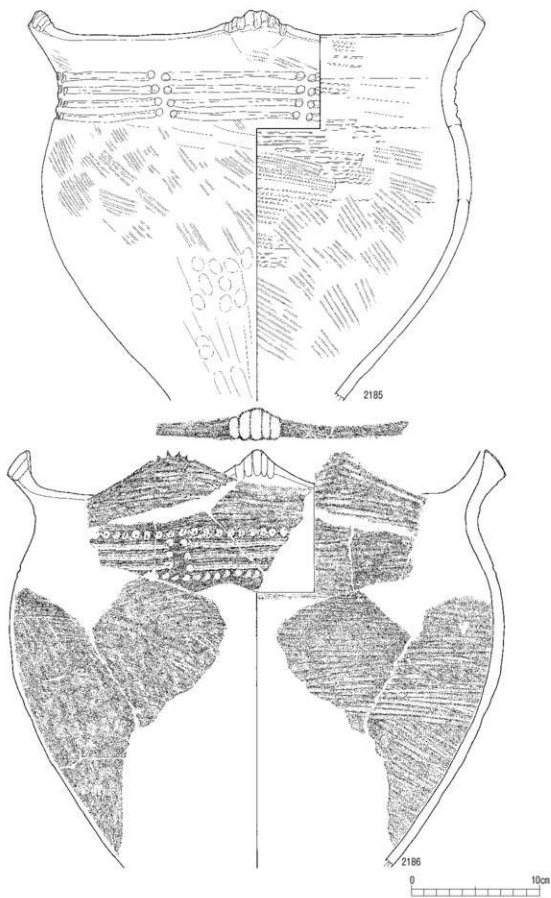
2169～2193は、影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するものである。2169～2172は、平口縁のものである。2169・2170は、口縁部に横位の沈線を4本巡らしている。2171・2172は、口縁部に横位の沈線を2本巡らしている。

2172は、口縁部が肥厚しているものである。2173・2174は、波状口縁のものである。2173は、突起を4か所に有するものである。2174は、突起部で隆起する横位の沈線を3本巡らしている。

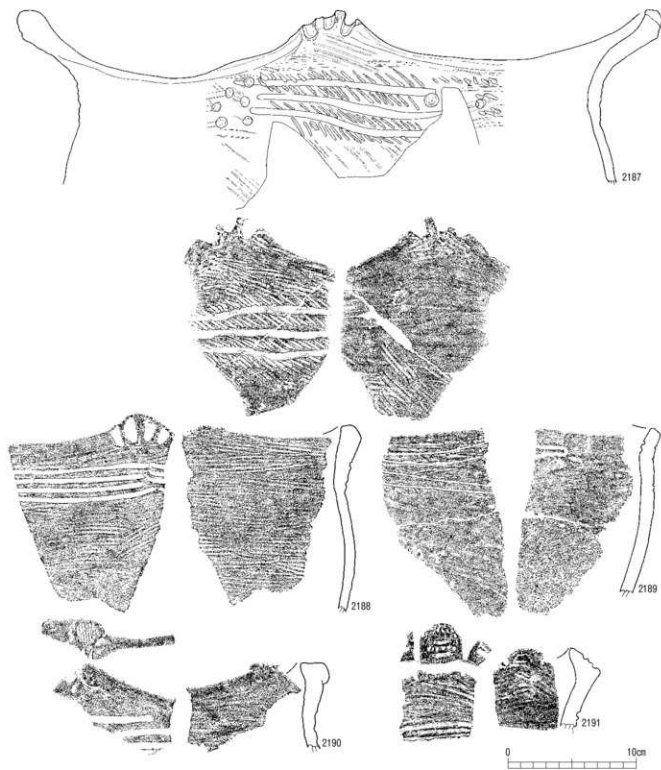
2175～2193は、影らむ胴部から口縁部が内傾・内弯するもので、口縁端部が外反するものである。2175～2184は、平口縁のものであり外反の強弱がある。口縁部に、2～6本の沈線を巡らしている。2175・2179は、口縁部の上下に2本ずつの横位の沈線を巡らしている。2175は、弱い外反である。2176・2178・2180は、口縁部に横位の沈線を3本巡らしている。2178は、ヘラ状工具の繊維質の痕が観察できる。2182～2184は、口縁端部が外朝



第336图 指宿式土器(180) III a類⑥



第337图 指宿式土器(181)Ⅲa類⑦



第338図 指宿式土器 (182) III a類⑧

を向いている。口縁部に、端に刺突文のある横位の沈線を破線状に横位に2本巡らし、その下位に端に刺突文のあるやや弧状の沈線を破線状に横位に4本巡らしている。2185～2193は、口縁部が肥厚するものである。2185～2187は、棒状工具の押圧による刻みのある突起を4か所に有するものである。2185は、口縁部から頸部に、

両端に刺突文のある沈線を破線状に横位に4本巡らしている。2186は、口縁部から頸部に、巻貝殻頂部による刺突文を横位に連続的に上下2段施し、その間に両端に刺突文のある横位の沈線を破線状に横位に4本巡らしている。2187は、口縁部から頸部に、横位の沈線を破線状に横位に3本巡らしている。横位の沈線の上下には、斜位